

# 富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)

——富沢遺跡第50～56次、山口遺跡第11・12次  
発掘調査報告書——

1990年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

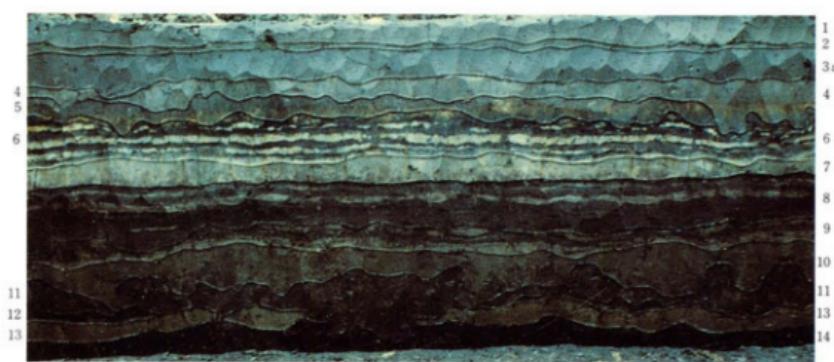
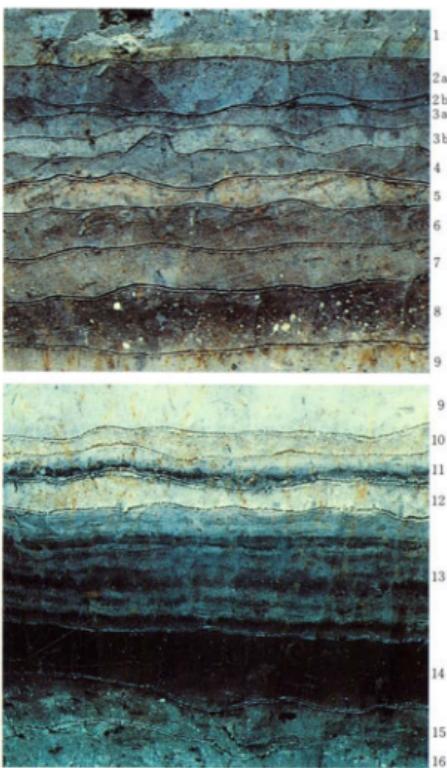
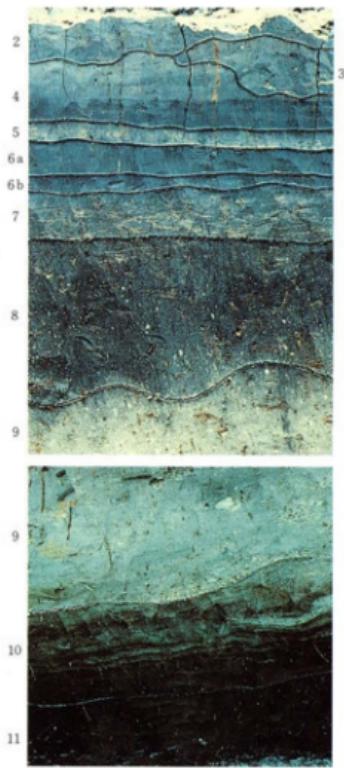
仙台市文化財調査報告書第135集

# 富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)

——富沢遺跡第50～56次、山口遺跡第11・12次  
発掘調査報告書——

1990年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

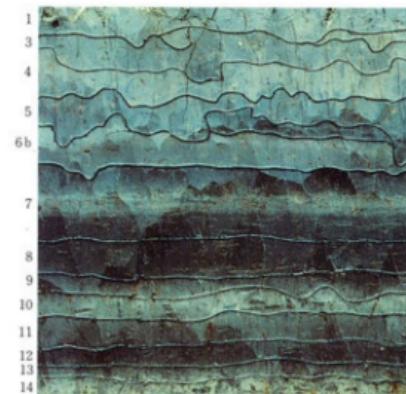




富沢遺跡第53次調査 10層水田跡



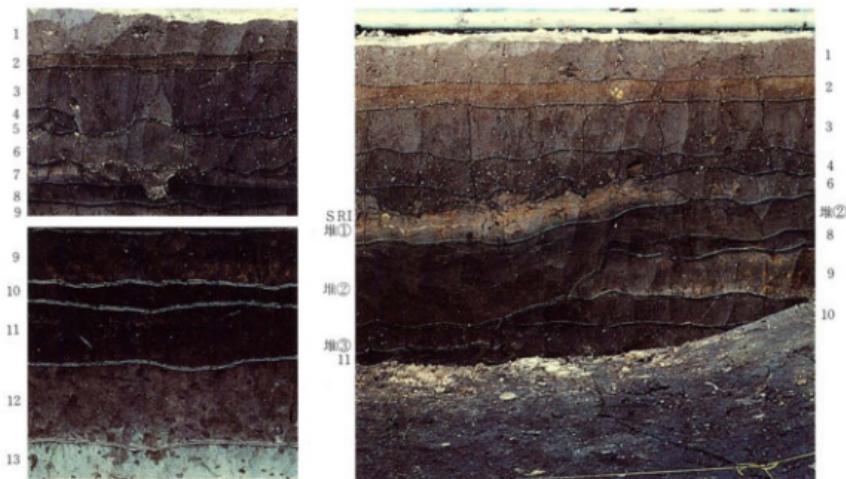
富沢遺跡第55次調査 SD 1・SR 1断面



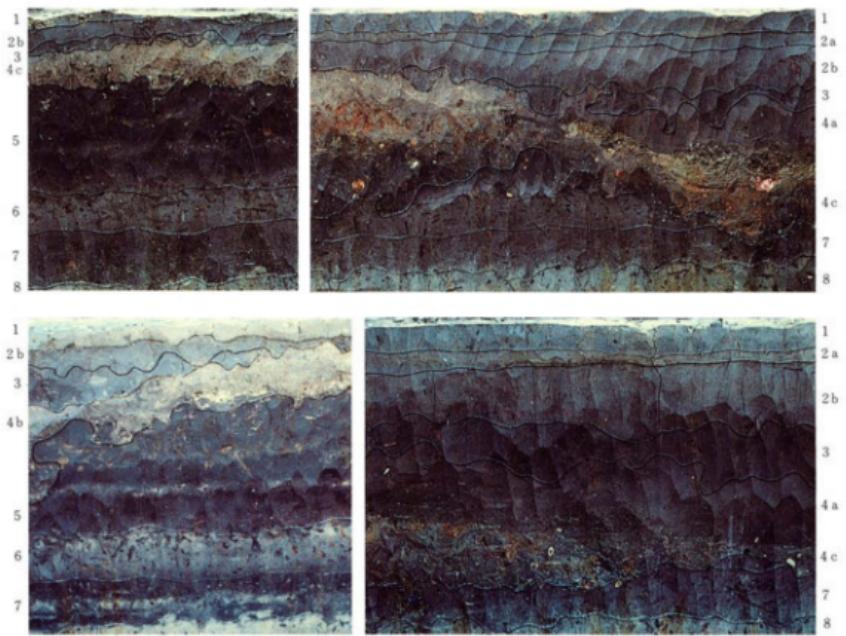
富沢遺跡第55次調査 基本層序



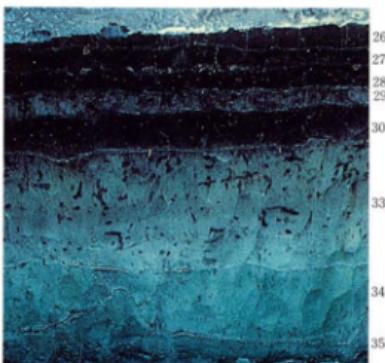
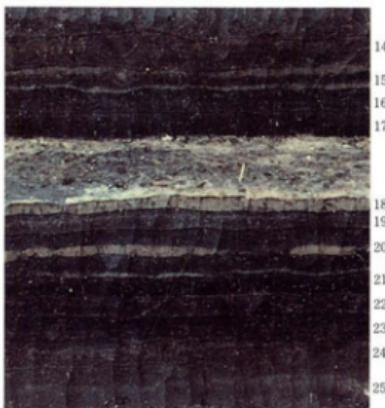
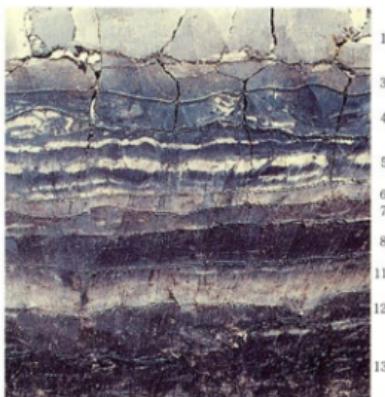
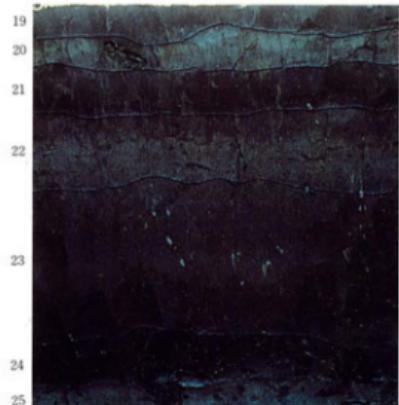
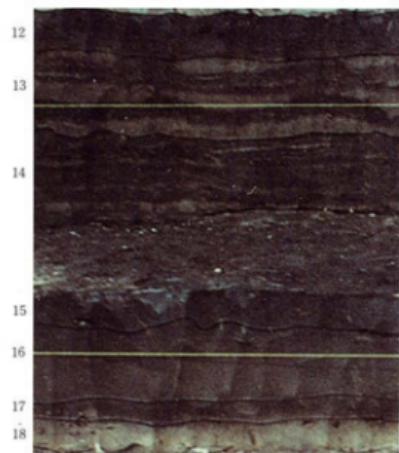
富沢遺跡第56次調査 基本層序



山口遺跡第11次調査 基本層序



山口遺跡第12次調査 基本層序



富沢遺跡第52次調査 基本層序

富沢遺跡第54次調査 基本層序

## 序 文

昭和57年、仙台市は山口遺跡において初めて水田跡を検出し、同年より開始した富沢地区の高速鉄道の試掘調査により当地域に広大な水田跡の存在を確認することができました。昭和58年これらの調査結果に地形的条件を加え新たに「富沢水田遺跡」を登録しました。(昭和62年「富沢遺跡」に改称)

富沢遺跡は仙台市南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積82ヘクタールに及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は昨年度まで49次に渡る調査が実施され、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡の検出は東北地方中部における稻作農耕の起源を解明する上で貴重な資料となっています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺物が確認され、さらにその下層からは2万3000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生きている状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄開業により、一層都市化が進んでいるところです。このような中にあって、平成元年度は富沢地区に所在する富沢遺跡、山口遺跡におきまして9件の発掘調査を実施致しました。本報告書はその調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序と致します。

平成2年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は、平成元年度富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡第50～56次、山口遺跡第11・12次発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 報告書刊行のための遺物整理は、文化財課調査係 佐藤甲二・中富 洋・平間亮輔・渡辺 雄二が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
3. 本書の編集は佐藤甲二・中富 洋が行った。
4. 関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、プラント・オバール分析を古環境研究所に依頼した。
5. 本文の執筆分担は下記のとおりである。

守田益宗：第2章第3節5

古環境研究所：第3章

佐藤甲二：第1章、第2章第1・2・4・6・7・8・9節、第4章

中富 洋：第2章第3・5節

6. 石器の材質の鑑定は、仙台市科学館 佐々木隆氏にお願いした。

## 凡　　例

1. 本報告書の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
2. 本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
3. 図中・本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。
4. 遺構名の略語として、SD：溝跡 SK：土坑 SR：河川跡を使用した。
5. 土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。
6. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。
7. 本文中の「擬似畦畔B」とは、水田畦畔の直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔状の高まりを指す（斎野：1987）。

## 目 次

第1章 宮沢・山口遺跡のあらまし.....	1
第2章 調査結果.....	9
第1節 宮沢遺跡第50次調査.....	9
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第2節 宮沢遺跡第51次調査.....	13
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第3節 宮沢遺跡第52次調査.....	17
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
5. 花粉分析	
第4節 宮沢遺跡第53次調査.....	28
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第5節 宮沢遺跡第54次調査.....	37
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第6節 宮沢遺跡第55次調査.....	43
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. 遺構の所属年代とまとめ	
第7節 宮沢遺跡第56次調査.....	48
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第8節 山口遺跡第11次調査.....	51
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第9節 山口遺跡第12次調査.....	55
1. 調査方法 2. 基本層序 3. 検出遺構と出土遺物 4. まとめ	
第3章 プラント・オーバール分析.....	81
第4章 宮沢遺跡南東部検出遺構の検討.....	87

## 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡.....	3・4	(宮沢遺跡第51次調査)	
第2図 宮沢・山口遺跡全体図.....	5・6	第7図 調査区位置図・設定図.....	13
(宮沢遺跡第50次調査)		第8図 基本層序.....	14
第3図 調査区位置図・設定図.....	9	第9図 4層上面平面・断面図.....	15
第4図 基本層序.....	10	(宮沢遺跡第52次調査)	
第5図 3層上面平面図.....	11	第10図 調査区位置図・設定図.....	17
第6図 南壁断面図.....	12	第11図 基本層序.....	18
		第12図 3層上面平面・断面図.....	20

第13図 6 a 層水田跡平面・断面図	21	(山口遺跡第11次調査)	
第14図 6 b 層水田跡平面・断面図	22	第40図 調査区位置図・設定図	51
第15図 出土遺物(1)	22	第41図 基本層序	52
第16図 出土遺物(2)	23	第42図 S R 1 平面・断面図	53
第17図 出土遺物(3)	24		
(富沢遺跡第53次調査)			
第18図 調査区位置図・設定図	28	第43図 調査区位置図・設定図	55
第19図 基本層序	29	第44図 基本層序	57
第20図 出土遺物	30	第45図 3層水田跡杭・横木位置図	58
第21図 4層水田跡平面図	31	第46図 3層水田跡杭断面図及び3、4層堆積状況	59・60
第22図 5層水田跡平面図	32	第47図 3層水田跡横木周辺平・断面図	61
第23図 10層水田跡平面図	33	第48図 3層水田跡杭列の属性別配置	65
第24図 各区画の水の流れ	33	第49図 出土遺物(1)	69
第25図 11層水田跡平面図	35	第50図 出土遺物(2)	70
		第51図 出土遺物(3)	71
(富沢遺跡第54次調査)			
第26図 調査区位置図・設定図	37	第52図 出土遺物(4)	72
第27図 基本層序	38	第53図 出土遺物(5)	73
第28図 出土遺物(1)	39	第54図 出土遺物(6)	74
第29図 10層水田跡平面図(1)	40	第55図 出土遺物(7)	75
第30図 10層水田跡平面図(2)	40	第56図 出土遺物(8)	79
第31図 10層水田跡断面図	41	第57図 杭打ち込み角度 0	80
第32図 出土遺物(2)	42	第58図 イネのプラント・オバールの検出状況	84
		第59図 富沢遺跡第1次・8次・55次調査区位置図	
(富沢遺跡第55次調査)			
第33図 調査区位置図・設定図	43	第60図 第55次調査区(S R 1)・第1次調査区(S D 2)・第8次調査区(S D 6)配置図	
第34図 基本層序	44		
第35図 S D 1, S R 1 平面・断面図	46		
第36図 出土遺物	47		
(富沢遺跡第56次調査)			
第37図 調査区位置図・設定図	48		
第38図 基本層序	49		
第39図 S R 1 平面図	50		

## 表 目 次

第1表 漢跡地名表.....	2
第2表 平成元年度富沢・山口遺跡調査要項.....	7・8
(富沢遺跡第52次調査)	
第3表 1層出土陶磁器分類表.....	23
第4表 花粉分析結果	
(富沢遺跡第53次調査)	
第5表 10層水田跡区画計測表.....	33
第6表 11層水田跡区画面積.....	35
(山口遺跡第12次調査)	
第7表 杭の最大幅別個数量表.....	62
第8表 杭の属性別数量.....	62
第9表 杭の属性間の関係.....	62
第10表 杭列別杭属性表.....	66
第11表 杭列別杭復元全長数量表.....	67
第12表 3層水田跡出土杭・横木観察表①～③.....	75～77
第13表 プラント・オバール分析結果.....	82
第14表 富沢遺跡および川口遺跡の各層位における種作の可能性.....	83
第15表 富沢漢跡第1次・8次・55次調査区層位対応表.....	89
第16表 富沢遺跡第52次～第56次、山口遺跡第11次・第12次調査出土遺物集計表.....	90

## 写真図版目次

►遺構		写真5 富沢遺跡第52次調査	
写真1 富沢遺跡第50次調査		6 a 層水田跡.....	95
3層上面段差部分.....	94	写真6 富沢遺跡第54次調査	
写真2 富沢遺跡第51次調査		11層水田跡.....	95
4層上面小溝跡群確認状況.....	94	写真7 富沢遺跡第52次調査	
写真3 富沢遺跡第51次調査		6 c 層中石器出上状況.....	95
4層上面小溝跡群完掘状況.....	94	写真8 富沢遺跡第54次調査	
写真4 富沢遺跡第51次調査		11層水田跡石器出土状況.....	95
調査区東壁断面.....	94	写真9 富沢遺跡第53次調査	
		4層水田跡.....	96

写真10 富沢遺跡第53次調査	5層水田跡.....	96	写真28 山口遺跡第12次調査	3層水田跡杭配置.....	100
写真11 富沢遺跡第53次調査	4・5層水田跡大柱跡断面.....	96	写真29 山口遺跡第12次調査	3層水田跡杭配置及びS R I .....	101
写真12 富沢遺跡第53次調査	10層水田跡確認状況.....	96	写真30 山口遺跡第12次調査	3層水田跡杭配置及びS R I .....	101
写真13 富沢遺跡第53次調査	10層水田跡.....	96	写真31 山口遺跡第12次調査	3層水田跡第6杭列断面.....	101
写真14 富沢遺跡第53次調査	10層水田跡柱群断面.....	96	写真32 山口遺跡第12次調査	3層水田跡第1杭列断面.....	102
写真15 富沢遺跡第53次調査	10層水田跡.....	97	写真33 山口遺跡第12次調査	3層水田跡横木.....	102
写真16 富沢遺跡第53次調査	11層水田跡.....	97	写真34 山口遺跡第12次調査	3層水田跡横木.....	102
写真17 富沢遺跡第53次調査	4・5層水田跡大柱群、11層水田跡柱群断面	97	写真35 山口遺跡第12次調査	3層水田跡耕作上断面.....	102
写真18 富沢遺跡第55次調査	S R I 確認状況.....	98	▶遺 物		
写真19 富沢遺跡第55次調査	S R I 完掘状況.....	98	写真42 富沢遺跡第52次調査	出土遺物.....	103
写真20 富沢遺跡第55次調査	S D 1・S R I 断面.....	98	写真43 富沢遺跡第54次調査	出土遺物.....	104
写真21 富沢遺跡第55次調査	S D 1・S R I 断面拡大.....	98	写真44 山口遺跡第12次調査	出土遺物(1).....	104
写真22 富沢遺跡第56次調査	S R I 断面.....	99	写真45 山口遺跡第12次調査	出土遺物(2).....	105
写真23 山口遺跡第11次調査	S R I 確認状況.....	99	写真46 山口遺跡第12次調査	出土遺物(3).....	106
写真24 山口遺跡第11次調査	S R I 完掘状況.....	99	写真47 山口遺跡第12次調査	出土遺物(4).....	107
写真25 山口遺跡第11次調査	S R I 断面.....	99	▶分 析		
写真26 山口遺跡第12次調査	3層水田跡上面状況.....	100	写真48 富沢遺跡第52次調査		
写真27 山口遺跡第12次調査	4層上面状況.....	100	写真49 富沢遺跡第52次調査	花粉顯微鏡写真(1).....	108
			写真50 富沢遺跡第52・53次調査	花粉顯微鏡写真(2).....	109
				プラント・オーバル顯微鏡写真.....	110

## 第1章 富沢・山口遺跡のあらまし

富沢遺跡は仙台市西部の仙台市太白区長町南・富沢・泉崎他に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西に位置する。遺跡は主に低平で湿潤な後背湿地を中心とし、西方を丘陵地、他の三方を自然堤防によって囲まれている。なお、遺跡内西側中央部には、西方丘陵部から東へ延びる微高地が広がっている。遺跡の総面積は約82haで、標高は9～16mである。昨年度まで49次に渡る調査が実施されている。その結果、奈良時代を除く弥生時代から近代までの各時代の水田跡が検出されている。これら各時代の水田跡は、一地点で重層し検出される。また、水田跡以外には中世の居住城や縄文時代・後期旧石器時代の遺物・遺構も検出されている。

山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流旧荒川の北岸の自然堤防上に位置する。遺跡面積は約16haである。遺跡範囲の北側では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含む。縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡として登録されている遺跡である。昨年度まで10次に渡る調査が実施されている。その結果、自然堤防上部分では上記時代の住居跡が、また、後背湿地部分では古墳時代・平安時代・中世の水田跡が検出されている。

なお、富沢遺跡・山口遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）・山口遺跡第2次調査報告書（田中：1984）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

### 水田跡の認定基準

現在、富沢地区の水田跡の認定基準は、以下のような前年度富沢地区調査報告書（平間他：1989）での①～⑤の基準に、新たに⑥・⑦を加えたものとしている。

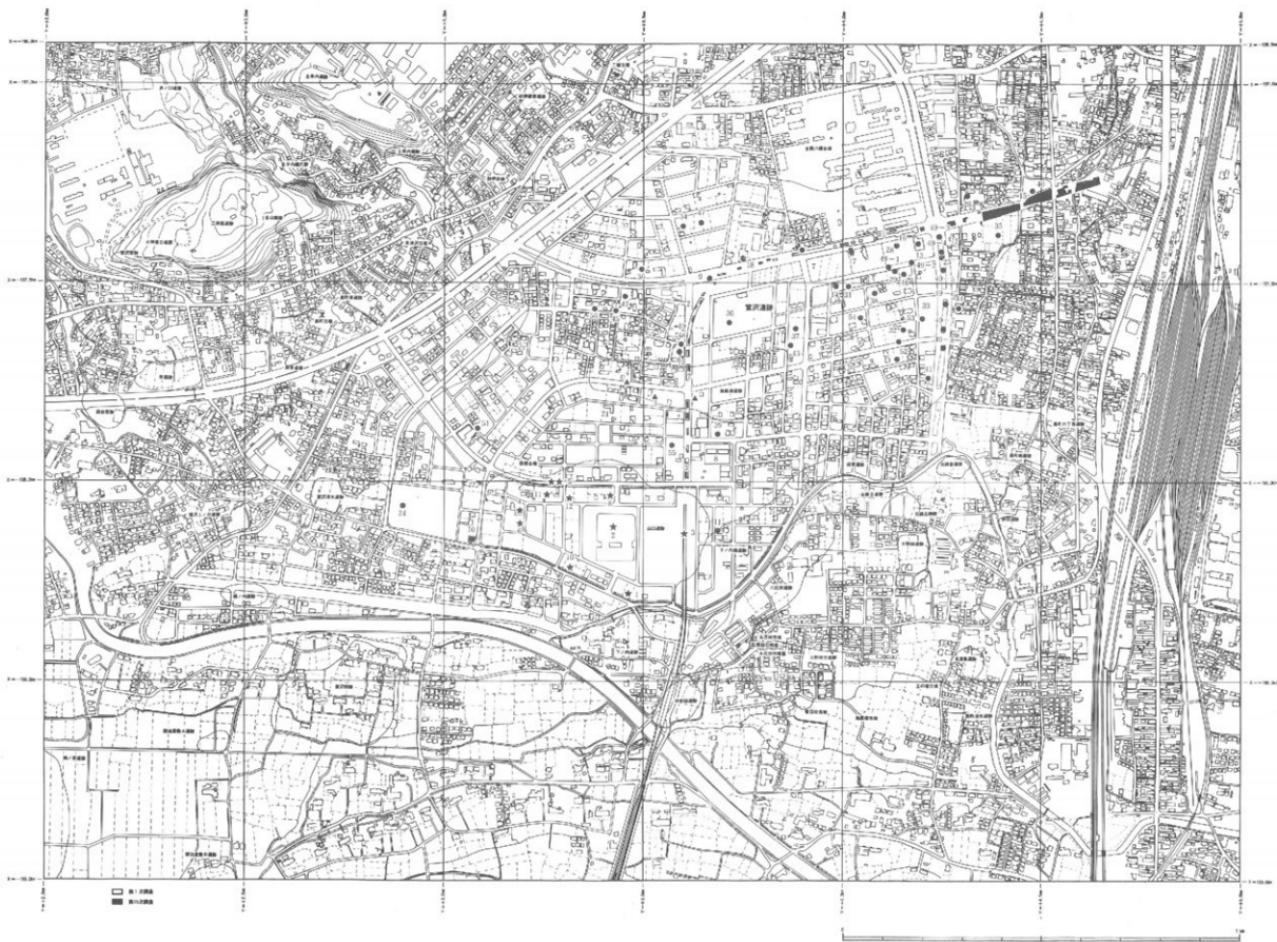
- ①上面で畦畔が1条以上、平面的に確認されたもの。
  - ②畦畔が検出されなかったものの、直下層上面で擬似畦畔Bが平面的に確認されたもの。
  - ③畦畔、擬似畦畔Bとも検出されなかったものの、周辺の既検出水田跡との層位の対応ができるもの。
  - ④畦畔、擬似畦畔Bとも検出されなかったものの、近接・平行した2条の杭列が検出され、しかも水田区画の存在が想定されるもの。
  - ⑤他層（主に自然堆積層）との境界が平面的に直線的な方向をもってとらえられ、しかも断面観察によって境界部の水田土壤と母材となる層との関係が明確なもの。
- ただし、これら①～⑤の認定基準に関しては、一般的に該当層の下面に細かな凹凸が認められること、下部に直下層を起源とするブロックを有することを前提としている。

第1表 遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	年代	%	遺跡名	立地	年代
1	蓋代遺跡	後背高地	周文~近世	58	金岡八幡山遺跡	後背高地	古墳
2	山西上ノ山遺跡	段丘	旧石器(後)・周文(早)・(後)平安・近世	59	新宮古墳	後背高地	古墳
3	北崩遺跡	段丘	旧石器(後)・周文(早)・(後)平安・近世	60	東御前遺跡	自然變動、後背高地	周文・小噴・平安・近世
4	上山遺跡	段丘	周文	61	山川遺跡	自然變動、後背高地	周文(早)・(後)・(後)平安・古墳・奈良・平安・中世
5	内出山遺跡	段丘	周文	62	下ノ内出遺跡	自然變動	奈良・平安
6	円田遺跡	段丘	平安	63	新宮遺跡	自然變動	古墳・平安
7	高野西遺跡	段丘	周文	64	伊方庄遺跡	自然變動	古墳・平安
8	竹の内側遺跡	段丘	奈良・平安	65	トノ内遺跡	自然變動	周文(中・後)・物生・平安
9	武藏山遺跡	段丘	遷久	66	穴庭庄遺跡	自然變動	古墳
10	町遺跡	段丘	周文	67	荒坂山古墳	自然變動	古墳
11	山川失走遺跡	段丘	奈良・平安	68	正之庄木造施	自然變動	古墳
12	唐原原東遺跡	段丘	遷久・平安	69	荒坂庄古墳	自然變動	古墳
13	谷生山遺跡	段丘	平安	70	元安庄遺跡	自然變動	奈良・平安
14	保山遺跡	段丘	奈良・平安	71	大野庄1号墳	自然變動	古墳
15	八幡西遺跡	段丘	平安	72	大野庄2号墳	自然變動	古墳
16	上野遺跡	段丘	遷久(中)・奈良・平安	73	赤坂山遺跡	自然變動	古墳
17	船原原跡	段丘	周文	74	鳥居谷古墳	自然變動	古墳
18	西ノ東遺跡	自然變動、後背高地	物生・奈良・平安(中噴)	75	安久磨遺跡	自然變動	奈良・平安
19	富山山西遺跡	自然變動	奈良・平安	76	前原山遺跡	自然變動	奈良・平安
20	笠置山遺跡	丘陵斜面	古墳・奈良・平安	77	武角六丁目遺跡	自然變動	奈良・平安
21	三河峯遺跡	段丘	遷久(中・前)	78	御所遺跡	自然變動	奈良・平安
22	三井峯古墳群	段丘	古墳	79	大野山遺跡	自然變動、後背高地	周文(後期)・物生
23	今山遺跡	丘陵斜面	古墳	80	北原遺跡	自然變動、後背高地	奈良・平安
24	土手ノ下遺跡	段丘	周文・奈良・平安	81	元安城木造遺跡	自然變動	古墳?
25	千手ノ原遺跡	丘陵斜面	古墳・奈良・奈良	82	手の平寺遺跡	自然變動	古墳
26	御井原敷遺跡	段丘	奈良・平安	83	御所遺跡	自然變動	奈良・平安
27	西台遺跡	段丘	奈良・平安?	84	西台山遺跡	自然變動	物生・古墳
28	荒瀬跡	段丘	奈良・古墳・平安	85	高山遺跡	自然變動、後背高地	主墳・奈良
29	草束遺跡	段丘	古墳・奈良・平安	86	北日城跡	自然變動	奈良・瓦砾
30	御所古墳	古墳		87	御所井古墳群	自然變動	難倉(奈良)
31	御所東遺跡	段丘	平安	88	丸久須跡	自然變動、後背高地	古墳・奈良・平安
32	合洗沢古墳	段丘	古墳	89	毛利吉野跡	難倉(奈良)	
33	御井原敷	段丘	古墳	90	北原古墳群	難倉(奈良)	
34	二摩古墳	後背高地	古墳	91	六間裏古墳群	難倉(奈良)	
35	蓋代ノ山遺跡	段丘	周文・平安	92	籠ノ越遺跡	自然變動	古墳・奈良・平安
36	高野山遺跡	自然變動	奈良・平安	93	火ノ上ノ遺跡	自然變動、後背高地	古墳・奈良・平安
37	御井原敷古墳	後背高地	周文	94	火ノ上ノ古墳	自然變動	古墳・奈良・平安
38	六糸堀遺跡	自然變動、後背高地	奈良・平安	95	森田園寺少室跡	自然變動	奈良
39	鷲山能登古道跡	自然變動、後背高地	周文・奈良・平安	96	南条塚寺寺跡	自然變動	奈良
40	高野山遺跡	自然變動、後背高地	奈良	97	後醍醐寺遺跡	自然變動	古墳(後醍醐)
41	白山山麓遺跡	丘陵	周文(中噴)	98	福原古墳	自然變動	古墳
42	愛宕山山麓古跡	丘陵斜面	古墳・奈良	99	御所城跡	自然變動	中噴・瓦砾
43	幸山・丁目遺跡	丘陵	奈良・平安	100	向小原遺跡	自然變動、後背高地	物生・古墳・奈良・平安・中噴
44	二ノ川遺跡	丘陵	周文	101	浅見山遺跡	自然變動	古墳(中噴)
45	八木山跡	丘陵	周文・奈良・平安	102	御所松井御古墳	冲縄平野	古墳
46	森ノ丘古墳跡	丘陵	周文・奈良・平安	103	御台東塚墓跡	後背高地	奈良
47	森ノ丘古墳跡	丘陵	周文	104	御所古墳	後背高地	古墳
48	茂・柳城跡	丘陵斜面及び斜面	白山城・奈良	105	今泉遺跡	自然變動	物生・古墳・平安・瓦砾
49	大寺寺跡	丘陵斜面	古墳末・奈良	106	那古新田跡	古墳	物生
50	那津寺御穴跡	丘陵斜面	古墳・奈良	107	下西田割御堂古墳	竹林地帶	主墳(後醍醐)
51	御原古墳	丘陵斜面	周文	108	仙吉大塚古墳	自然變動	古墳
52	二ノ森穴跡	丘陵		109	伊豆野澤古墳	自然變動	古墳
53	地保古墳	自然變動	古墳	110	安久満古墳	自然變動	古墳
54	小地保古墳	自然變動	古墳	111	毫波跡	自然變動	古墳
55	篠野原塚跡	段丘	石積・奈良・平安	112	安久美遺跡	自然變動	物生・中噴
56	篠野・丁目遺跡	段丘	周文・奈良・平安	113	篠野古墳	自然變動	古墳
57	一保古墳	後背高地	古墳	114	後河原遺跡	自然變動、後背高地	物生・平安・中噴



第1図 周辺の道路



第2図 富沢・山口遺跡全体図



調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	杭 A 座標	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢第50次	長町七丁目23-13	平成元年5月22日～5月27日	約12m <sup>2</sup>	後背湿地	北 部	X = -197.402844km Y = + 3.907895km	宅 地	11.26m	10.28m	小曾根 茂	佐藤 淳
富沢第51次	泉崎二丁目19-8	平成元年6月12日～7月22日	約37m <sup>2</sup>	後背湿地	南 西 部	X = -197.846456km Y = + 3.081595km	宅 地	15.30m	14.53m	佐藤 鶴子	佐藤 甲二
富沢第52次	長町南三丁目14-7	平成元年6月15日～7月28日	約107m <sup>2</sup>	後背湿地	東 部	X = -197.678790km Y = + 4.132509km	烟 地	10.40m	8.48m	鶴田 元松	中富 洋
富沢第53次	長町南三丁目10-3	平成元年7月19日～7月28日	約17m <sup>2</sup>	後背湿地	東 部	X = -197.616791km Y = + 4.153914km	宅 地	—	8.52m	木須 勇治	佐藤 甲二
富沢第54次	長町南三丁目7-1	平成元年8月22日～9月26日	約90m <sup>2</sup>	後背湿地	東 部	X = -197.586592km Y = + 4.428106km	宅 地	10.57m	8.86m	高橋 司	中富 洋
富沢第55次	泉崎一丁目20	平成元年8月23日～9月1日	約18m <sup>2</sup>	後背湿地	南 部	X = -197.890063km Y = + 3.559739km	宅 地	11.90m	10.56m	山形銀行	佐藤 甲二
富沢第56次	泉崎一丁目7-16・17・25	平成元年9月20日～9月25日	約20m <sup>2</sup>	後背湿地	西 部	X = -197.562378km Y = + 3.377875km	宅 地	14.84m	14.04m	植野 安徳	佐藤 甲二
富沢第57次	長町南四丁目5-6・7・8	平成元年10月23日～12月1日	約75m <sup>2</sup>	後背湿地	中 央 部	X = -197.695096km Y = + 3.868863km	宅 地	11.18m	8.70m	庄子 春吉 小島 昭夫	太田 昭夫 中富 洋
山口第11次	富沢一丁目12	平成元年5月8日～5月23日	約43m <sup>2</sup>	後背湿地	北 西 部	X = -198.020480km Y = + 3.256351km	宅 地	13.02m	12.00m	鶴福栄産業	佐藤 甲二
山口第12次	富沢一丁目5-20	平成元年10月5日～11月24日	約114m <sup>2</sup>	後背湿地	北 部	X = -198.049546km Y = + 3.308681km	宅 地	13.52m	11.74m	東急不動産	佐藤 甲二

第2表 平成元年度富沢・山口遺跡調査要項

## 第2章 調査結果

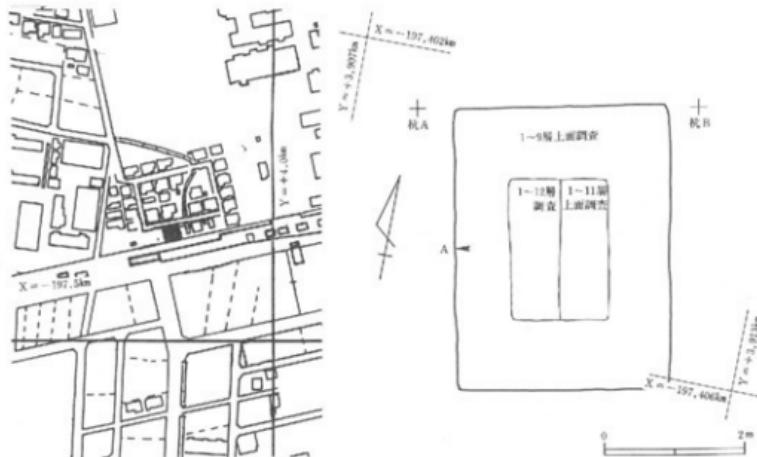
### 第1節 富沢遺跡第50次調査

#### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約  $4 \times 3\text{ m}$  ( $12\text{ m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は9層上面までは、調査区全面の精査を実施し、9層以下は、約  $2 \times 1.5\text{ m}$  の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A： $X = -197.40284\text{km}$ 、 $Y = +3.90789\text{km}$  杭B： $X = -197.40208\text{km}$ 、 $Y = +3.46800\text{km}$ ）。

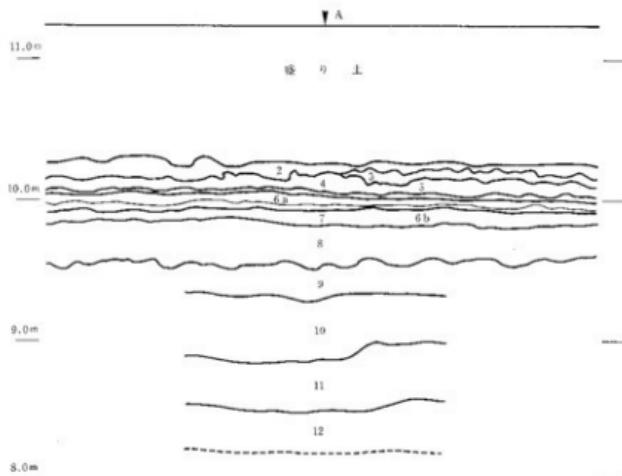
#### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別12層、細別では13層が確認された。1層は盛土の際の削平のためか、一部分にしか認められない。各層の土質は3層までは粘土である。4層以下は泥炭分



第3図 調査区位置図・設定図

を多量に含む泥炭質粘土を主とするが、9層以下では、砂あるいは砂礫との互層状況となる。グライ化は、9層以下から漸次進む。現代のものを除く明確な水田土壤は検出されなかつた。しかし、2・3層はともに下面が著しく起伏し、下部に下層ブロックを巻き上げていることより、水田土壤の可能性が高い。3層中からは灰白色火山灰が検出されている。3層上面では緩い段差が認められたものの、各層の傾きに大きな変化は認められない。他地点との基本層序の対応関係では第28次調査区との対応が可能で、2・3層は第28次調査区3・4層にあたる。また、5・6a層は第28次調査区10e層・11a'層の可能性もある。



第4図 基本層序

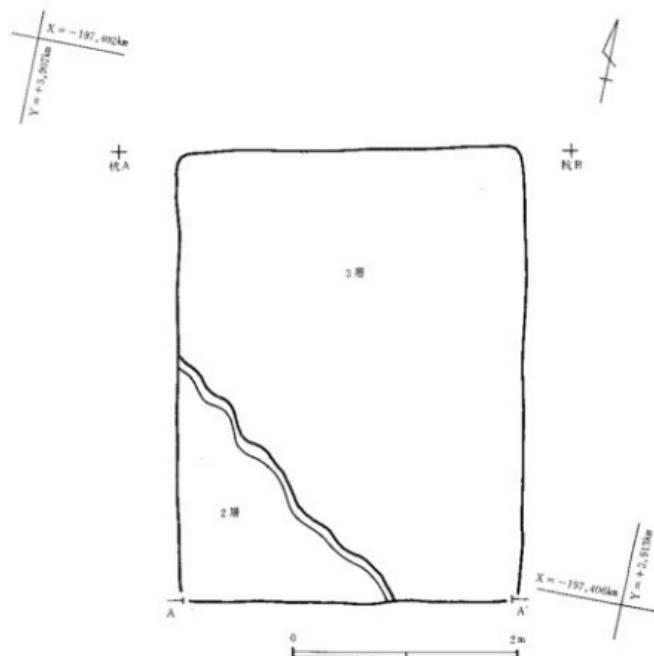
層序	土 色	土 質	厚 度	鉄 化 程	地 人 物	成 因	備 考
1	褐灰色	10YR 4/1 粘土	10cm前後	—	—	自然耕作(現代)	下部若干起伏、部分的分布
2	黑色	3 Y 2/1 粘土	2 cm - 1cm	—	伊・下田2層のビック	自然耕作	下部著しく起伏
3	黒褐色	2.5Y 3/1 粘土	8cm前後	—	灰白色火山灰ノット	古昔耕作	下部著しく起伏・部分的分布
4	淡褐色	10Y R 2/2 黑色	3cm ~ 15cm	—	—	丘層・自然堆積	下部著しく起伏
5	草褐色	10Y R 3/1 泥炭質粘土	4cm前後	常	—	自然堆積	—
6 a	褐色	10Y R 1.7/1 泥炭質粘土	2cm前後	—	—	自然堆積	下部著しく起伏
6 b	褐色	10Y R 1.7/1 泥炭質粘土	6cm前後	—	—	自然堆積	—
7	褐色	3 Y R 1.7/1 泥炭質粘土	10cm前後	—	—	丘層・自然堆積	—
8	赤色	10Y R 1.7/1 砂質シルト	30cm前後	—	6.5 ~ 1.5cmの鉄化細粒物質 多量	自然堆積	下部著しく起伏
9	暗オーブ赤色	2.5G 3/4/1 砂	40cm ~ 60cm	—	3cm程度の鉄化細粒物質 上部に多量	自然堆積	グライ化
10	黒褐色	2.5G 3/1 泥炭質粘土	40cm ~ 60cm	—	—	正斜・自然堆積	グライ化
11	黒褐色	2.5Y 3/1 泥炭質粘土	30cm ~ 40cm	—	—	自然堆積	—
12	暗オーブ赤色	2.5G 1/1 砂礫	—	—	3cm程度の鉄化細粒物質多量	自然堆積	グライ化

### 3. 検出遺構と出土遺物

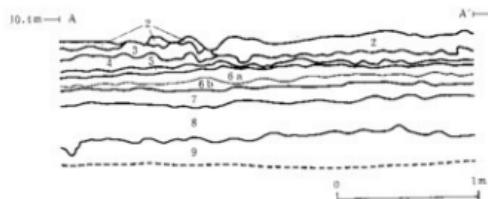
明確な遺構、遺物ともに検出されなかった。ただし、3層上面では、調査区南西側が2層により削平され分布せず、10cm前後の段差が生じている。この段差はN-52°-W方向へ直線的に延びている（第5・6図、写真1）。

### 4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 第50次調査では、明確な遺構、また各層の年代を示すような遺物の出土も皆無であった。しかしながら、層相及びイネのプラント・オパール分析結果より、2・3層はとともに水田土壤の可能性が非常に高い。2・3層は東方約200mの第28次調査区（佐藤：1988）との層の対応が可能で、第28次調査区調査所見及びその後の修正、変更（佐藤：1990）より3層が平



第5図 3層上面平面図



第6図 南壁断面図

安時代（灰白色火山灰降下以降）、2層が近世という所属年代が想定される。

2. 3層上面の段差は2層が水田跡であった場合、水田区画間の耕作深度の差、すなわち水田区画間の水田面の比高差に起因する耕作上下面の段差とも考えられるが、調査面積が狭かったこともあり、性格については現段階において不明としておきたい。
3. 第28次調査区では、当調査区3層直下に平安時代以前の水田土壤の可能性のある層が1枚（第28次調査区5層）、さらに間層を挟んで下層に5枚（第28次調査区9a・10b・10d・11a・11c層）の弥生時代の水田土壤が続いていた。当調査区では3層下部に第28次調査区5層ブロックが確認されたが、弥生時代の水田土壤の広がりは全く認められなかった。

## 第2節 富沢遺跡遺跡第51次調査

### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約 $8.0 \times 4.5\text{m}$  ( $37\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は8層上面までは、調査区全面の精査を実施し、8層以下9層上面までは、調査区を $8.0 \times 4.5\text{m}$ にやや縮小した。また、9層以下は、約 $3 \times 2\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた（14層以下は約 $2.3 \times 2.0\text{m}$ 、16層以下は約 $1.6 \times 2.0\text{m}$ ）。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A : X = -197.84645km, Y = +3.08159km 杭B : X = -197.85374km, Y = +3.08683km）。

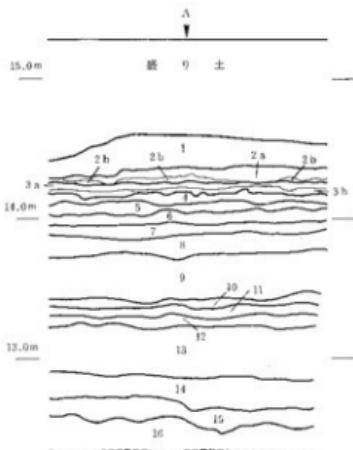
### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別16層、細別では18層が確認された。各層の土質は6層までは粘土、7層以下は砂と泥炭質粘土の互層を主とする。グライ化は、9層以下から漸次進み、16



第7図 調査区位置図・設定図

層では顯著である。現代のものを除く明確な水田土壌は検出されなかった。しかし、2a・3a・3b・4・5層の各層の下面起伏状況、並びにイネのプラント・オバール分析結果より、これら各層は水田土壌の可能性が高い。3b層中からは灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は2a・3a・3b層である。各層の傾きとしては、1~12層までの各層は、同様に緩やかな南方方向への下り傾斜を示す。



第8図 基本層序

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 4層上面

##### 小溝跡群 (第9図、写真2~4)

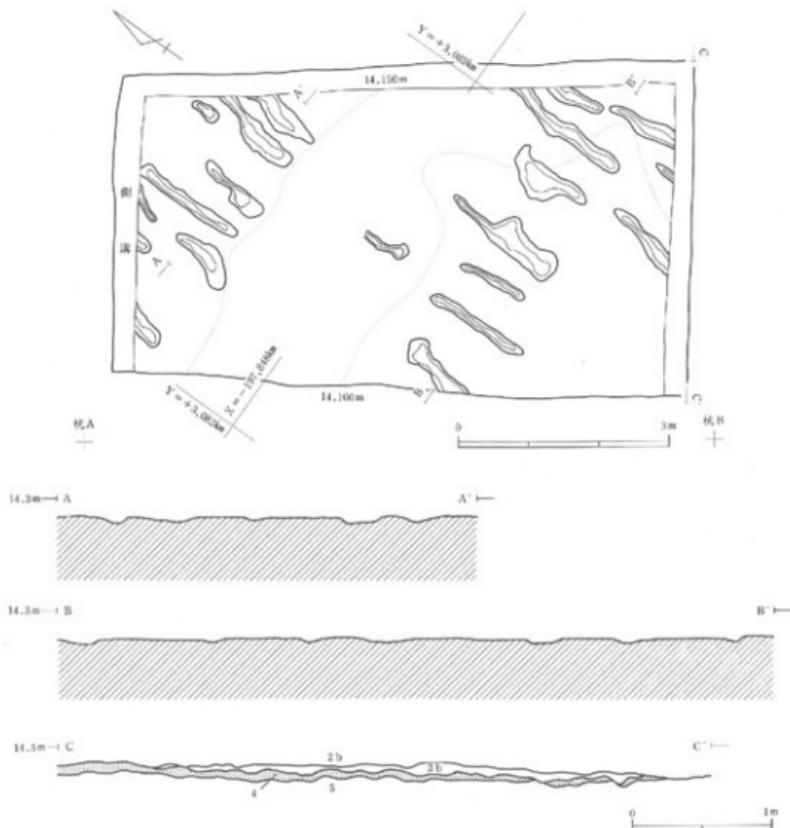
調査区のはば全域で20条検出された。ただし、SD 1~9とSD 11~20の間は2b層に上面を削平された可能性もあり、SD 10しか検出されなかった。これらはいずれも真北方向をとり、平行する小規模な溝で、それぞれ連続性に欠ける。形状は上端・下端とも不定型なものを主とする。上端全長約1.0~2.0m以上、上端幅約35~55cm、深さ約15~25cmで、断面形は「U」字状を呈する。底面は凹凸が著しい。溝間の距離(中央ライン間)

番号	色	土質	厚さ	鉄化度	黏入物	成因	特徴
1	黄灰色	2.5Y4/1	シート質粘土	20cm弱後	自然地盤	本山耕作(現代)	—
2a	黒褐色	2.5Y3/1	シート質粘土	15cm前後	有	ヘンガソ粘・風化物少・無	本山耕作?
2b	褐色	3.5Y2/1	粘土	5cm前後	有(少)	ヘンガソ粘・風化灰少	下部僅しく起伏・部分的分布
3a	褐色	3.5Y4/1	シート質粘土	5cm前後	有(少)	ヘンガソ粘・風化灰少	下部僅しく起伏・部分的分布
3b	黄灰色	2.5Y5/1	シート質粘土	5cm前後	有(少)	ヘンガソ粘・灰白色火山灰少	本山耕作?
4	褐色	5.5Y4/1	粘土	5cm~10cm	有	ヘンガソ粘・有	下部僅しく起伏
5	灰褐色	10YR5/3	粘土	5cm~10cm	1.5cmに巻粘	風化泥炭内包	本山耕作?
6	黒褐色	10YR7/2	シート質粘土	10cm前後	有	ヘンガソ粘・風化灰少	自然地盤
7	灰褐色	10YR5/3	砂	10cm前後	有	ヘンガソ粘・風化灰少	自然地盤
8	黒褐色	10YR2/2	シート質粘土	10cm前後	—	風化泥炭混入	自然地盤
9	灰褐色	10YR6/2	砂	20cm前後	有(少)	自然地盤	下部僅しく起伏・若干グリ化
10	黒褐色	2.5Y5/3	砂	5~10cm	下部に巻粘	自然地盤	下部若干起伏・若干グリ化
11	灰褐色	10YR7/2	泥炭質粘土	7cm前後	有(少)	—	有層・自然地盤
12	黑色	20YR1.7/1	砂	10cm前後	有(少)	風化泥炭岩ブロック	下部僅しく起伏・若干グリ化
13	灰褐色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	30cm~40cm	有(少)	—	有層・自然地盤
14	褐色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	20cm~25cm	—	—	自然地盤
15	褐色	10Y4/1	砂質シート	15cm~20cm	—	風化泥炭岩ブロック多量・有	下部起伏・若干グリ化
16	アーチーク褐色	3GY5/1	砂	—	—	自然地盤	若干グリ化

は約50~60cmで、55cm前後のものが多い。SD11~20の間は45~55cmのほぼ等間隔で並んでいる。いずれの堆積土も上層の3b層で、灰白色火山灰ブロックを含む。これらの小溝跡群は、3b層が水田跡の可能性があることより、この水田に伴う耕作痕の可能性もある。

## (2) その他の出土遺物

3b層中からは、赤焼土器か土師器か判別がつかない壺の底部破片が、1点出土したのみである。また、2a・3a層よりは土師器片・須恵器片・判別不能な素焼土器片が10点前後出土



第9図 4層上面平面・断面図

したのみである。いざれも図化不能な資料であったが、明確に中世以降に下るものは含まれていない。

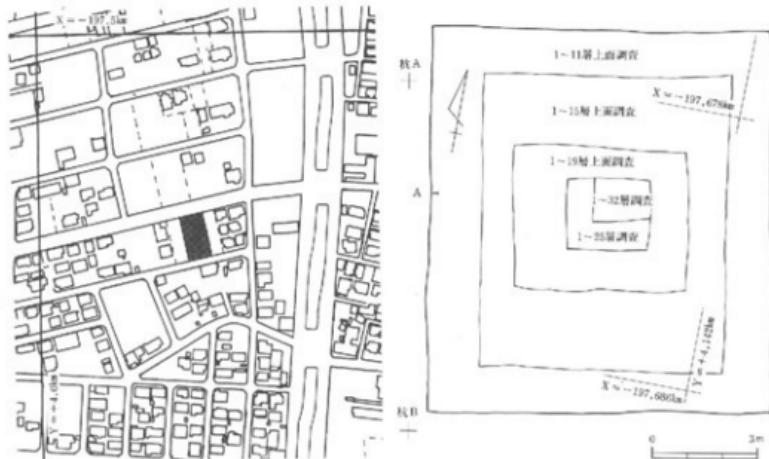
#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 第51次調査では、4層上面で小溝跡群が検出されたほかは、明確な遺構は検出されなかつた。しかしながら、層相及びイネのプラント・オパール分析結果より、2a・3a・3b・4・5層はいざれも水田土壤の可能性があり、中でも5層を除く各層はその可能性が非常に高い。
2. 各層の所属年代であるが、3b層中に灰白色火山灰が含まれる点並びに数量的には乏しいが3b層中及び上層出土遺物より、3b層は平安時代（灰白色火山灰降下以降）に属すると考えられる。従って、3b層より上層のものは平安時代以降、下層のものは平安時代以前の年代が想定される。
3. 4層上面検出の小溝跡群は、当初、畠跡に関連する遺構と考え、4層自体を畠耕作土と判断していた。しかしながら、
  - ①3a層・4層のプラント・オパール分析の結果、イネのプラント・オパールがいざれも高い数値を示したこと
  - ②溝跡方向が真北方向であり、3b層所属年代時の水田跡大畦畔方向（平間：1989）と密接な関連性が認められることより、これらの小溝跡群は3a層が水田跡で、耕作の際に何らかの農耕具によって耕作土下面（4層）に付けられた耕作痕とも考えられる。ただし、①に関しては4層がA. 水田が転用され畠となった場合B. 畠の肥料として種藁が使用された場合であれば当然分析結果に現れてくるものと考えられるので、4層の畠としての可能性を全く否定したものではない。

### 第3節 富沢遺跡第52次調査

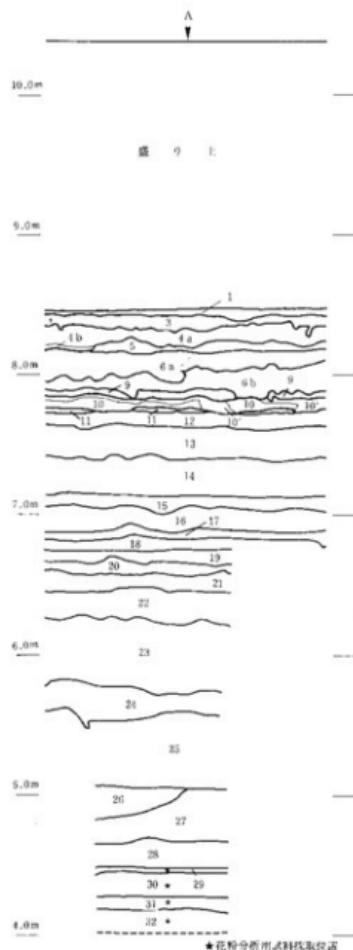
#### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約105m<sup>2</sup>である。調査は盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。2層上面から11層上面までは調査区全面の精査を実施した。11層以下15層上面までは安全確保のため、調査区を7×8.5mに縮小した。15層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた（19層までは5×4m、25層までは2.3×2m、25層以下は1.7×1m）。遺構の測量は杭A・Bを基準として実施したが、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の性格な位置を把握している（杭A：X = -197.67879km、Y = +4.13250km 杭B：X = -197.68862km、Y = +4.13434km）。



第10図 調査区位置図・設定図

## 2. 基本層序



今回の調査では盛土下に大別32層、細別では37層が確認された。これら各層の土質は以下のとおりである。1～6a層は粘土層であるが、シルト質を含む層もある。6c～15層は泥炭分を含む粘土層が主体をなすが、12層は発達した泥炭層である。16～25層は粘土層で、いずれも若干の植物遺体を含んでいる。26・27層は砂層及び砂礫層である。28～32層は粘土層である。グライ化は16層から漸次進み、25層以下では顯著である。現代のものを除く水田土壤は6a・6b層であるが、2・3・4a・4b・4c・5層も水田土壤の可能性がある。4a層中からは灰白色火山灰が検出されたが、これは下層のものが後の攪乱によって巻き上げられて混入したものと考えられる。なお、4層は色調の微妙な相違でa・b・cに分層したが、基本的には同一の層と考えられる。各層ともほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は1・3・4a・6a・6b・6c層である。

第11図 基本層序

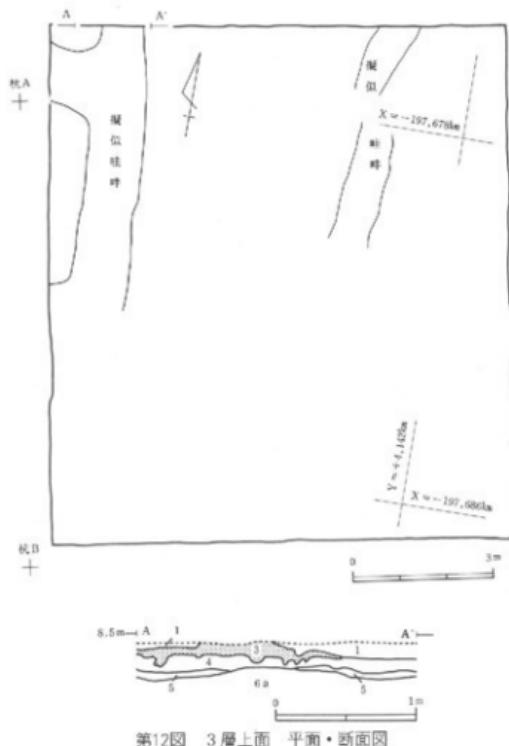
順序	土色	上質	層厚	鉱化度	流入物	成因	備考
1	灰色	7.3Y4/1	粘土	2 cm~24cm	—	水田耕作(現代)	—
2	灰褐色	10YR4/2	シルト質粘土	1 cm~13cm	有 少量	氯化物少量・氯化鉄鉄岩粉 水田耕作?	下面若干起伏・部分的分布
3	泥褐色	10YR3/1	粘土	2 cm~22cm	—	—	水田耕作? 下面起伏・不連續な分布
4 a	灰褐色	2.5Y5/2	シルト質粘土	2 cm~22cm	有 少量	アンガリ酸少量・3W白色火山 灰點	下面若干起伏
4 b	鐵斑灰	2.5Y5/1	シルト質粘土	2 cm~5 cm	有	アンガリ酸少量	4 a 層中に部分的分布
4 c	鐵斑褐色	2.5Y5/2	シルト質粘土	1 cm~3 cm	有	アンガリ酸少量	下面若干起伏・部分的分布
5	鐵斑灰	2.5Y5/1	粘土	4 cm~12cm	有	—	不連續・部分的分布
6 a	鐵斑黃褐色	2.5Y4/1	粘土	4 cm~28cm	有(多量)	—	水田耕作 下面起伏
6 b	鐵斑灰	10YR4/2	粘土	4 cm~42cm	有(少量)	植物遺体少量	水田耕作 部分的分布
7	灰褐色	2.5Y6/2	粘土	—	—	—	—
8	褐色	10YR6/1	粘土	2 cm~13cm	有	—	瓦砾・自然堆積 部分的分布
9	褐色	2.5Y5/2	粘土	2 cm~11cm	有	—	自然堆積 部分的分布
10	灰褐色	10YR6/1	粘土	4 cm~15cm	有	—	瓦砾・自然堆積 部分的分布
11	鐵斑灰	2.5Y5/3	粘土質粘土	2 cm~10cm	—	—	—
12	褐色	10YR1.7/1	泥炭	12cm~30cm	—	植物遺体 植物遺体多量	植物遺体 部分的分布
13	鐵斑灰	2.5Y4/2	粘土	17cm~32cm	—	植物遺体多量	瓦砾・自然堆積 —
14	褐色	2.5Y4/1	粘土質粘土	18cm~38cm	—	植物遺体多量	瓦砾・自然堆積 —
15	褐色	2.5Y4/1	粘土	1 cm~13cm	—	植物遺体少量	—
16	灰色	7.5Y4/1	粘土	16cm~20cm	—	植物遺体	自然堆積 弱い・グライ化
17	オーバーグレー	5.5Y3/1	粘土	4 cm~15cm	—	植物遺体	自然堆積 —
18	鐵斑灰	2.5G4/1	粘土	2 cm~18cm	—	植物遺体	自然堆積 グライ化
19	オーバーグレー	2.5Y3/1	粘土	6 cm~12cm	—	植物遺体少量	自然堆積 —
20	鐵斑オーバーグレー	2.5G4/1	粘土	4 cm~12cm	—	植物遺体	自然堆積 グライ化
21	灰色	7.5Y2/1	粘土	8 cm~16cm	—	植物遺体	自然堆積 —
22	灰色	7.5Y4/1	粘土	17cm~25cm	—	植物遺体	自然堆積 グライ化
23	褐色	7.5Y5/1	粘土	42cm~51cm	—	植物遺体	自然堆積 グライ化
24	オーバーグレー	2.5Y3/1	粘土	9 cm~20cm	—	植物遺体	自然堆積 —
25	鐵斑灰	5.5G4/1	粘土	45cm~60cm	—	植物遺体少量	自然堆積 グライ化
26	褐色	5.5G4/1	粘土	1 cm~24cm	—	植物遺体少量	自然堆積 グライ化
27	鐵斑灰	10G5/1	粘土	17cm~38cm	—	—	自然堆積 グライ化
28	鐵斑灰	10G6/1	シルト質粘土	16cm~21cm	—	—	自然堆積 グライ化
29	鐵斑灰	5.5G4/1	シルト質粘土	3 cm~4 cm	—	—	自然堆積 —
30	鐵斑灰	2.5Y5/2	シルト質粘土	16cm~15cm	—	上部に植物遺体を帯びる土	自然堆積 グライ化
31	鐵斑灰	2.5Y4/2	シルト質粘土	3 cm~10cm	—	植物遺体少量	自然堆積 グライ化
32	鐵斑灰	2.5G4/1	シルト質粘土	14cm~38cm	—	—	自然堆積 グライ化

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 3層上面

擬似畦畔(第12図)

〈構造状況〉 3層上面では畦畔状の高まりを検出した。3層自体も層下面の乱れやプランツ・オパール分析の結果から水田土壤の可能性が考えられるものの、この直上層の2層とともに1層段階での水田耕作による擾乱が及び、層の残存は不良である。従ってここで検出された畦畔状の高まりは3層に伴うものとは考えにくく、1層水田に伴う擬似畦畔Bと判断される。



第12図 3層上面 平面・断面図

## (2) 6a層上面

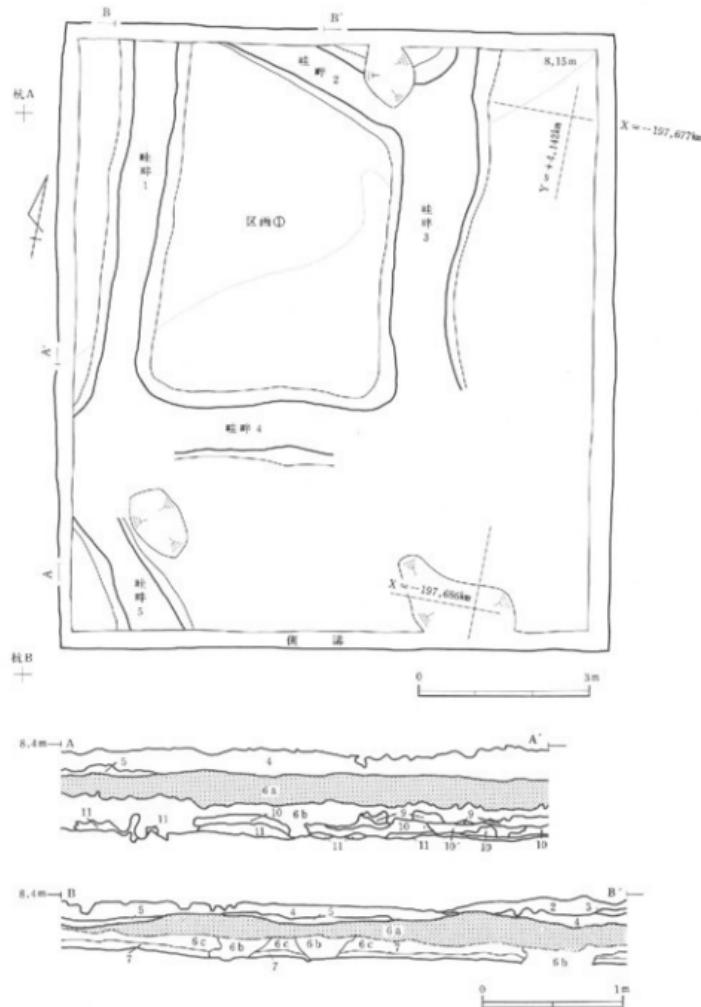
## 6a層水田跡

(第13図、写真5)

〈遺構状況〉 5条の畦畔(畦畔1・2・3・4・5)とこれらによって区画される水田区画(水田区画①)を一区画検出した。畦畔1は方向がN-3°-Wで、下端幅は1.0~1.3mである。耕作土上面からの高さは3~5cmである。畦畔2は方向がN-71°-W、下端幅0.8~1.0m、耕作土上面からの高さは2~3cmである。畦畔3は方向がN-3°-W、下端幅1.0~1.5m、耕作土上面からの高さは1~2cmである。畦畔4は方向がS-81°-W、下端幅1.1~1.3m、耕作土上面からの高さは1~2cmである。畦畔5は方向がN-39°-W、下端

幅0.9~1.2m、耕作土上面からの高さは1~2cmである。畦畔1・2・3・4は水田区画①を区画する。この区画はほぼ完全な検出と考えられるが、台形状の形状を呈し検出部分での面積は20.8m<sup>2</sup>である。水口は確認されなかった。畦畔はいずれも耕作土6a層を盛り上げて作られている。耕作土6a層は直下層の6b及び6c層と一部7層を母材とし、これらを攪拌することによって形成されている。土質は非常に粘性の強い粘土である。層厚は2~13cmで層下面には凹凸が認められる。全体的に耕作土の分解は良好とはいはず、層中のところどころに母材の6c・7層ブロックを含んでいる。酸化鉄は層中に管状斑が観察される他、層上面に集積している部分もある。下面での集積は認められない。水田面の標高は8.10~8.17mの間で、全体的に南東方向に緩やかに下っている。

〈出土遺物〉 耕作土中より土師器片（6点）、須恵器片（3点）が出土したが、いずれも小破片で図化し得るものはなかった。土師器片のうち器形の判かるものは3点で、全てロクロ使用の杯である。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。須恵器片は全て杯である。

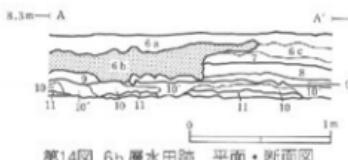


第13図 6a層水田跡 平面・断面図

## (3) 6 b 層上面

## 6 b 層水田跡

〈構造状況〉 耕作土のみで畦畔等は検出されなかったが、耕作域と非耕作域の境界が確認された。境界ラインは調査区内を南東方向に斜行し、この南側が 6 b 層の分布域（耕作域）で、北側は非耕作域と考えられる。耕作土 6 b 層は 6 c 層上面から 9 層までの土層を攪拌することによって形成された粘土層であるが、耕作深度の深い所では、一部 12 層まで及んでいる部分もある。層厚は 4 ~ 42cm で、下面には著しい凹凸が認められる。耕作土の分解は進んでいる。酸化鉄は層中に少量の管状斑を含んでいるが、層下面に集積は認められない。

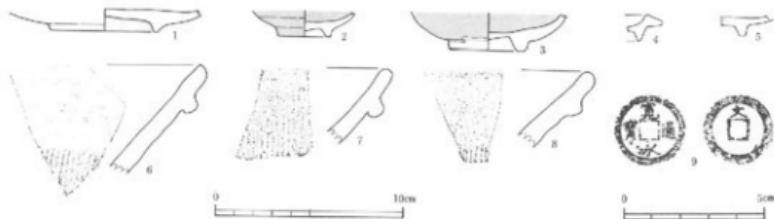


第14図 6b 層水田跡 平面・断面図

〈出土遺物〉 耕作土中より土器片 3 点が出土したが、國化が可能なもののは 1 点のみであった。第 15 図は甕の底部である。製作に際して、ロクロが使用されているかに関しては判然としない。他 2 点は破片が小さく、詳細は不明である。

第15図 出土遺物(1)

No.	遺構・部位	種別	器種	遺存度	直径(cm)	色調	特 標
1	6b層水田跡	土器片	甕	底部のみ	6.6	黄褐色	内面無釉



No.	区域番号	遺集・部位	種別	容積	裏存度	式形	特徴
1	写真42-5	1層	陶器	Ⅲ	底部約1/4	(5.6)	肥前・17世紀前半、染付、明緑底色の輪 相馬、灰白色の縁
2	写真42-7	1層	陶器	碗	下平約2/3	2.8	相馬、灰白色の縁
3	写真42-8	1層	陶器	碗	下平約2/3	4.1	相馬、灰白色の縁
4	写真42-3	1層	陶器	盃	底片	不明	相馬?、灰白色の縁
5	写真42-2	1層	陶器	皿	底片	不明	相馬、染付、灰白色の輪
6	写真42-1	1層	陶器	桶	桶身	不明	塗装?江戸末?輪赤褐色の縁
7	写真42-6	1層	陶器	桶	桶身	不明	塗装、江戸末?輪赤褐色の縁
8	写真42-4	1層	陶器	桶	桶身	不明	塗装、江戸末?輪赤褐色の縁
9	—	1層	古鉄	—	完形	—	新鉄未残

第16図 出土遺物(2)

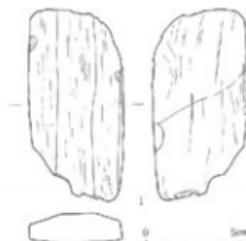
No.	種別	器形	產地	備考	No.	種別	器形	產地	備考
1	陶器	スリ跡	燒成?	(第16図6)	26	陶器	碗	相馬	18C後半以降~近世末
2	陶器	スリ跡	燒成	近世末?	27	陶器	蓋または蓋	相馬	13C以前 中世初期
3	陶器	瓶	相馬	(第16図5)	28	陶器	土びん	相馬	
4	陶器	瓶	相馬	近世	29	陶器	丸皿	志野	17C前半
5	陶器	瓶	相馬		30	陶器	桶	相馬	近世末
6	陶器	瓶	焼津系?	17~18C前半~齊天船	31	陶器	蓋または蓋	焼成	明治?
7	陶器	瓶	焼戸または美濃		32	陶器	碗	相馬	近世
8	陶器	不明	相馬?		33	陶器	碗	相馬	
9	陶器	皿?	不明		34	陶器	不明	相馬	
10	陶器	甕?	燒成?	明治以前	35	陶器	瓶	相馬	近世末~明治
11	陶器	不明	不明		36	陶器	瓶	相馬	
12	陶器	不明	燒成?		37	陶器	蓋または蓋	相馬	
13	陶器	瓶	相馬	18C後半以降~近世末	38	陶器	土びん	相馬	
14	陶器	スリ跡	焼成?	(第16図7)	39	陶器	丸皿	志野	
15	陶器	スリ跡	燒成	(第16図8)	40	陶器	桶	相馬	
16	陶器	瓶または度	美濃	近世	41	陶器	蓋または蓋	焼成	
17	陶器	瓶	相馬	(第16図2)	42	陶器	碗	相馬	
18	陶器	瓶	相馬		43	陶器	瓶	相馬	
19	陶器	土びん?	相馬		44	陶器	不明	相馬	
20	陶器	不明	河内		45	陶器	瓶	相馬	
21	陶器	瓶?	相馬?	(第16図4)	46	陶器	不明	相馬	
22	陶器	蓋または蓋	焼成		47	陶器	瓶?	相馬	
23	陶器	土びん?	相馬		48	陶器	ホリヨク	焼成	近世末、漆船
24	陶器	瓶	焼津系	18C	49	陶器	スリ跡	河内	近世末
25	陶器	不明	不明		50	陶器	蓋または蓋	焼成	明治
26	陶器	土びん?	相馬		51	陶器	瓶	不明	
27	陶器	不明	相馬		52	陶器	瓶	肥前	万世
28	陶器	土びん?	相馬?		53	陶器	碗	相馬	18C後半以降
29	陶器	不明	河内		54	陶器	碗	相馬	
30	陶器	瓶	相馬?	(第16図4)	55	陶器	蓋または蓋	美濃	近世
31	陶器	瓶	焼成		56	陶器	不明	相馬	
32	陶器	瓶	相馬	18C後半以降~近世末	57	陶器	不明	相馬	
33	陶器	瓶	相馬		58	陶器	不明	焼戸または美濃	近世
34	陶器	瓶?	相馬		59	陶器	瓶	焼戸または美濃	明治・染付
35	陶器	瓶	相馬		60	陶器	瓶	焼戸または美濃	明治・染付
					61	陶器	瓶	焼戸または美濃	明治以降・色繪
					62	陶器	碗	肥前	
					63	陶器	瓶	肥前	(第16図1)
					64	陶器	瓶	肥前	18C、酒器
					65	陶器	不明	相馬	明治以降・オブ
					66	陶器	瓶	焼戸または美濃	明治以降
					67	陶器	不明	焼戸または美濃	明治以降
					68	陶器	不明	焼戸または美濃	明治以降
					69	陶器	不明	焼戸または美濃	明治以降
					70	陶器	不明	焼戸または美濃	明治以降

第3表 1層出土陶磁器分類表

## (4) その他の出土遺物

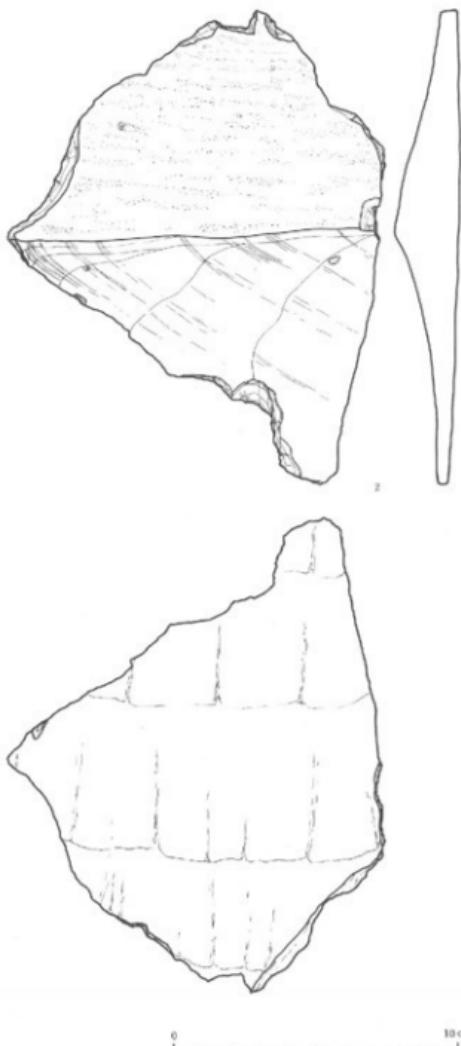
基本層1層からは胸器片（58点）、磁器片（12点）、金属製品（3点）、瓦片（2点）の他瓦質土器、石器、古銭が1点ずつ出土した。出土量が最も多いのは陶器・磁器類である。第16図1は肥前産の磁器で器種は皿、時期は17C前半に所属すると思われる。第16図2・3・4・5は相馬産の陶器で、器種は碗・蓋・皿である。いずれも近世に所属するものと考えられる。第16図6・7・8は全て堤焼（仙台）の鉄釉插鉢で、近世末頃のものと推定される。金属製品はキセル吸口、弾丸などである。石器はフレーク、古銭は寛永通宝（新寛永）である（第16図9）。

3層からは土師器片（3点）と胸器片（1点）が出土した。いずれも小破片である。土師器



No.	図版番号	遺構・辯位	名 称	長 さ(cm)	幅 さ(cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	石 質
1	写真42-10	4 a 層	延 石	10.2	5.1	1.7	100.5	砂岩
2	写真42-9	6 c 層	大型板状安山岩軸石器	16.9	13.3	2.3	326	安山岩

第17図 出土遺物(3)



片のうち器種が分かるものは1点のみである。ロクロ使用の壺で、内面黒色処理が施されている。陶器片は器種・産地ともに不明であるが、近世以降のものと考えられる。

4 a層からは土師器片（4点）、須恵器片（1点）、石製品（1点）が出土した。土師器片のうち器種の判別可能なものは3点である。2点はロクロ使用の壺で、内面黒色処理が施されている。もう1点は高台付壺で、ロクロが使用され内面黒色処理が施されている。須恵器片は器種不明である。石製品は砥石である（第17図1）。

6 c層からは大型板状安山岩製石器が1点出土した（第17図2、写真7）。加工は一面のみで、下部が刃部と考えられる。刃部の両面には使用痕と思われる光沢が認められる。なお6 c層は自然堆積層であり、この石器は他からの流れ込みの可能性もある。

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構は3層上面疑似畦畔、6 a層水田跡、6 b層水田跡で、その他水田跡の可能性がある層は2・4 a・4 b・4 c・5層である。

1. 3層上面で検出された畦畔状の高まりは、1層水田（現代）の畦畔直下が耕作による攪拌を免れた結果形成された擬似畦畔と考えられる。

2. 6 a層上面では5本の畦畔（畦畔1・2・3・4・5）と水田区画（水田区画①）1区画を検出した。水田区画①は面積20.8m<sup>2</sup>ほどの区画で、台形状の形状を呈する。水田の水口及びその他の水利施設等は検出されなかった。この水田跡の所属時期は灰白色火山灰のあり方や出土遺物から平安時代（灰白色火山灰降下前）と推定される。

3. 6 b層上面では畦畔等は検出されなかつたが、耕作域と非耕作域の境界が確認された。6 b層を水田耕作土と認定した根拠は次のようである。①層下面に著しい起伏が観察される。②層の断面観察で、自然堆積層6 c層上面から耕作を行ない耕作+6 b層を形成している様子が判読され、史に平面的にこの関係が確認された。③イネのプラント・オバール分析の結果4,300個と比較的高い数値が得られた。なお、耕作+6 b層の所属時期は、層の前後関係や出土遺物等から平安時代（灰白色火山灰降下前）以前と推定される。

4. 今回の調査では弥生時代の水田土壤は確認されなかつた。当調査区の北東方向約80mに位置する第53次調査区では、今年度2時期の弥生時代水田跡が検出されたが、その耕作域がここまで広がっていないことが認められた。

5. 水田調査終了後、下層の様相を探るために調査区中央部に試掘区を設定し、標高4 mまでの掘り下げを実施した。その結果、標高4.5m付近で、本調査区の北西約400mに位置する第30次調査区（報告書未刊）の19層に類似する土層、29層が確認された。この層は緑灰色のシル

ト質粘土で、非常に強いしまりをもつのが特徴である。第30次調査では19層下約50cm付近で旧石器時代の遺構、遺物を検出している。当調査区では遺構、遺物ともに検出されなかったが、第30次調査区との層位の関連を知る目的で、29層以下4層で花粉分析を実施した。その詳細は後掲のとおりであるが、含まれる花粉化石に二次堆積によるものが多く、第30次調査区との関連を指摘することはできなかった。

6. 水田の可能性が考えられるその他の層の時期は、出土遺物や灰白色火山灰のあり方から以下のように推定される。

2層 近世以降

3層 近世

4 a層 平安時代（灰白色火山灰降下以降）以降

5層 平安時代（灰白色火山灰降下前後）

## 5. 花粉分析

守田 益宗（東北大学理学部生物学教室）

花粉分析の試料は、29～32層からそれぞれ1試料を採取した。試料採取地点とその層位は第11図に示す如くである。試料は約50cmをKOH-HF-ZnCl<sub>2</sub>-Acetolysis法で処理した。花粉・胞子の同定は、顕微鏡の倍率を250～1250倍にして行い、必要に応じて位相差像の観察も行った。各試料とも花粉含量が少なかったため、処理して得られた全花粉・胞子を同定・記録した。花粉分析結果を第4表に示す。

29層は花粉・胞子含量が著しく少ない。30～32層では全花粉・胞子に対する高木花粉（第4表のPinus～Acer）の占める割合が約10～20%と低く、低木花粉（第4表のSalix～Viburnum）やシダ胞子（第4表のl-lete type FS～Lycopodium）の占める割合が高い。高木花粉ではFagusが最優勢を示し、Pinusがこれに次ぐ。30層ではPiceaも多い。低木花粉の大部分はAlnusが占める。草木花粉（第4表のGramineae～Cichorioideae）は、30層ではUmbelliferaeやCarduoideaeが、31・32層ではGramineaeが多い。また、LiquidamberやNyssaなど明らかに古い時代の二次堆積花粉が多数検出される。このことは、現生種と区別の困難な二次堆積花粉も多量に含むことを暗示している。したがって、29～32層堆積当時の古植生や古気候については論議できない。本層は、砂やシルト成分が多いこと、花粉含量が少なく二次堆積花粉を多く含むことから、洪水などにより短期間に堆積したものと考えられる。

本結果と類似した花粉組成は、本地区に隣接する第30次調査区の25・27・31層の一部でも認

められている。しかし、両者が同一時期のものかどうかは資料不足であり不明である。将来、本地区内で二次堆積花粉の影響の少ない資料が得られれば、古植生・古気候・第30次調査区との関係が明らかにできるであろう。

第4表 花粉分析結果

	29属	30属	31属	32属
<i>Pinus</i>	アツミ属	8	52	26
<i>Abies</i>	モミ属	2	5	2
<i>Picea</i>	トウヒ属	11	30	4
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	9	1
<i>Sciadopitys</i>	ロウヤマキ属		1	1
<i>Pterocarya</i>	サリダルミ属	2	4	1
<i>Betula</i>	シラカバ属	14	2	1
<i>Carpinus</i>	クマシダ属	1	4	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	2	77	67
<i>Quercus</i>	コナラ属	3	8	9
<i>Ulmus</i>	ユレ属		3	4
<i>Acer</i>	カエデ属		3	2
<i>Salix</i>	ヤナギ属			2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	2	43	15
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	5	257	241
<i>Alnaster</i>	マシャブシ属		9	6
<i>Ilex</i>	モチノキ属		7	10
<i>Eriaceous</i>	ツツジ科	1	13	7
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属		5	9
<i>Fragaceae</i>	トネリコ属			1
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属			1
<i>Gramineae</i>	イネ科	3	12	53
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科		12	6
<i>Typha</i>	ガマ属		1	2
<i>Bistorta</i>	イブキトラノオ属	1	2	
<i>Persicaria</i>	ナエニタデ属		10	
<i>Hemiontria</i>	イタドリ属			
<i>Thlaspiatum</i>	カラマツソウ属		15	16
<i>Songariorba</i>	ワレモコウ属		2	1
<i>Other Rosaceae</i>	バラ科		50	8
<i>Umbelliferae</i>	セリ科			1
<i>Centiana</i>	リンドウ属		1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		8	2
<i>Other Carduoideae</i>	キク亞科	2	38	20
<i>Cichorioideae</i>	タンボボ科			1
1-lete Type Ps	単条溝型胞子	43	165	119
3-lete Type Ps	三条溝型胞子	1	21	8
<i>Lycopodium serratum type</i>	トランシバ型		3	3
<i>L. inundatum type</i>	ヤチスギラン型	1		1
Other <i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ属		8	2
<i>Sphagnum</i>	スコケ属		3	1
Trees	高木	33	210	119
Shrubs	低木	8	334	292
Herbs	草木	6	151	110
Ferns	シダ	45	197	161
Unknown	不明	4	61	48
<i>Liquidambar</i>	フウ属	2	15	22
<i>Lagerstroemia</i>	サルスベリ属		1	
<i>Nyssa</i>	ヌミズキ属	2	27	16

## 第4節 富沢遺跡第53次調査

### 1. 調査方法

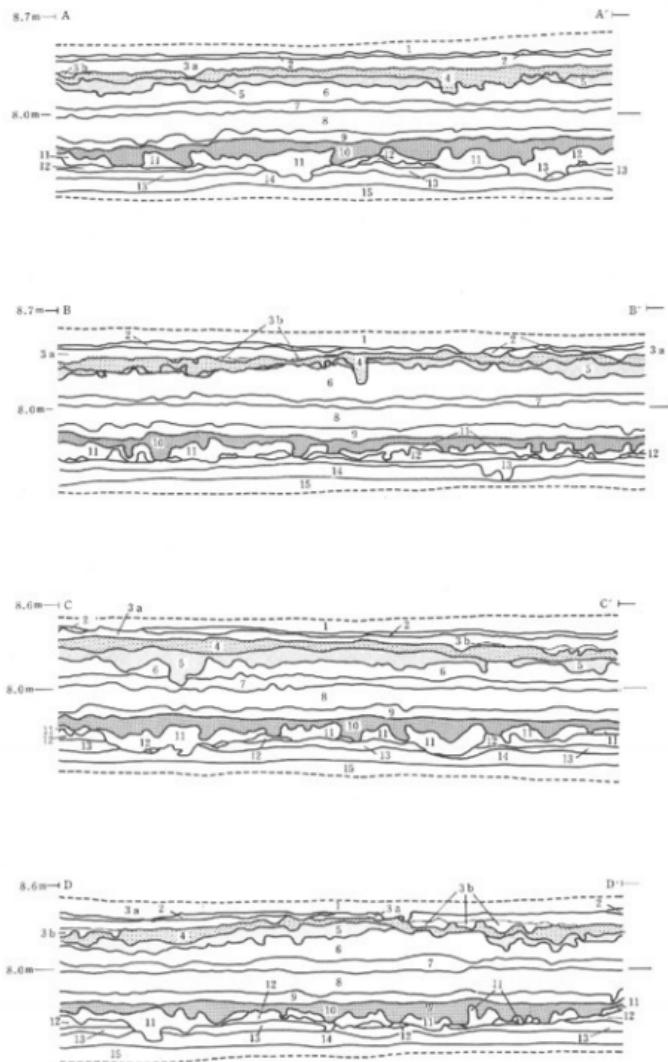
調査区の設定面積は約  $4 \times 4\text{ m}$  ( $16\text{ m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A : X = -197.61679km, Y = +4.15391km　杭B : X = -197.61511km, Y = +4.15967km）。

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別15層、細別16層が確認された。各層の土質は5層までが粘土、6層～13層までが粘土と泥炭の互層を基本とする泥炭質粘土、14層以下は泥炭である。現代のものを除く明確な水田土壤は4・5・10・11層の各層である。また、2・3a層の両層は、下面の起伏状況及び下層ブロックを巻き上げていることより、水田土壤の可能性が高い。遺物出土層は1・2・3a・4・5層である。4層中からは、灰白色火山灰が検出されている。全体的な層の傾きとしては、南西方向へのごく緩やかな下り傾斜を示す。なお、当調査区の基本層序は、隣接第28次調査区の基本層序と対応関係が認められる。



第18図 調査区位置図・設定図



第19図 基本層序

番号	土色	土質	厚さ	酸化性	注入物	法	備考	
1	黒色	5 Y 12/1	粘土	3cm~14cm	有・直下層上部 に基盤層	氯化鈉水溶液	水田耕作(現代)	下部若干乾燥
2	ベリーブルーン	5 Y 12/1	粘土	0.5cm~2cm	有(少量)	氯化鈉水溶液・下部に 泥炭・下部に下層ブロック	水田耕作?	下部起伏・不連續な分布
3 a	灰色	2.5 Y 12/1	粘土	1cm~10cm	有	下層ブロック・泥炭・氯化鈉 泥炭・下層に下層ブロック	水田耕作?	下部起伏
3 b	黑色	10 Y R 1.7/1	粘土	0.5cm~9cm	有	マンダリン粘	立層・自然堆積	本通路で立層的な分布
4	灰色	5 Y 4/1	粘土	0.5cm~22cm	有	マンダリン・灰白色大山灰(ブ ロック)・下部に下層ブロック	水田耕作	下部著しく起伏
5	砂褐色	2.5 Y 3/1	粘土	0.5cm~26cm	有	マンダリン・下部に下層のブ ロック	水田耕作	下部著しく起伏
6	灰ナガニ色	5 Y 6/2	粘土	1cm~28cm	着状態	立層・自然堆積	下部若干起伏・粘土成分が少	
7	灰褐色	10 Y R 1.7/1	泥炭	—	—	—	—	
8	暗灰褐色	2.5 Y 3/1	粘土	2cm~12cm	—	立層・自然堆積	下部若干起伏・泥炭成分が上	
9	灰褐色	10 Y R 1.7/1	泥炭	—	—	立層・自然堆積	下部若干起伏・粘土成分が半	
10	灰褐色	10 Y R 4/2	粘土	1cm~2cm	—	立層・自然堆積	下部若干起伏・粘土成分が半	
11	沙褐色	3.5 Y 3/1	泥炭質粘土	2cm~20cm	—	立層のブロック多量	下部著しく起伏・粘土成分が半	
12	黑色	10 Y R 1.7/1	泥炭	0.5cm~25cm	—	立層・自然堆積	不連續で部分的な分布・泥炭 成分が半	
13	灰褐色	10 Y R 5/2	泥炭質粘土	0.5cm~10cm	—	立層・自然堆積	粘土成分が半	
14	黑色	10 Y R 1.7/1	泥炭	1cm~12cm	—	立層・自然堆積	粘土成分が半	
15	黑色	10 Y R 5/2	泥炭	2cm~14cm	—	立層・自然堆積	—	

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 4層上面

##### 4層水田跡(第21図、写真9・11・17)

〈遺構状況〉大畦畔が1条検出されたのみである。畦畔の検出面は3a層中である。畦畔はほぼ東西方向をとり、直線的に延びる。畦畔は耕作土と同一土壤-4層-を盛り上げ作られている。下端幅は約2m前後で、耕作土上面からの高さは5cm前後である。耕作土の土質は粘土で、下面の起伏は顕著である。厚さは平均で10cm位である。下部では下層ブロックを含み、畦畔部分ではこれが著しく、下層の色調に近くなっている。耕作土中には灰白色火山灰の小ブロックが少量含まれている。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は8.30m前後で、全体的には南北方向の緩やかな下り傾斜を示すが、畦畔を挟んだ南北の水田面の比較では、南側の方がやや低くなっている。なお、畦畔上には水口は検出されなかった。

〈出土遺物〉畦畔の上面を中心として、土師器片・赤焼土器片が11点出土した。赤焼土器が主



No.	赤焼・變化	傳 約	形 種	遺存度	底 面	色 調	特	西
1	4層水田跡上面	土師器	杯	直底	5.4	灰白色	外縁・クロ開割・向左系切無開割、内縁・カキ・やや磨滅	
2	4層水田跡	赤焼土器	杯	約1/10	—	灰褐色	内縁・クロ開割	

第20図 出土遺物

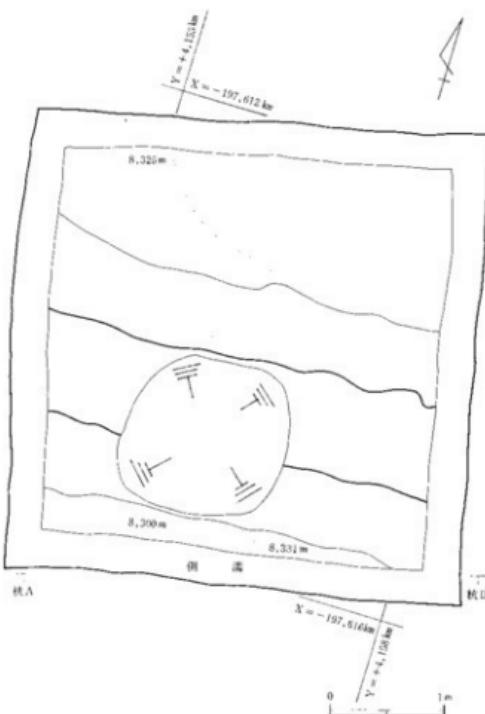
で、土師器は1点のみである。赤焼土器は6個体分程の資料と思われる。器種は全て壺で、図化できたものは第20図2のみであった。土師器はロクロ使用の壺の底部資料である(第20図1)。底部は回転糸切後無調整のもので、内面の調整及び黒色処理は不明である。

## (2) 5層上面

### 5層水田跡

(第22図、写真10・11・17)

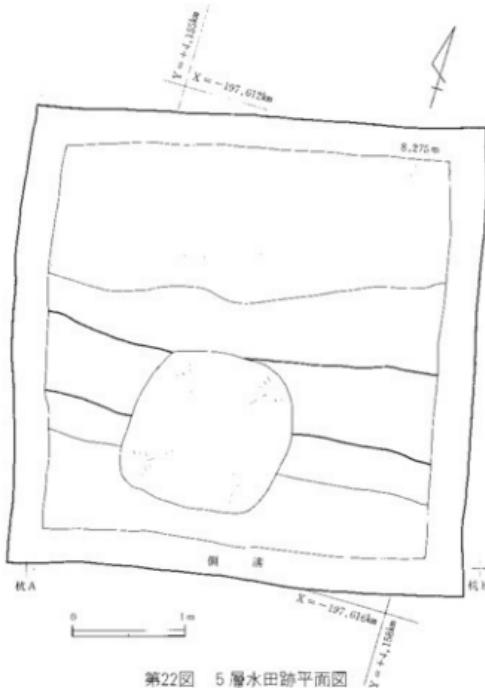
〈造構状況〉大畦畔が1条検出されたのみである。畦畔は4層水田跡の大畦畔の直下で検出され、位置・方向性・規模をほぼ同一とする。4層水田跡の耕作に伴う攪乱によって耕作土及び畦畔の遺存状態は悪い。畦畔は耕作土と同一土壤-5層-を盛り上げ作られている。下端幅は約1.5m前後で、耕



第21図 4層水田跡平面図

作土上面からの高さは5cm前後である。耕作土の土質は粘土であるが、直下層の泥炭質粘土である6層上部をも攪拌しており、下部では6層ブロックを多量に含む。下面の起伏は顯著である。直上層の影響で、耕作土の認められない部分もあるが、厚さは平均で8cm位である。畦畔部分では耕作が及ばなかったためか、直下の6層上部が擬似畦畔Bとなって残っている。耕作土下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は8.25m前後であるが、耕作土の削平が著しいため、水田面の傾斜・高低差については不明である。なお、畦畔上には水口は検出されなかった。

〈出土遺物〉畦畔の上部より赤焼土器が1点出土したのみである。壺の口縁部の小破片で、4層水田跡出土のもの(第20図2)と同一個体の可能性がある。上層からの混入の可能性も考えられる。



第22図 5層水田跡平面図

のは明確な連続性を示す。駐畔の交わり方は「+」状・「T」字状の両者が認められるが、前者のものが主体である。

〈駐畔の規模〉 駐畔は耕作土と同一土壤-10層-を盛り上げて作られている。下端幅は、約20cmから約70cmまでのものがみられるが、40cm前後のものを中心とする。耕作土上面からの高さは2~4cmである。なお、駐畔面積率は45%と極めて高い数値である。

〈水田1区画の形状と規模〉 15区画が検出されている(図版①~⑯)。この内、区画全体が明確に検出されたものは2区画(⑥・⑦)、復元可能なものは2区画(⑪・⑫)である。区画の形状は整形のものは少ないが、いずれも方形を基調としている。1区画の面積が判るものは0.4~0.9m<sup>2</sup>で、全て1m<sup>2</sup>を切る(第5表)。

〈耕作土〉 粘土を主とする泥炭質粘土で、下部では直下層の11層を巻き上げている。このため、耕作土の下面は起伏が顕著で、耕作土の厚さは3~20cmと安定していない。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。また、直下層上面には擬似駐畔Bは形成されていない。

〈水面面の傾斜〉 全体の水面面の標高は7.75~7.82mの間である。全体的な傾斜としては、南

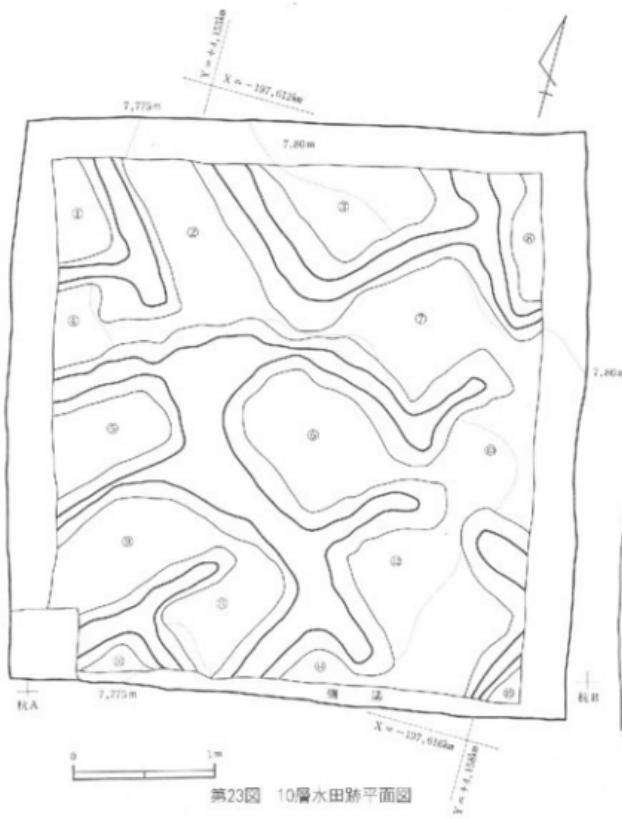
### (3) 10層上面

#### 10層水田跡

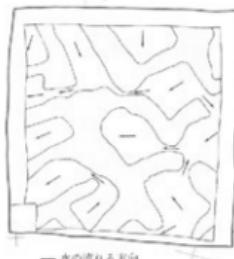
(第23・24図、写真12~15)

小駐畔による小区画の水田が15区画検出された。駐畔の検出面は自然堆積層である9層下部である。これらに伴う水路は検出されていない。また、出土遺物は皆無であった。

〈駐畔の配列〉 区画ごとの小駐畔は、水口によって断片的であったり、やや弯曲したものが多く、全体としての駐畔は、整然と直線的に連続する状態のものではない。しかしながら全体的な方向性は認められ、N-51°~55°-W方向のものとこれにはほぼ直交するN-33°~40°-E方向のものからなる。この内、北西-南東方向のもの



第23図 10層水田跡平面図



第24図 各区画の水の流れ

第5表 10層水田跡面積計測表

区画名	面 積 (a)	標 高 (m)	上面高底差 (m)	勾 配 (%)	水 口	備 考
①	0.24	7.771~7.773	0.2	0.23	不明	一部検出
②	0.66	7.779~7.798	1.9	1.46	2ヶ所	一部検出
③	0.50	7.787~7.814	2.7	3.86	不明	一部検出
④	0.18	7.788~7.777	0.9	2.25	1ヶ所	一部検出
⑤	0.39	7.755~7.769	1.4	1.47	不明	一部検出
⑥	0.79	7.756~7.773	1.7	1.79	1ヶ所	全面検出
⑦	0.68	7.775~7.802	2.7	2.70	2ヶ所	全面検出
⑧	0.13	7.801~7.814	1.3	3.71	1ヶ所?	一部検出
⑨	0.61	7.753~7.769	1.6	1.28	1ヶ所	一部検出
⑩	0.96	7.772~7.777	0.5	—	不明	一部検出
⑪	0.41	7.750~7.776	2.3	2.56	1ヶ所	復元可能
⑫	0.87	7.760~7.785	2.1	1.75	2ヶ所	復元可能
⑬	0.53	7.757~7.784	2.7	4.15	3ヶ所	一部検出
⑭	0.10	7.778~7.781	0.3	—	1ヶ所	一部検出
⑮	0.05	7.778~7.782	0.4	—	不明	一部検出

西方向の極く緩やかな下り傾斜を示すが、各区画ごとでは、第24図のように傾斜方向がやや異なる。1区画内の標高差が判るものは1.7~2.7cmで、一部検出のものを含めても全て3cm以下である（第5表）。

〈水口〉水口は一部検出の2区画を除けば、全ての区画で検出された。水口の底面標高は、耕作土上面とはほぼ同じものとやや低いものとがある。水口は取り扱む畦畔の1辺のみに設けられるものから、3辺以上に設けられるものまである。また、1辺の畦畔に設けられる水口の数は、全て1ヶ所であった。水口の取り付け箇所は、全て畦畔の交点部分付近である。なお、水口には、同一方向の畦畔のみに設けられる等の規則性は認められない。

#### （4）11層上面

##### 11層水田跡（第25図、写真16・17）

小畦畔による小区画の水田が7区画検出された。畦畔の検出面は10層下面である。10層水田跡の耕作に伴う攪乱によって、耕作土上面及び畦畔の大部分は削平を受けている。このため調査区北側では畦畔が確認できなかった。また、検出畦畔も若干の高まりを残すのみである。これらに伴う水路・水口は検出されていない。また、出土遺物は皆無であった。

〈畦畔の配列〉N-51°~55°-W方向のものとこれにはほぼ直交するN-33°~40°-E方向のものからなる。各区画の畦畔にはやや弯曲したものが多いが、北西-南東方向のものは明確な連続性を示す。畦畔の交わり方は「+」状・「T」字状・その中間的なものの3者が認められる。

〈畦畔の規模〉畦畔は耕作土と同一土壤-11層-を盛り上げ作られている。下端幅は、約20cmから約50cmまでのものがみられるが、35cm前後のものを中心とする。なお、畦畔面積率は34%である。

〈水田1区画の形状と規模〉7区画検出されている（区画①~⑦）。この内、区画全体が明確に検出されたものは1区画のみで（⑤）、他は全て一部検出したものにすぎず、復元可能なものもない。⑤の形状は整形ではないが、方形を基調としており、面積は1.6m<sup>2</sup>である。一部検出のものも同様な形状・面積を呈するものと考えられる（第6表）。

〈耕作土〉粘土を主とする泥炭質粘土で、泥炭質粘土層の12層を搅拌し耕作土-11層-としている。耕作深度が深い部分では、さらに下層の13・14層をも攪拌している。耕作土の分解の度合いは、層中に母材ブロックを多量に含み、余り進んでいない。耕作土は上層の影響で一部存在せず、加えて、下面の起伏が顕著なため、厚さは安定していないが、最大で21cmを測る。耕作土の下面には鉄分の集積層は認められない。また、直下層上面には擬似畦畔Bは形成されていない。

〈水田面の傾斜〉全体の水田面の標高は7.70m前後で、全体的な傾斜は上層10層水田跡とほぼ

第6表 11層水田跡  
区面積

区画名	面積(m <sup>2</sup> )	備考
①	0.17	一部検出
②	0.85	元検出
③	0.13	一部検出
④	1.00	一部検出
⑤	1.58	全面検出
⑥	0.49	一部検出
⑦	1.35	一部検出



第25図 11層水田跡平面図

同様と考えられる。各区画ごとの傾斜・標高差は不明である。

#### (5) その他の出土遺物

1層・2層・3a層より炭化不能な赤焼土器?、須恵器、判別不能の素焼き器、陶器、磁器、焼し瓦の細片が11点ほど出土した。この内、陶器・磁器・瓦は2層以上から出土している。

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構としては、4層・5層・10層・11層の4期の水田跡が検出された。また、2・3a層の両層は、その層相より水田土壤の可能性が高い。
2. 検出遺構・各層の所属年代であるが、4層中に灰白色火山灰が混じること、数量的には乏しいが各層からの出土遺物、さらに第28次調査区（佐藤：1988）との層位の対応関係より、

- 以下のような所属年代が想定される。なお、第28次調査区基本層位4・5層の所属年代は、第49次調査の結果、修正・変更がなされている（佐藤：1990）。
- 2層（第28次調査区2層）－近代以降、現代以前
  - 3層（第28次調査区3層）－近世
  - 4層水田跡（第28次調査区4層）－平安時代（灰白色火山灰降下以降）
  - 5層水田跡（第28次調査区5層）－平安時代（灰白色火山灰降下前）以前
  - 10層水田跡（第28次調査区10d層）－弥生時代（樹形円式期以降、十三塚式期以前）
  - 11層水田跡（第28次調査区11a層）－弥生時代（樹形圓式期）
- 3．4層水田跡大畠畔は、5層水田跡大畠畔と同位置で検出された。これは4層水田跡段階で5層水田跡大畠畔の位置・方向性を踏襲した結果と考えられる。このような状況は断面観察ではあるが、第49次調査区でも認められている。
- 4．5層水田跡は第28次調査区5層対応層である。これに相当する層は第28次調査区以外でも検出されているが、畠畔の平面的な検出を見なかつたために水田土壤として可能性を指摘するに留めていた。従って、今回の調査成果によって、今後、当層を水田土壤として認定することが可能となった。
- 5．10層水田跡では、小区画の水田が15区画検出された。面積が確定できるものは全て1畝未満という極めて狭いもので、これ以外のものも同様な規模のものと推測される。同時期のこのような畠畔面積率が異常に高い極小区画の水田は、第28次調査区10d層水田跡・第29次調査区10d層水田跡（渡部：1987）・第46次調査区10d層水田跡（佐藤：1989）でも検出されており、富沢遺跡北東部の当期水田跡の特徴と言える。
- 6．さらに、この10層水田跡を特徴付けるものは、極小の区画に反比例して、区画内の標高差が極めて小さいことである。標高差が確定出来るものは全て3cm未満で、これ以外のものもほぼ同様な値を呈するものと考えられる。一般的に、稲の成育に必要な水深は10cm以下とされている（藤原他：1989）。10層水田跡の場合、各区画間の畠畔を撤去しても水深が10cm以下に保たれており（調査区全体の標高差は6.1cm）、水田として機能させることは可能である。すなわち、地形的にはより大きな区画を設定することが可能であるのにも拘わらず、これに反して、より小さな区画を設けている。
- 7．11層水田跡の区画面積は、10層水田跡の区画に比べるとやや広いが、1.6畝とやはり狭く、畠畔面積率も高い。現在まで、11層水田跡の区画面積で最も狭かったものは、第15次調査区検出の5.4畝であった。今回の調査成果を踏まえると、10層水田跡の極小区画は、10層水田跡を特徴付ける区画面積ではなく、既に11層水田跡あるいはそれ以前に成立していた可能性もある。従って、今後、現在までに検出された11層水田跡の区画面積が、果たして最終区画面積であったかどうかの再検討を加える必要性があろう。

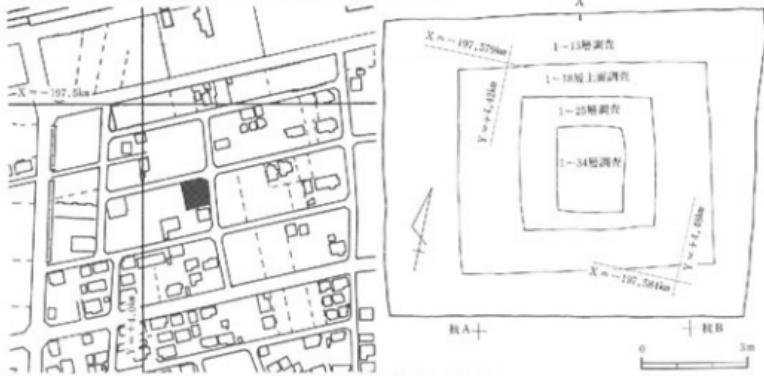
## 第5節 富沢遺跡第54次調査

### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約90m<sup>2</sup>である。調査は盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。2層上面から13層までは調査区全面の精査を実施し、13層以下は調査区中央部に試掘区を設けて掘り下げた（17層までは7×6m、24層までは3.5×3.5m、34層までは2.5×2m）。遺構の測量は杭A・Bを基準として実施したが、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.58659km、Y = +4.42810km 杭B：X = -197.58523km、Y = +4.48664km）。

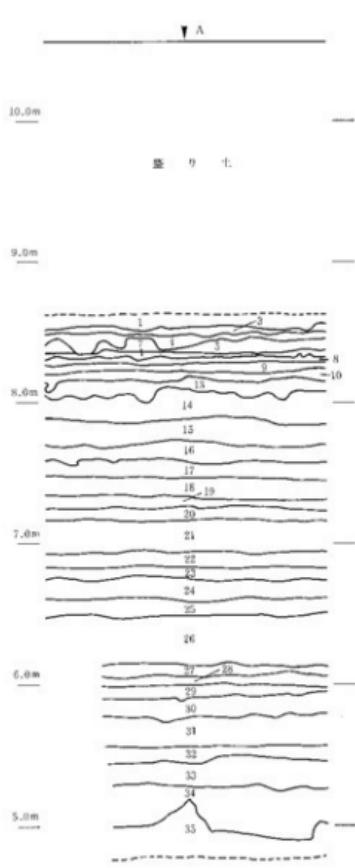
### 2. 基本層序

今回の調査では盛土下に34層が確認された。土質を大別すると1～4層は粘土層である。5層以下23層までは泥炭分を含む粘土層が主体をなすが、14・15・17・21層は発達した泥炭層である。24～34層は粘土層である。グライ化は28層から漸次進み30層以下では顕著となる。また、2・3層も弱い還元状態を呈している。現代のものを除く水田土壤は6・10・12層であるが、2・3・4の各層にもその可能性がある。3・4層中には灰白色火山灰が確認されたが、これは本来下層にあったものが、後の水田耕作に伴う攪乱によって巻き上げられたものと考えられる。また、27層上面でも火山灰が検出されたが、層位的にみて北東方向約200mに位置する第28次調査区（佐藤：1988）29層火山灰と同一の可能性も考えられる。各層ともほぼ水平な堆積状況を示している。遺物出土層は2・3・4・10層である。



第26図 調査区位置図・設定図

### 3. 検出遺構と出土遺物



第27図 基本層序

10層、12層上面でそれぞれ水田跡が検出された。

また、6層上面では畦畔は検出されなかったが、この層は第28次調査区の水田土壤9a層に対応し、水田耕作域の広がりが確認された。

#### (1) 10層上面

##### 10層水田跡 (第29・30図、写真6)

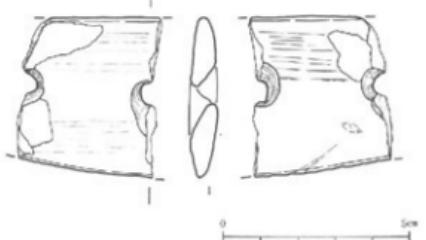
〈遺構状況〉 2条の畦畔1、2を検出した他、これらの畦畔を境界とした耕作域と非耕作域の存在が確認された。畦畔1は方向がN-47°-W、水田面からの比高差は1cm程度である。畦畔2は方向がN-40°-E、水田面との比高差は1~3cm程度である。この2本の畦畔の西側は非耕作域となっている。畦畔1、2によって区画される水田区画は大区画であるが、この中を細分する小畦畔は検出することができなかった。なお、第29図は調査時に作成したものであるが、整理に際して写真資料や断面図をもとに検討を加えた結果、畦畔は第30図のような規模、あり方であることが推測されるにいたった。畦畔はいずれも耕作土と同じ10層を盛り上げて作られている。耕作土10層は前段階の水田耕作土12層を埋めた11層上面から耕起に及び、12層を再び攪拌して13層中に達している。耕作土の分解は良好とはいえず、層中ところどころに母材である11層のブロックを含んでいる。

下面には著しい凹凸が観察され、酸化鉄の集積は認められない。水田面の標高は8.08~8.15mの間で、全体的に南西方向に緩やかに下っている。

番号	上色	土質	幅・厚	顕化状	著人	成因	備考	
1	黒色	3 Y 4/1	シート質粘土	3 cm~16cm	有(多量)	炭化物極少量・風化後灰岩粉少量	木田耕作(現代)	—
2	黒色	7.5 Y 4/1	粘土	2 cm~7 cm	有(多量)	—	木田耕作?	下面若干起伏・不連續で部分的な分布。削いグリ化
3	ミリーブル	7.5 Y 3/1	粘土	2 cm~12cm	變状斑	灰白色大山灰少量	木田耕作?	下面若干起伏・削いグリ化
4	黒色	N 2/1	粘土	2 cm~15cm	變状斑	灰白色大山灰少量	木田耕作?	下面若干起伏・削いグリ化
5	黒色	10 Y R 1.7/1	泥炭質粘土	4 cm~17cm	—	—	左原・自然堆積	—
6	暗大黃色	7.5 Y 6/2	シート質粘土	2 cm~7 cm	—	—	木田耕作	下面若干起伏・部分の分離
7	暗大黃色	10 Y R 3/3	泥炭質粘土	1 cm~8 cm	—	植物遺体	互層・自然堆積	—
8	暗褐色	2.5 Y 4/2	粘土	—	—	—	自然堆積	—
9	暗大黃色	2.5 Y 4/2	粘土	1 cm~3 cm	—	植物遺体	自然堆積	不連續で部分的な分布
10	暗褐色	2.5 Y 3/2	泥炭質粘土	4 cm~22cm	—	—	木田耕作	下面起伏・部分的分離
11	暗褐色	2.5 Y 4/2	粘土	—	—	植物遺体	互層・自然堆積	部分的分離
12	暗褐色	2.5 Y 3/1	泥炭質粘土	3 cm~15cm	—	—	木田耕作	下面起伏・部分的分離
13	暗褐色	10 Y R 2/1	泥炭質粘土	30cm~40cm	—	植物遺体	互層・自然堆積	—
14	黒褐色	5 Y 4/2	粘土	6 cm~20cm	—	—	自然堆積	—
15	三褐色	2.5 Y 2/1	泥炭	10cm~12cm	—	—	互層・自然堆積	—
16	黒褐色	2.5 Y 3/1	泥炭質粘土	8 cm~15cm	—	—	自然堆積	—
17	黒色	10 Y R 1.7/1	泥炭	10cm~15cm	—	—	自然堆積	—
18	灰オリーブ色	3 Y 4/2	粘土	5 cm~10cm	—	植物遺体	自然堆積	—
19	4.7~7三色	5 Y 3/1	泥炭	5 cm~10cm	—	—	自然堆積	—
20	黒色	2.5 Y 3/1	泥炭	20cm~25cm	—	植物遺体	自然堆積	—
21	ミリーブル	2.5 Y 4/3	粘土	—	—	—	—	—
22	黒色	10 Y R 1.7/1	泥炭	10cm前後	—	—	自然堆積	—
23	暗褐色	2.5 Y 3/1	泥炭質粘土	4 cm~9cm	—	—	自然堆積	—
24	黒色	10 Y R 1.7/1	泥炭質粘土	15cm前後	—	—	自然堆積	—
25	灰オリーブ色	5 Y 4/2	粘土	10cm~15cm	—	植物遺体	自然堆積	—
26	黒褐色	5 Y 3/1	粘土	30cm~35cm	—	植物遺体	自然堆積	—
27	黒色	N 2/1	粘土	5 cm~10cm	—	植物遺体	自然堆積	—
28	黒色	10 Y R 1.7/1	粘土	5 cm~10cm	—	—	自然堆積	—
29	ミリーブル	5 Y 3/1	粘土	15cm前後	—	—	自然堆積	グリ化遷移带
30	ミリーブル	10 Y R 1.7/1	粘土	20cm前後	—	—	自然堆積	グリ化
31	灰オリーブ色	7.5 Y 3/2	粘土	5 cm~12cm	—	—	自然堆積	グリ化
32	緑灰色	7.5 G Y 5/1	粘土	15cm~20cm	—	—	自然堆積	グリ化
33	緑灰色	10 G 6/1	粘土	8 cm~40cm	—	—	自然堆積	微弱なグリ化
34	緑灰色	10 G Y 5/1	粘土	40cm以上	—	—	自然堆積	微弱なグリ化

## &lt;出土遺物&gt; 鮎畔2中より石庖丁が

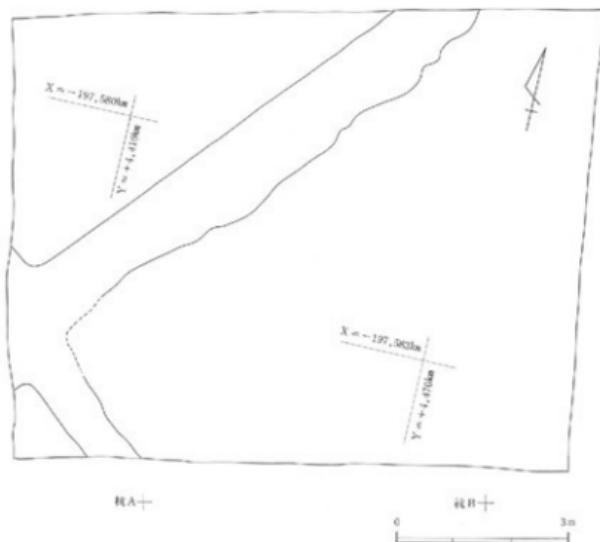
1点出土した(第28図、写真8)。2孔1対の紐孔を有しているが、それぞれこの部分から先は欠損している。残存部分で最大長は38mm、最大幅は43mmである。紐孔は両面からの回転穿孔である。全体的によく磨かれており、刃部は磨耗のためか丸みを帯びているが、使用痕と考えられる光沢が観察される。また鑑定の結果、この石材には名取・広瀬川流域には存在しない雲母片岩が使用されている。



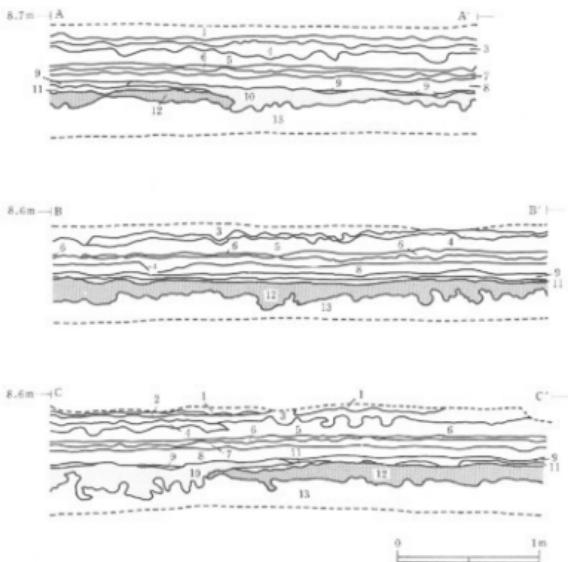
第28図 出土遺物(1)  
写真43-3 10号 石庖丁 3.8 4.2 0.75 19.5 雲母片岩



第29図 10層水田跡平面図(1)



第30図 10層水田跡平面図(2)



第31図 11層水田跡断面図

### (2) 12層上面

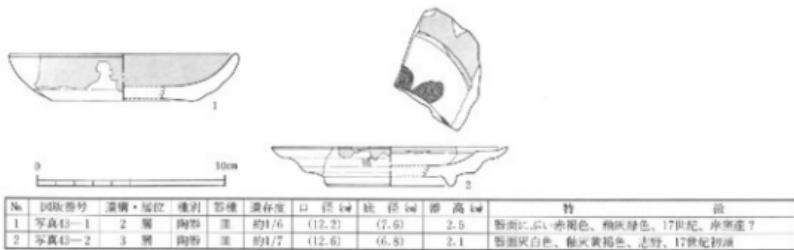
#### 12層水田跡（第31図）

〈遺構状況〉 平面的に畦畔等の検出はなく耕作土のみの検出である。この水田跡は、10層の前段階の水田跡である。10層水田跡は、12層水田が自然堆積層11層で埋没した後、更にこの上面から耕作を行ったものであるが、この際、畦畔1、2の西側は耕作を放棄したために攪拌を免れ、非耕作域部分にのみ12層が残されたものと考えられる。平面的には畦畔また擬似畦畔ともに確認することはできなかったが、断面観察の結果、10層水田跡とは同じ位置に畦畔が存在した可能性が考えられる。耕作土12層は泥炭質粘土層で、分解はあまり進んでおらず、層中のところどころに母材である13層のブロックを含んでいる。層下面には著しい凹凸が認められ、酸化鉄の集積は認められない。水田面の標高は8.15～8.17mの間で、緩やかに南西方向に下っている。遺物は出土しなかった。

### (3) その他の出土遺物

基本層2・3・4層から陶器片、土師器片、須恵器片が合計11点出土した。2層出土の陶器は皿である（第32図1）。福島市岸窯産、17C代のものかと考えられる。3層からは陶器片（4点）、土師器片（2点）が出土した。陶器のうち第32図2は志野産の皿で、17C初頭頃に所属するものと考えられる。この他産地が特定できたものが2点あり、1点は東海産（常滑または

渥美）の皿（中世）、もう一点は志野産の皿（17C）である。土師器はいずれもロクロ使用の高台付杯である。細片のうえ磨滅しており詳細は不明であるが、杯部の内面は黒色処理が施されている。4層からは土師器片（4点）が出土したが、全て細片で図化はなし得なかった。いずれもロクロ使用の杯で、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。



第32図 出土遺物

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 6・10・12層で水田跡が検出された。この他 2・3・4 層にも水田土壤の可能性が考えられる。
  2. 6 層上面では畦畔等の検出はなかったが、第28次調査区9a層との明瞭な対応関係が認められ、水田跡であることが確認された。所属時期は弥生時代（十三塚式期）と推定される。
  3. 10層上面では 2 条の畦畔とそれに伴う耕作域、非耕作域が確認された。検出された畦畔で区画された水田区画は大区画で、本来はこれを細分する小畦畔が存在したものと思われるが、今回の調査では確認することができなかった。10層水田跡の所属時期は、富沢遺跡第28次調査区との層位対比から、弥生時代（樹形圓式期以降、十三塚式以前）と推定される。
  4. 12層水田跡は10層の前段階の水田跡であるが、畦畔等の検出はされず、耕作土が確認されたのみである。12層は10層水田跡の非耕作域にのみ分布する。平面的に畦畔及び擬似畦畔は検出されなかつたが、断面観察により10層水田跡とほぼ同じ位置に畦畔が存在したと考えられる。この水田跡の所属時期は、富沢遺跡第28次調査区との層位対比から、弥生時代（樹形圓式期）と推定される。
  5. その他の水田跡の存在が推測される層の所属時期は、富沢遺跡第28次調査区との層位対比から次のように推測される。
    - 2層 近代以降、現代以前（第28次調査区 2層） • 3層 近世（第28次調査区 3層）
    - 4層 平安時代 - 灰白色火山灰降下以降 - （第28次調査区 4層）
- なお、第28次調査区基本層位 4 層の所属年代は第49次調査の結果、修正・変更がなされている。（佐藤：1990）。

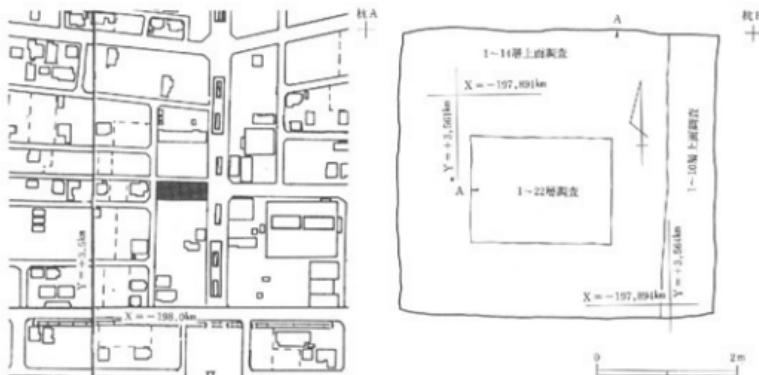
## 第6節 富沢遺跡第55次調査

### 1. 調査方法

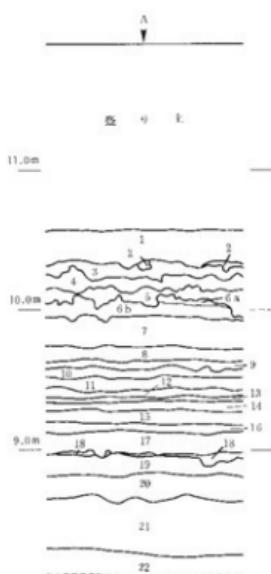
調査区の設定面積は約 $4.5 \times 4.0\text{m}$  ( $18\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は7層上面までは、調査区全面の精査を実施し、7層以下14層上面までは調査区を約 $3.8 \times 4.0\text{m}$ にやや縮小した。また、14層以下は、約 $2.0 \times 1.5\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.89006km, Y = +3.55973km 杭B：X = -197.89017km, Y = +3.56525km）。

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別22層、細別では23層が確認された。各層の土質は13層までが粘土、18層以下は砂あるいはシルトを主とし、その間の14層から17層は粘土分の多い泥炭質粘土である。また、7層並びに1号溝跡堆積土上の6a層は、植物遺体を多量に含む泥炭質粘土である。標高10.10mで酸化鉄の集積層（濃く密な管状斑紋）が調査区全面に認められた。各層の起伏により、4層下部から6b層まで認められるが、4層下部及び5層上部に認められる場合が多い。この酸化鉄の集積層は地下水位の変動によるものと考えられる。グライ化は、10



第33図 調査区位置図・設定図



第34図 基本層序  
北西-南東方向に延びる自然流路跡で、7層上面で検出された。南側の上端は、調査区外となり河川幅全てを検出することができなかった。検出河川幅約1.5m、深さ約65cmである。上端・下端とも出入りが激しく、直線的ではない。底面は凹凸が顕著である。上部(肩部分)に直上層の6b層の落ち込みがみられ、その下に4層からなる堆積土が認められる。この内、堆積土④は粗砂層で、堆積土①・③・④層には多量の植物遺体を含む。なお、堆積土①層は直上層の6b層に類似し、6b層の一部である可能性もある。出土遺物はない。

層以下から漸次進み、18層以下では顕著である。現代のものを除く明確な水田土壤は検出されなかつた。しかし、2・3・4・5層の各層は、下面が著しく起伏し、下部に下層ブロックを巻き上げていることより、水田土壤の可能性が高い。遺物出土層は1・3・4・5・6a層である。4層中・5層上面からは、灰白色火山灰が検出されている。4層中の火山灰は、本来5層上面に乗っていたものが、後の4層の擾乱により層中に巻き上げられたものである。各層の傾きとしては、1~13層までの各層は同一に、南東方向へのごく緩やかな下り傾斜を示す。

### 3. 検出構造と出土遺物

#### (1) 6b層上面

1号溝跡-SR1-(第35図、写真20・21)

7層上面検出のSR1完掘後、調査区壁面観察により、その存在を確認した。この為、平面プランに関する記録は不備となつたが、調査区壁面観察によれば、下層のSR1上に作られ、位置・方向を踏襲している。溝上端幅はSR1に比べ縮小して

おり、深さは50cm前後である。断面形は開いた「U」字形を呈するものと考えられ、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層から成り、堆積土B層は粗砂である。いずれの堆積土も厚く堆積しておらず、この溝の大半を埋め尽くすのは、厚く堆積した上層の6a層である。なお、この部分の6a層中には植物遺体が多量に含まれる。出土遺物はない。

#### (2) 7層上面

1号河川跡-SR1-(第35図、写真18~21)

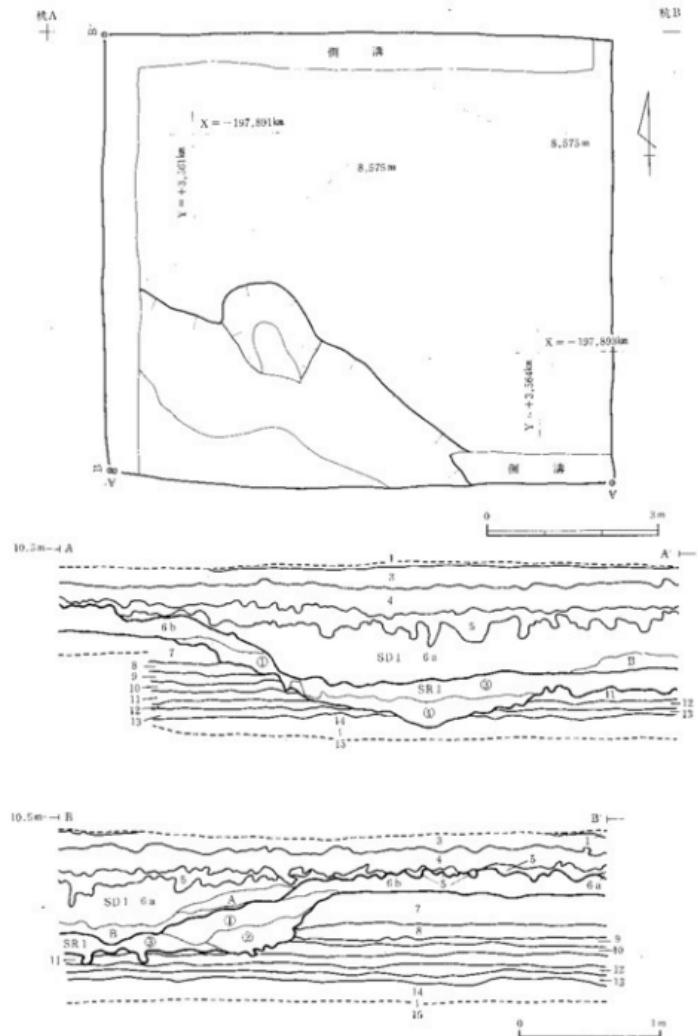
北西-南東方向に延びる自然流路跡で、7層上面で検出された。南側の上端は、調査区外となり河川幅全てを検出することができなかつた。検出河川幅約1.5m、深さ約65cmである。上端・下端とも出入りが激しく、直線的ではない。底面は凹凸が顕著である。上部(肩部分)に直上層の6b層の落ち込みがみられ、その下に4層からなる堆積土が認められる。この内、堆積土④は粗砂層で、堆積土①・③・④層には多量の植物遺体を含む。なお、堆積土①層は直上層の6b層に類似し、6b層の一部である可能性もある。出土遺物はない。

番号	土 質	土 質 厚さ	遺 墓	施 工 法	施 工 物	実 因 素	特 性
1	赤 2-7層: 黄色 10YR3/1	2cm-10cm	小窓	木造	木造軽作(原木)	—	—
2	灰 黄褐色 10YR4/2	砂質シルト 2cm-7cm	—	風化泥炭質粘土・下部に3層の ブロック	木造軽作?	下面堅しく起伏・部分的分布	—
3	黒色 10YR2/1	粘土 2cm-14cm	屋上部に陶器・ 漆器底灰瓦	風化風化地盤多箇所・下部に4 層のブロック	木造軽作?	下面堅しく起伏	—
4	灰黄褐色 10YR4/2	粘土 5cm-19cm	漆器底灰瓦	下部(5cm以上部)に3層 漆器底灰瓦の外側(風化ブロック) ・下部に3層のブロック多箇所	木造軽作?	下面堅しく起伏	—
5	黑色 2.5Y2/1	粘土 1cm-20cm	弱い管状鉄 錆	上部(5cm以上部)に3層 漆器底灰瓦の外側(風化ブロック) ・下部に6層のブロック多箇所	木造軽作?	下面堅しく起伏	—
6 a	黑色 2.5Y2/1 10YR1.7/1	粘土 2cm-7cm	弱い管状鉄 錆	植物遺存少量	瓦層・自然堆積	S.R.1の外側に分布・下部堅 伏	—
	黒褐色 10YR3/1 灰黒褐色 10YR5/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土	弱い管状鉄 錆	植物遺存少量	瓦層・自然堆積	S.R.1の内側に分布・下部堅 伏	—
6 b	灰褐色 10YR2/1	粘土 2cm-10cm	弱い管状鉄 錆	植物遺存( S.R.1 壁面土上部 は多量に含む)	瓦層・自然堆積	下面若干起伏・壁上2.5m隔灰 色(10YR4/1)を認する	—
7	灰 黑褐色 10YR2/1 10YR1.7/1	泥炭質粘土 10cm-25cm	弱い管状鉄 錆	—	瓦層・自然堆積	—	—
8	黒色 10YR1.7/1	粘土 7cm-16cm	弱い管状鉄 錆	植物遺存少量	自然堆積	—	—
9	灰褐色 10YR3/1	粘土 4cm-9cm	—	植物底灰瓦・黑色粘土ブロ ック少量	自然堆積	—	—
10	黒灰褐色 2.5Y3/2	粘土 4cm-5cm	—	植物遺存少量・黑色粘土ブロ ック	自然堆積	グライ化	—
11	黒灰色 2.5Y4/1	粘土 3cm-10cm	—	植物遺存少々・黑色粘土ブロ ック少量	自然堆積	—	—
12	黒色 10YR2/1	粘土 1cm-9cm	植物遺存少々	瓦層・自然堆積	壁中に黒色の偏在	—	—
13	灰褐色 10YR2/1	粘土 3cm-5cm	植物遺存少々	瓦層・自然堆積	—	下面若干起伏	—
14	赤茶・黒褐色 2.5G Y2/1	泥炭質粘土 4cm-21cm	植物遺存・黑色粘土瓦	自然堆積	—	—	—
15	黒色 7.5Y2/1	泥炭質粘土 4cm-21cm	植物遺存	瓦層・自然堆積	グライ化・上・中層にうすい 黒色の偏在	—	—
16	黒色 N2/9	泥炭質粘土 4cm-9cm	—	—	瓦層・自然堆積	壁中に黒色の偏在	—
17	黒色 2.5Y4/1	泥炭質粘土 11cm-17cm	植物遺存・黑色粘土ブロ ックを斑点状に含む	瓦層・自然堆積	—	—	—
18	黒色 10Y3/1	粘土 1cm-10cm	—	植物遺存	自然堆積	下面堅しく起伏・グライ化跡 量	—
19	灰 黑 10Y4/1	シルト質粘土 5cm-17cm	—	植物遺存・黑色粘土ブロ ックを斑点状に含む	自然堆積	グライ化跡量	—
20	黒色 10Y3/1	シルト 14cm-25cm	—	6.5cm前後の灰白色粘土多箇 所	自然堆積	下面堅く・下部の層面不 規則・グライ化跡量	—
21	セミアーチ色 2.5G Y6/1	シルト 31cm-40cm	—	植物遺存・上部に黑色粘土ブ ロックを少箇所含む	自然堆積	グライ化跡量	—
22	鉛灰色 10YG5/1	砂質シルト 14cm-19cm	—	植物遺存	自然堆積	グライ化より露呈	—

## (3) その他の出土遺物

1層・3層・4層・5層・6 a層より土師器片・赤焼土器片が21点程出土した。この内、赤焼土器は1層出土の壺1点のみで、他は全て土師器である。土師器では外面ハケメ調整の甕が多く、4・5層を中心として12点(各6点)が出土したが、これらは全て同一個体の可能性がある(第36図1・2)。この内6 a層から2点出土したが、内1点は、外面ハケメ調整の甕の体部資料である(第36図3)。他の1点は遺存状態が悪く、内外面の調整は不明である。これら出土土師器の内、製作に際してヨクロ使用が明確に識別できる資料はなかった。

第6節 常沢道路第55次調査



SD 1 地帯 I:				SR 1 地帯 II:					
層序	土色	上質	鉱化鉄	鉱物・鉱物	層序	I 地	II 地	鉱化鉄	鉱物・鉱物
A	黒褐色	10YR 3/1	無土	弱い紫紺色	①	暗褐色	10YR 4/1	浅い竹状鉄	植物遺体を含、黒色・灰青褐色の鉄鉱
					②	褐色	2.5YR 2/1	無土	
B	黒褐色	10YR 3/4	泥炭質粘土	-----	③	弱褐色	10YR 2/2	紺	植物遺体
					④	淡褐色	10YR 4/3	-----	植物遺体を含、弱褐色の鉄鉱
					⑤	褐色	10YR 2/1	粘土	植物遺体

第35図 SD 1, SR 1 平面・断面図



No.	遺構・層位	種別	形状	色調	特徴
1	4 層	土器部	壺	黒色	外面ハケ目、内面ヘラナデ
2	5 層	土器部	壺	暗褐色	外面ハケ目、内面ヘラナデ
3	6 a 層	土器部	壺	にごい黄褐色	外面摩滅、内面一部ハケ目

第36図 出土遺物

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

- 検出遺構としては6 b層上面で溝跡が1条、7層上面で河川跡が1本検出されたのみであるが、2・3・4・5層の各層は、その層相により水田土壤の可能性が高い。
- 検出遺構・各層の所属年代であるが、5層上面に灰白色火山灰が乗ること並びに数量的には乏しいが6 a層出土遺物より、SD 1・SR 1は古墳時代以前、5層は平安時代（灰白色火山灰降下以前）という年代が予測される。
- 当調査区のみの調査結果で判断すれば、上記のような結論しか得られない。しかし、後述するように（第4章）、調査後の整理段階で、周辺調査区との層位の対応を試みた。その結果、周辺調査区との層位の対応関係が可能となった。これらと今回の調査結果を基に検出遺構・各層の性格、所属年代を想定すると以下のとおりになる。
  - 4層 水田耕作土 平安時代（灰白色火山灰降下以降）
  - 5層 水田耕作土？ 平安時代（灰白色火山灰降下以前）
  - SD 1 水田水路 弥生時代（楕円形壠式期）
  - SR 1 小河川 弥生時代（寺下圓式期）以前
 なお、SD 1は6 b層水田跡段階の水路と考えられるが、当調査区では耕作域とは成っておらず非耕作域であった。
- SD 1は、SR 1埋没後のへこみを利用し、水路として機能させている。その場合、へこみをそのまま利用したか、あるいは、手を加え改修したかの判断は難しい処であるが、断面形がSR 1に比べ整っていること、また、SD 1の下半から底面にかけての外壁にはSR 1を埋めた6 b層及びこれに類似する層が認められることを考慮すれば、後者の可能性が強い。

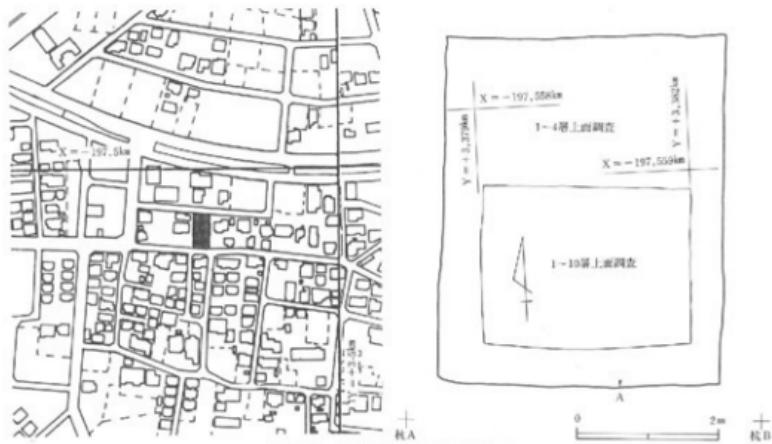
## 第7節 富沢遺跡第56次調査

### 1. 調査方法

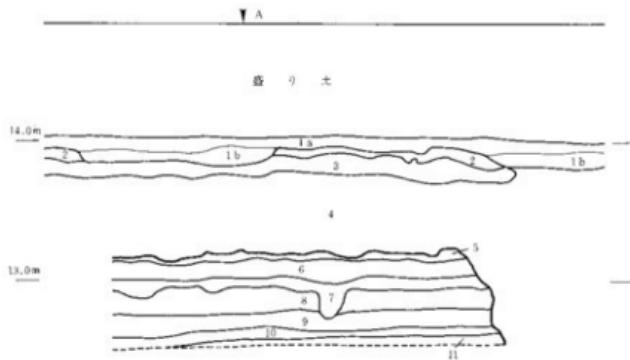
調査区の設定面積は約  $5 \times 4$  m ( $20\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は4層上部までは、調査区全面の精査を実施し、4層以下は調査区を約  $2.3 \times 3.0$  m に縮小した。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A : X = -197.56237km, Y = +3.37787km 杭B : X = -197.56261km, Y = +3.38287km）。

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別11層、細別では12層が確認された。各層の土質は1a・5～7層が粘土、他は砂を主とする。グライ化は、2層以下から漸次進み、9・11層では顕著である。現代のものを除く明確な水田土壤は検出されず、1b層以下は自然堆積土あるいは河川堆積土の様相を呈している。遺物出土層は1b・4層である。各層は、ほぼ水平な堆積状況を示している。



第37図 調査区位置図・設定図



第38図 基本層序

層号	1 色	2 實	3 厚	4 水化鉄	5 入物	6 因	7 種
1	オレンジ褐色 2 YR 3/1	シート状粘土	10cm前後	—	—	水田耕作(現代)	下面古土壤
2	オレンジ褐色 2 YR 3/1	砂質シルト	10cm前後	—	砂砾	自然地盤?	未分類の地質
3	褐色	砂質シルト	5cm~10cm	上部に風化	—	自然地盤	混合地合・グライ化
4	オレンジ褐色 2 YR 3/1	砂質シルト	10cm前後	風化鉄	自然地盤	下面古土壤	—
5	褐色	シート状粘土	5cm前後	風化鉄	被覆物・植物・小礫・水片	河川堆積	下側着生・起状・グライ化
6	褐色	10 YR 4/3	15cm前後	—	植物・泥炭分	自然地盤	下面古土壤
7	オレンジ褐色 2 YR 3/1	シート状粘土	8cm前後	—	0.2cm前後の風化鉄風化物少量	自然地盤	—
8	オレンジ褐色 2 YR 3/1	シート状粘土	8cm前後	—	0.2cm前後の風化鉄風化物少量	自然地盤	—
9	オレンジ褐色 2 YR 3/1	砂質シルト	12cm前後	—	0.2cm前後の風化鉄風化物少量	自然地盤	グライ化地質
10	褐色	2 YR 4/1	砂質シルト	7cm前後	被覆物(茎)少量	自然地盤	グライ化
11	褐色	2 G 5/1	砂	2cm以上	植物遺体(茎)少量	自然地盤	グライ化地質

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 5層上面

1号河川跡-SR1- (第38・39図、写真22)

北東-西南方向に延びる自然流路跡で、5層上面で検出された。北側の肩及び底面は、調査の都合上検出できなかった。推定上端幅4.3m以上、推定深さ1m以上である。堆積土は粗砂と小礫とが複数関係の基本層4層があり込んだものである。基本層4層は河川外でも60cm前後の層厚をもっており、5層上面で検出した肩部分は、本来の上端ではなく、河川内の段差部分の可能性もある。出土遺物はない。



第39図 SR1 平面図

## (2) その他の出土遺物

1 b 層、河川跡外の 4 層より土師器片・赤焼土器片・判別不能な素焼土器片が数点出土したのみである。いずれも図化不能な資料であった。

## 4. まとめ

1. 検出遺構としては、5 層上面で所属年代不明の河川跡が 1 本検出されたのみで、また、水田土壤の可能性がある層も確認されなかった。各層とも時期決定資料に乏しく、隣接調査区との層位の対応も不可能で、明確な年代は不明である。
2. 1 b 層以下には砂を主とする層が続くこと、また、5 層上面で河川跡が検出されたこと、さらに、当調査区が微高地と後背湿地の変換点付近に位置していることから察すると、1 b 層形成段階までは、当調査区が微高地を開拓する河川の影響下に絶えず置かれていた場所であったことが想定される。

## 第8節 山口遺跡第11次調査

### 1. 調査方法

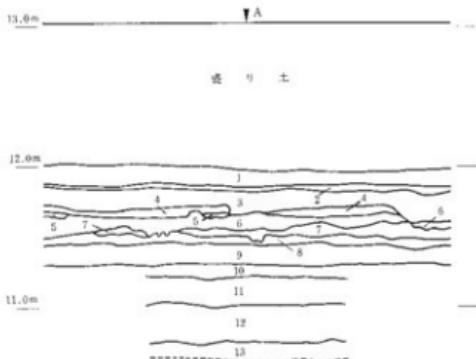
調査区の設定面積は約 $8.5 \times 4.0\text{m}$  ( $43\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は7層上面までは、調査区全面の精査を実施し、7層以下14層上面までは、調査区を約 $3.8 \times 4.0\text{m}$ の約半分に縮小した。また、9層以下は、約 $2.0 \times 1.5\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -198.02048km, Y = +3.25635km 杭B：X = -198.02045km, Y = +3.25835km）。



第40図 調査区位置図・設定図

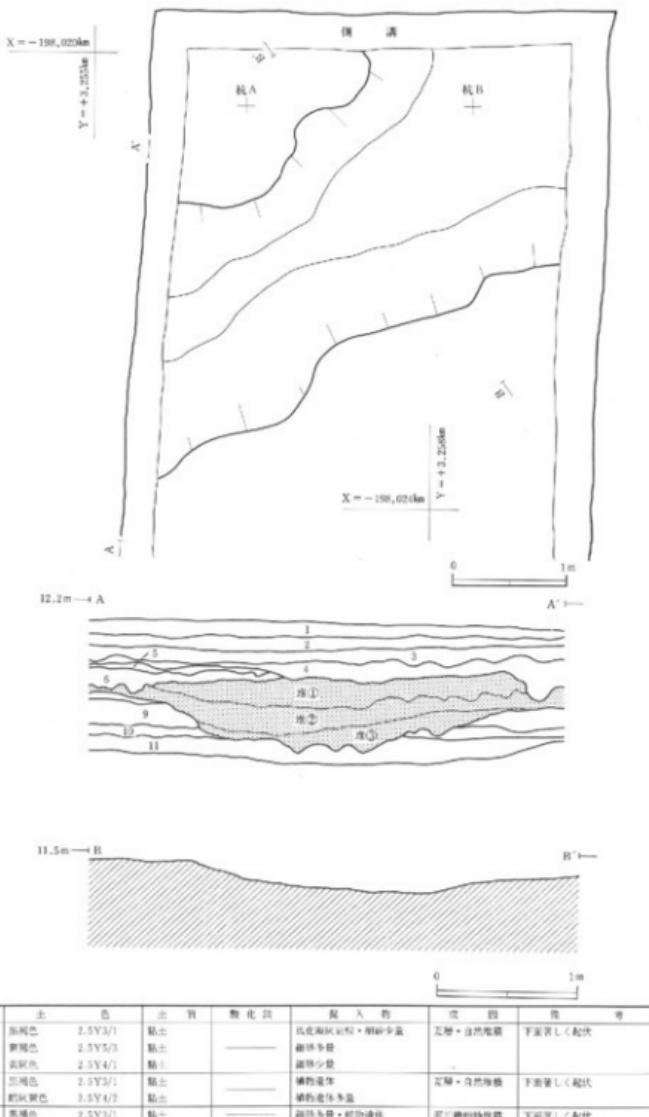
## 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に22層が確認された。各層の土質は4層までがシルトを主とし、5層以下は粘土である。現代のものを除く明確な水田土壤は検出されなかった。しかし、2・3・4・5・6層の各層は、下面が著しく起伏し、下部に下層ブロックを巻き上げていることより、水田土壤の可能性が高い。グライ化は、12層以下から漸次進み、13層では顕著である。遺物出土層は3層のみである。各層の傾きとしては、1～3層まではほぼ平坦であるが、4層以下は北方向へのごく緩やかな下り傾斜を示す。



第41図 基本層序

層序	土 質	上 質	厚 濃	性 化 季	固 大 物	成 因	性 質
1	濃い黄褐色	2.5Y4/2	5cm-15cm	—	炭化植物碎片	水田耕作 (現)	—
2	茶褐色	10YR5/3	5cm-10cm	春	炭化植物碎片	水田耕作?	—
3	黄褐色	2.5Y4/1	シート状断点	10cm-15cm	右	シート状粘土・炭化植物 粘多量	水田耕作 下層時代
4	洪积层	20YR2/2	砂質シート	5cm-10cm	右	炭化植物碎片・無鉢	洪积层
5	黑色	10YR1.7/1	粘土	3cm-5cm	有	泥状炭素粘土	下層時代・部分的分布
6	暗灰褐色	2.5Y6/2	粘土	10cm前後	有(少)	炭化植物碎片	未耕作層
7	黄褐色	2.5Y3/1	粘土	5cm前後	—	粗粒大アロッフ	下層青じく付帯・部分的分布
8	黑色	10YR	粘土	5cm前後	—	—	自然堆積
9	黄褐色	2.5Y6/1	粘土	—	—	—	部分的分布
10	黑褐色	2.5Y3/1	粘土	5cm前後	—	植物遺体	瓦砾・自然堆積
11	黑色	10YR1.7/1	粘土	25cm前後	—	植物遺体	瓦砾・自然堆積
12	黑褐色	2.5Y6/1	粘土	—	—	黑色粘土アロッフ・植物遺体	グライ化堆積層
13	黑色	7.5Y6/1	粘土	25cm-30cm	—	黑色粘土アロッフ・植物遺体	自然堆積



第42図 S R 1 平面・断面図

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 7層上面

##### 1号河川跡-SR1-（第42図、写真23・24）

北東-南西方向に延びる自然流路である。本来、7層上面の遺構であるが、調査は9層上面で実施した。上端幅約1.5~2.5m、下端幅約20~150cm、深さ約30~50cmである。上端・下端とも出入りが激しく、直線的ではない。底面は凹凸が顕著である。北側の上端は南側よりも約15cm程低くなっている。また、堆積土もこの上端より北側へ延びており、北側の上端は河川内の段差で、本来の上端は調査区よりさらに北側に広がる可能性もある。堆積土は3層から成り、各層とも自然堆積状況を示す。堆積土①・③層中には細砂・粗砂を含む。また、堆積土③層には多量の植物遺体を含む。いずれの堆積土中よりも出土遺物はない。

#### (2) その他の出土遺物

3層より須恵器片、燃し瓦片が各1点出土したのみである。須恵器は甕の頸部資料である。いずれも細片で、國化不能なものである。

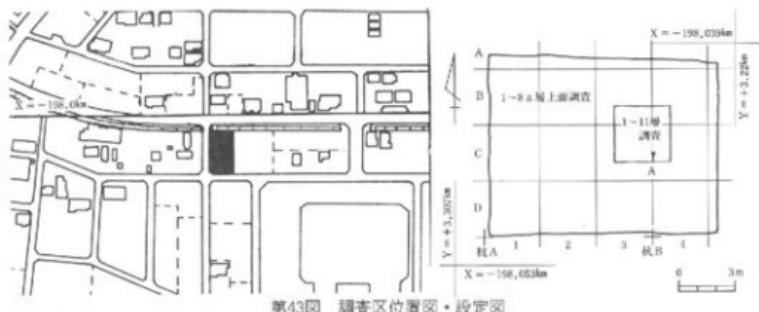
### 4.まとめ

検出遺構としては、7層上面で河川跡が1本検出されたのみであるが、2・3・4・5層の各層は、その層相、イネのプラントオパール分析結果より水田土壤の可能性が高い。検出遺構・各層の年代であるが、出土遺物が乏しかったこと、周辺調査区との層位の対応関係が明確でなかったことより不明である。ただし、SR1はその堆積土・方向性より、東方第12次調査区5層上面検出のSR1河川跡（平安時代）の支流である可能性もある。

## 第9節 山口遺跡第12次調査

### 1. 調査方法

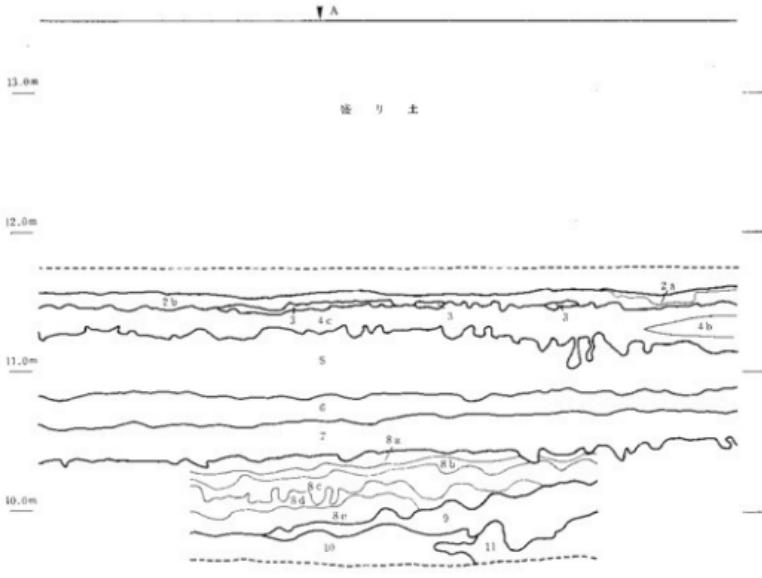
調査区の設定面積は約 $12.0 \times 9.5\text{m}$  ( $114\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は8a層上面までは、調査区全面の精査を実施し、8a層以下は約 $3 \times 3\text{m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、任意に設定した $3 \times 3\text{m}$ グリッド（南北軸A～D、東西軸1～5）を基準として実施した。なお、グリッド基準杭（杭A・B）の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A : X = -198.049546km, Y = +3.308681km 杭B : X = -198.049481km, Y = +3.317685km）。グリッド南北軸は、平面直角座標系XにおけるY軸に対して西偏 $0^\circ 24' 49''$ である。



第43図 調査区位置図・設定図

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別11層、細別では18層が確認された。各層の土質は粘土を主とするが、4・10層は砂である。7層以下になると植物遺体が多くなる。現代のものを除く水田土壤は3層である。また、2a・2b層は下面の起伏が顕著で、下部に直下層のブロックを含むことより、水田土壤の可能性が高い。4層は3つの層に細分されるが、いずれも河川堆積土である。また、8b層以下10層までの各層は、調査区の東半にしか分布せず、しかも、北東側へ落ち込む状況を示し、その影響が上層の6層まで認められることより、河川堆積土の可能性もある。グライ化は6層以下から漸次進み、8a層以下では顕著となる。遺物出土層は1・2・3a・4・7・8c層である。各層の傾きとしては、1～4層までは北西方向へのごく緩やかな下り傾斜を示すが、6層以下になると、前述のようにこれとは別方向の、北東へのややき



第44図 基本層序

層序	土色	土質	層厚	相	基	成	成	因	理
1	褐色	10YR2/1	粘土	15cm~20cm	侵蝕の洪流	炭化物鉱・風化炭灰鉱		市内耕作(現代)	下部若干起伏・部分的分布
2 a	灰褐色	N3/0	シート質粘土	4cm~10cm	侵蝕の洪流	炭化物鉱・風化炭灰鉱		市内耕作	下部若干起伏・部分的分布
2 b	オーライ黒色	5Y3/1	粘土	10cm~20cm	侵蝕の洪流	炭化物鉱・風化炭灰鉱		市内耕作	下部差し引け状
3	黒色	10YR2/1	粘土	10cm~20cm	侵蝕の洪流	炭化物鉱少量		市内耕作	下部差し引け状・部分的分布
4 a	褐色	5Y2/1	粘土	30cm前後		炭化物鉱・植物遺体多量		河川堆積	下部との層面差引け状・部分的分布
4 b	褐褐色	2.5Y3/1	砂質シルト	30cm前後		炭化物鉱・貝殻・貝殻多量		河川堆積	下部との層面差引け状・部分的分布
4 c	オーライ黒色	2.5Y4/4	砂	30cm前後		炭化物鉱・貝殻・貝殻多量・植物遺体		河川堆積	下部との層面差引け状・部分的分布
5	黒色	10YR1.7/1						河川・自然堆積	下部若干起伏・部分的分布
	黒褐色	10YR3/1	粘土	30cm前後					
	黒褐色	10YR6/2							
6	褐灰色	10YR6/1	粘土	20cm前後				自然堆積	下部若干起伏・グレイ化
	黒褐色	2.5YR4/1							
7	黒色	2.5Y2/1	粘土	25cm前後				瓦層・自然堆積	下部起伏・グレイ化
	オーライ黒色	2.5G Y5/1							
8 a	緑オーライ黒色	5G Y4/1	粘土	10cm~15cm				自然堆積	下部起伏・グレイ化鉄着
8 b	緑褐色	10G Y4/1	粘土	5cm~10cm		火山灰? ノメ?・植物遺体		河川堆積?	下部起伏・部分的分布・グレイ化鉄着
8 c	緑褐色	5G Y4/1	粘土	6cm~10cm		炭化物鉱・植物遺体		河川堆積?	下部起伏・部分的分布・グレイ化鉄着
8 d	緑褐色	10G Y5/1	粘土	10cm前後		植物遺体		河川堆積?	下部起伏・部分的分布・グレイ化鉄着
8 e	緑オーライ黒色	2.5G Y3/1	粘土	20cm前後		炭化物鉱少量・植物遺体		河川堆積?	下部起伏・部分的分布・グレイ化鉄着
9	紺褐色	5G G6/1	粘土	20cm~40cm		植物遺体		河川堆積?	下部起伏・部分的分布・グレイ化鉄着
10	緑褐色	2.5G Y4/1	砂	30cm以上		植物遺体・植物遺体		河川堆積?	部分的分布・グレイ化鉄着
11	紺褐色	10G Y5/1	粘土	20cm以上		植物遺体		河川堆積?	部分的分布・グレイ化鉄着

つい下り傾斜となる。

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 3層上面

##### 3層水田跡

〈遺構状況〉(第45図、写真26・27)

明確な遺構は検出されなかったが、上面で区画を表す段差、畦畔の土留めあるいは地盤沈下防止に使用されたと考えられる木杭79本と横木が4本検出された。木杭は3層下部から7層中にかけて検出された。しかし、これら木杭には規則性が認められ、また横木を加えた配置は下層検出のSR1河川跡の形状と密接な関係をもっており、これら木杭の検出層位の差は杭の遺存状態の差によって生じたもので、元来、木杭は3層上面から打ち込まれたものと考えられる。

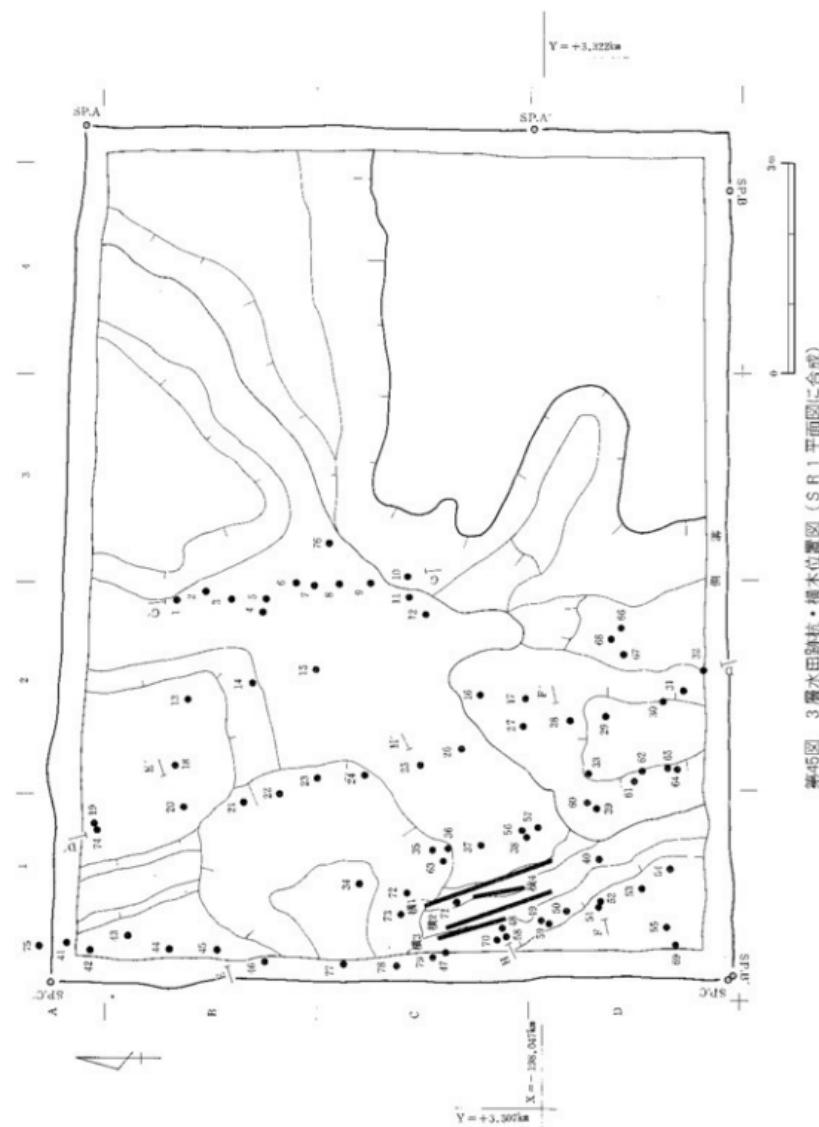
上面の段差は、調査区の南東側にみられ、段差上面と下面との比高差は5~10cm程度である。段差上面は約5×5mの方形状の面的な広がりで、南側・東側は調査区外へと延びていく。この段差は下層の5層上面検出河川跡(SR1)の影響を受けた結果で、段差の上面は、SR1南岸上に位置している(第45図)。SR1はまず基本層4層の堆積によって埋まるが、完全に埋没しておらず、当水田段階でも河川状地形が色濃く残り、耕作もこの地形を大きく変革することなく行われている。従って、3層水田跡はSR1の河岸上と河川内上では、水田面のレベル差のために区画を異にし、区画間に段差をもつ水田であったことが想定される。

耕作土は2b層段階の攪乱を受け、段差上面では直下層上面の凹部に僅かに残存するのみであるが、段差下面では、SR1下端方向の北西側に行くに従い厚くなり、30cmを測る部分もある(第46図5~7)。土質は粘性の強い粘土で、下面の起伏は顕著である。下部では下層ブロックを多量に含み、下面には鉄分の集積層は認められない。水田面の標高は、段差上面で11.50m前後、段差下面では11.40m前後である。段差下面では、層上下面とも北西方向の緩やかな下り傾斜を示すが、層下面のほうがややきつくなっている。

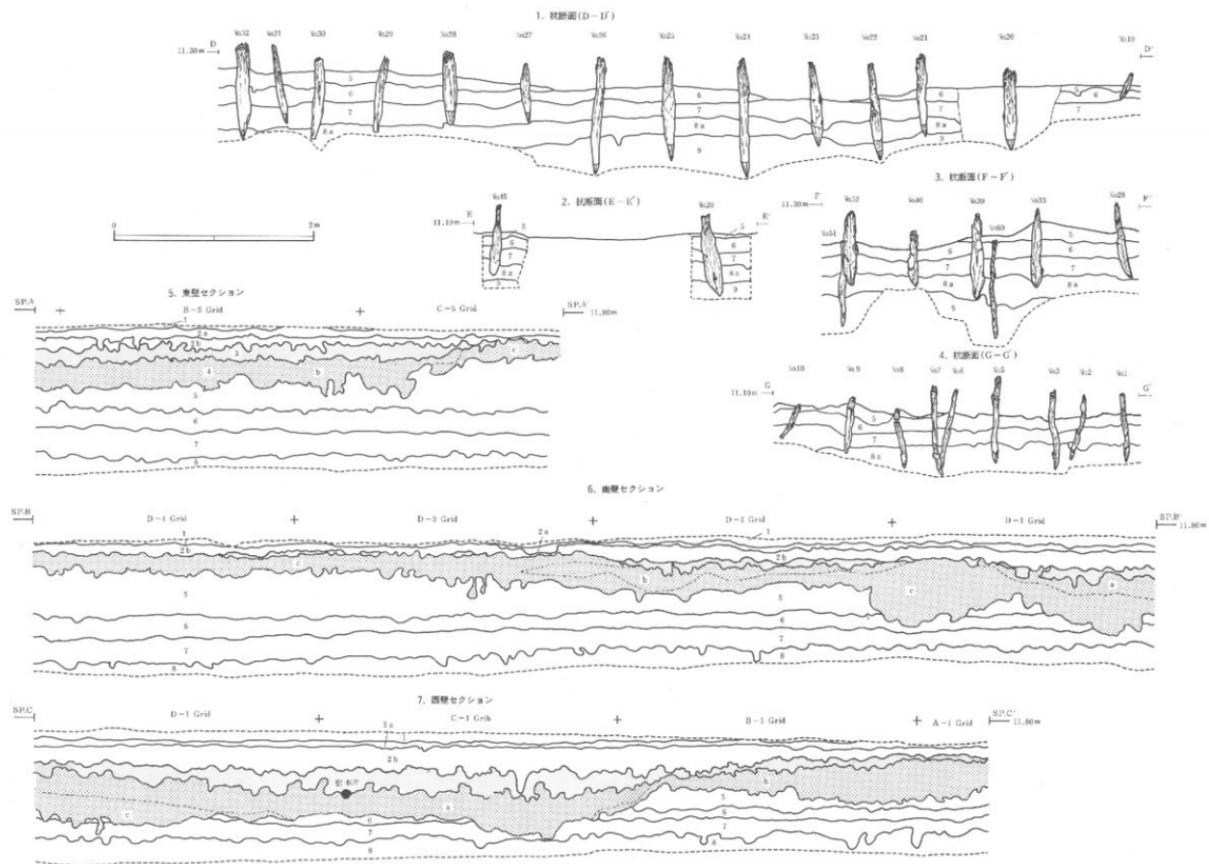
〈杭〉(第45~54図、写真28~32)

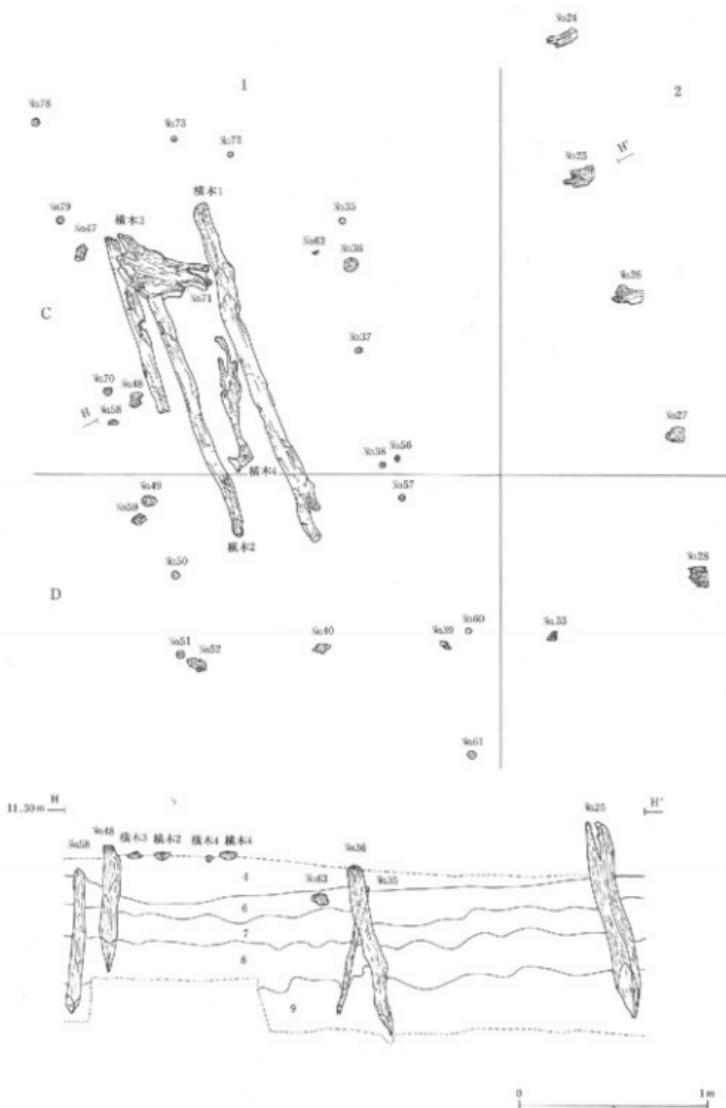
杭は、段差の下面で全て検出されている。杭は素材・最大幅(径)・先端加工・焦痕によって各々分類が可能で、各分類ごとの数量的な傾向は以下のとおりである(第8表)。

- ・素材：素材は丸木(A類)・分割材・角材(D類)に大別され、さらに、分割材は2分割のもの(半切材・B類)と4分割のもの(C類)に細別される。素材判別不能な1点を除く78資料では、丸木が全体の78%(61点)を占め最も多く使用され、次いで4分割材(10点)、角材(6点)の順となり、半切材は僅か1点のみであった。



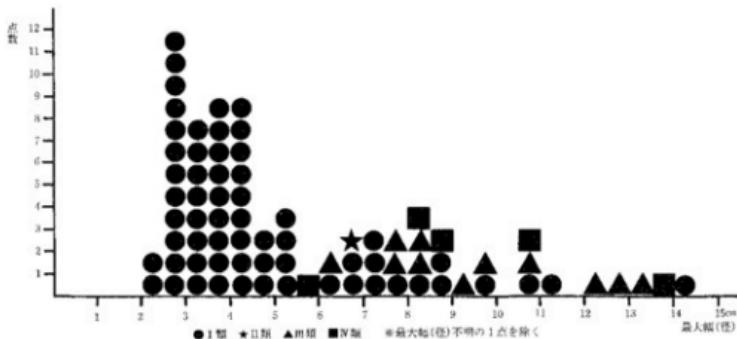
第45図 3層水田跡杭・桿木位置図 (SR 1 平面図に合成)





第47図 3層水田跡 横木周辺平・断面図

第7表 杭の最大幅(径)別数量表



第8表 杭の属性別数量

素 材	A	B	C	D	合 計
	61	1	11	5	78
最大幅(径)		I	II	III	合 計
先端加工	47	22		9	78
	a	b			合 計
焦 痕	22	50			72
	①	②			合 計
		28	49		77

第9表 杭の各属性間の関係

1. 素材・最大幅(径)

素材	最大幅(径)			計
	I	II	III	
A	47	11	3	61
B	0	1	0	1
C	0	7	4	11
D	0	3	2	5
計	47	22	9	78

2. 素材・先端加工

素材	先端加工			計
	a	b	計	
A	19	36	55	
B	1	0	1	
C	0	11	11	
D	2	3	5	
計	22	50	72	

3. 素材・焦痕

素材	焦痕			計
	①	②	計	
A	12	48	60	
B	0	1	1	
C	11	0	11	
D	5	0	5	
計	28	49	77	

4. 最大幅(径)・先端加工

最大幅(径)	先端加工		計
	a	b	
I	18	24	42
II	4	17	21
III	0	9	9
計	22	50	72

5. 最大幅(径)・焦痕

最大幅(径)	焦痕			計
	①	②	計	
I	1	46	47	
II	18	3	21	
III	9	0	9	
計	28	49	77	

6. 先端加工・焦痕

先端加工	焦痕			計
	①	②	計	
a	2	20	22	
b	26	24	50	
計	28	44	72	

- ・最大幅（径）：最大幅（径）には2.2～14.4cmのものまで認められた。第7表は計測不能な1点を除く、すべての杭の最大幅（径）を5mm単位で区分し、その本数及び素材をしたものである。これに基づくと5.5cm未満のもの（I類）、5.5cm以上10cm未満のもの（II類）、10cm以上のもの（III類）に分けられる。5.5cm未満のものは、全体に占める割合は60%と最も多く、5.5cm以上10cm未満のものはこれに次ぎ、10cm以上のものは12%と最も少ない。
- ・先端加工：先端加工には一方向の簡単なもの（a類）と2～6以上の複数方向の丁寧な（鋭利な）もの（b類）に分けられる。先端部欠損を除く72資料では、一方向のものが22点、複数方向のものが50点と複数方向のものが倍以上の割合（69%）を占める。
- ・焦痕：杭には、全体あるいは先端部に焦痕が認められるもの（①類）と全く認められないもの（②類）がある。焦痕の有無が明確に識別できる資料は77資料で、この内、焦痕があるものは28資料で全体の約1/3と少ない。

また、これらの属性相互の関係（第9表）から

1. 手の加えられた素材（B・C・D類）は、数量的に少ない太い材（II・III類）に限られる。
2. 先端加工が簡単なもの（a類）は、丁寧なもの（b類）に比べ主体的な加工方法ではないが、余り手の加えられていない素材（A・B類）にはひろく用いられ、しかも、細い材（I類）の先端加工に主として用いられている。
3. 焦痕を有するもの（①類）は、手の加えられた素材（C・D類）で、しかも、太い材（II・III類）で、先端加工が鋭利あるいは丁寧なもの（b類）を主とする。

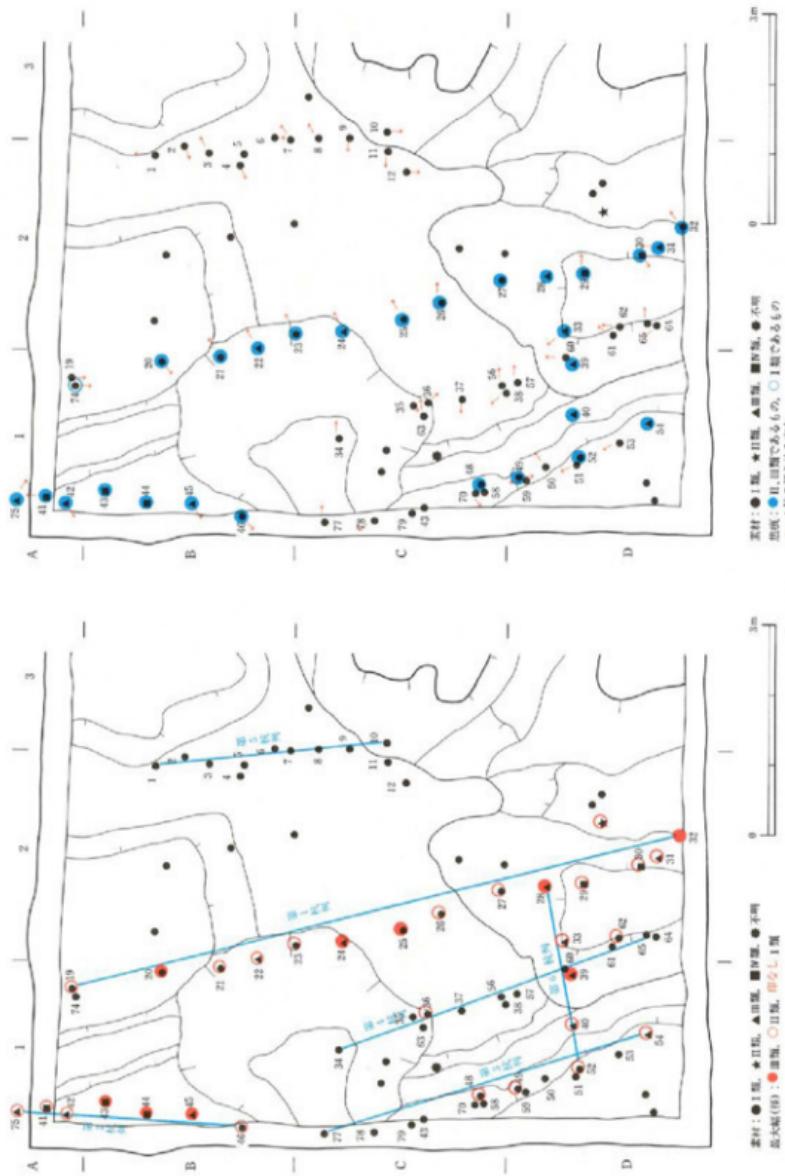
という1～3の特徴が見いだされる。この内、3に該当する杭は、検出杭の中でも、素材・最大幅（径）において特殊な位置を占めていることが判る。

さらに、以上のような分類の他に、杭先端の打ち込み角度θと方向、杭全長の復元値、そしてその配置関係を加味し、これらの杭についての分析を試みてみた。その結果、第1から第6までの杭列の存在が認められた（第48図1）。これら杭列は、ほぼ直線的で、その方向によって、南北方向のもの（第1～5杭列）と東西方向（第6杭列）のものに大別される。唯一の東西杭列である第6杭列の内、杭No.28・52・39は、それぞれ南北杭列の第1・3・4杭列に所属する可能性もないではないが、一応、第6杭列に所属するものとして取り扱った。各杭列の所属杭及び特徴は以下のとおりである（第48図、第10・11表）。

- ・第1杭列：杭No.19～27・29～32の13本からなる。杭間は50～80cmの間隔のものが多く、方向性はN-15°-Wである。各杭は半切材を除く各素材の太いものが使用され、これらは先端加工が丁寧で、また、全てのものに焦痕が認められる（杭No.19は識別不能）。各杭の打ち込み方向は北東方向を中心とし、復元全長は100cm前後のものを主とする。杭No.74は杭No.19の西脇に位置する。丸木で最大径4.5cmのものである。他の杭と最大幅（径）が異なる

- ることより当杭列とは切り離したが、I類（最大径5.5cm未満）では唯一の焦痕を有する特異なものであることから察すれば、当杭列に伴う可能性もある。
- ・第2杭列：杭No.75・41～46の7本からなる。杭間は60cm前後で、方向性はN-4°-Eである。各杭の素材・最大幅（径）・先端加工・焦痕の内訳は第1杭列とほぼ同様であるが、素材で丸木の占める割合が少ない。各杭の打ち込み方向は南西方向・直立を中心とし、復元全長は80cm前後を主とする。
  - ・第3杭列：杭No.77～79・47・70・48・58・49・59・50・51・53・54の13本からなる。この内、杭No.79・47、杭No.70・48・58、杭No.49・59では、同一地点に意識的に集中させ打ち込んだ状況を示している（杭No.51と第7杭列の杭No.52は杭列こそ異なるが、上記と同様な性格のもとに打ち込まれた可能性がある）。これらを各々一括として取り扱うとすれば杭間は50cm前後である。方向性は第1杭列とほぼ同一で、これと平行する。各杭の素材・最大幅（径）・先端加工・焦痕は第1・2杭列と第4杭列との中間的な様相を呈している。各杭の打ち込み方向は、ばらつきが多いが、直立・北西・南西方向を中心とする。復元全長は最大幅（径）の太いもの（II類）は、全て1m未満であるのに対して、細いもの（I類）は全て1m以上の125cm前後を主とし、材の太さによって全長が大きく2分される（第11表）。
  - ・第4杭列：杭No.34・35・63・36・37・56・38・57・60・61・62・65・64の13木からなる。第3杭列と同様に杭No.35・63・36、杭No.56・38・57、杭No.61・62、杭No.65・64の4ヶ所で2～3本の杭の集中が認められる（杭No.60と第6杭列杭No.39との関係も同様か）。これらを各々一括として取り扱うとすれば、杭間は60cm前後である。方向性は第1・3杭列とほぼ同一で、これらのほぼ中央を平行する。各杭は全て丸木で、素材において第1・2杭列と大きく異なる。最大径は、細いもの（I類）を主体とし、太いものでも7cm未満のII類で、第3杭列よりさらに細い傾向性がある。先端加工は、細いもの太いもののいずれにも、一方向の簡単なものが認められ、細いものではこの占める割合が顕著であり、第3杭列に比べ加工がいすれの太さのものも粗雑な感がある。さらに、太いものは第1・2・3杭列と異なり全く焦痕を有しない。各杭の打ち込み方向は、第3杭列よりもさらにばらつきが多いが、東方向を中心とする。復元全長もばらつきが多いが、最大径が太いものも細いものも第3杭列あるいは各杭列に比べ、135cm以上の長いものが主体となり、細いものには2mに達するものもある。
  - ・第5杭列：杭No.1～3・5～10の9本からなる。杭間は40cm前後で、他の杭列に比べて狭い。方向性はN-7°-Wで、第1・3・4杭列とはやや異なる。各杭は全て最大径5cm以下の細い丸木であるが、先端加工は丁寧なものが主である。また、焦痕を有するものはない。

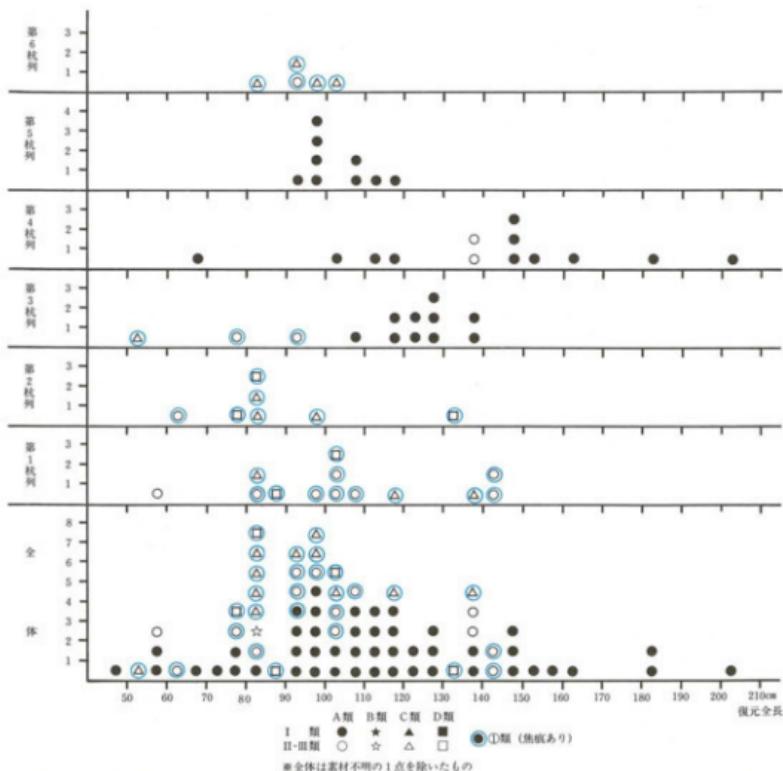
図48 図 3層水田跡列の属性別配置



第10表 杠列内杭属性表

杭列名	本数	杭間隔 (m)	杭列方位	杭 著 材				杭最大幅面				杭先端加工		杭打ち込み方向								杭復元全長 cm	
				A	B	C	D	I	II	III	a	b	①	②	直	北	東	南	西	西北			
第1杭列	12本	30~130	N-15°-W	8	0	3	2	0	9	4	1	11	12	0	0	1	7	2	0	1	2	0	58~143
第2杭列	7本	30~70	N-4°-E	1	0	3	3	0	4	3	1	6	7	0	2	1	1	0	0	0	3	0	61~130
第3杭列	12本	15~75	N-20°-W	12	0	1	0	10	3	0	4	8	3	10	4	1	1	1	0	1	2	0	54~135
第4杭列	12本	19~115	N-21°-W	13	0	0	0	11	2	0	6	4	0	13	0	2	1	5	1	0	1	1	68~200
第5杭列	9本	30~50	N-7°-W	9	0	0	0	9	0	0	1	8	0	8	1	1	3	0	0	2	1	1	90~115
第6杭列	5本	50~80	N-81°-E	1	0	4	0	0	3	2	0	5	5	0	4	0	0	0	0	0	0	1	83~102

第11表 杠列別杭復元全長数量表



第1～4杭列と素材・最大径・先端加工・焦痕を比較してみると、いずれかの属性においても差異が認められるが、敢えて類似する杭列を求めるならば第4杭列が上げられる。しかしながら、これに復元全長を加えてみると、復元全長が当杭列の場合には90cm以上120cm未満に集中しており、135cm以上の長いものを主とする第4杭列の在り方とは全く異なる。各杭の打ち込み方向は、北東・南方向を中心としている。なお、杭列の南、西に位置する杭No.11・12、杭No.4は、方向性がやや異なるが、間隔・素材・最大径・焦痕・復元全長の点で類似性が認められ、当杭列に帰属する可能性がある。

- 第6杭列：杭No.52・40・39・33・28の5本からなる。唯一の東西方向の杭列で、第1杭列と第3杭列の間に位置する。杭間は50～80cmで、第1・2杭列に類似する。方向性はN-81°-Eで、第1・3・4杭列とはほぼ直交する。丸木1点の外は全て4分割材で、角材の有無を除けば、素材最大幅（径）・先端加工・焦痕・復元全長の内訳は第1・2杭列とほぼ同様である。各杭の打ち込み方向は垂直方向を主とする。

以上の各杭列の特徴より、第1杭列と第2杭列とはやや方向性を異にするが、他においては類似点が多く、杭の主たる打ち込み方向が逆方向（横断面「ハ」字状）となっている。第3杭列は、第1杭列と同一方向性をとり平行するもので、第1・2杭列と第4杭列の中間的な特徴を兼ね備えたものである。第2杭列の延長上に位置し、第1杭列との関係では、杭の主たる打ち込み方向が逆方向となっている。これらより第2杭列と第3杭列は同一杭列と考える。これらは第1杭列と対の関係となっていることが看取される。

①第1・2杭列の各杭は、ほぼ同様な間隔で単独で打ち込まれており、多くは手の加えられた素材で、しかも、太い材で、先端加工が鋭利あるいは丁寧で、かつ表面が焼かれており、復元全長も1m前後のものを主とするものである。これらは杭の中でも特殊な位置を占めるものである。

②第3杭列では、最大幅（径）の太い材が少ないものの、細い材の復元全長は太いものより長く、しかも、太い材の筋には必ず細い材が打ち込まれている。

という①・②特徴より、これら対の杭列は「ハ」字状に強固に構築されており、しかも、これらの機能を永続させるための腐食防止策（焦痕）がとられている。従って、これら杭列は畦畔の両側に取り付いた土留め用の杭列と考えられる。畦畔幅が約1.5～2.5mと広いことより基幹的な大畦畔であった可能性もある。さらに、畦畔の中央を走る第4杭列、畦畔内を直交する第6杭列、畦畔内の単独の杭、後述する横木は地盤沈下防止用の施設と考えられる。ただし、第6杭列は第1・2杭列とほぼ同様な特徴を備えており、他の機能を有する可能性もある。なお、第5杭列は他の杭列との属性の比較において異質な存在であった。また、位置関係からも上記畦畔に伴う杭列とは言い難い。他の畦畔に伴う杭列とも考えられるが、その性格について

は不明としておきたい。

〈横木〉(第47図、写真33~35)

第3杭列、第4杭列、第6杭列、杭№72・73に囲まれた内より丸木の横木4本(横木1~4)と樹木の切り株1点が出土した。横木はいずれも枝払いされたもので、横木1・2の片方の端部には明確な切断面が認められる。それぞれの全長は約58~191cm、最大径は7~12cmと規格性はない。横木4はこの内、最も短く太いものであるが、遺存状態が悪く本来の形状を呈していないものと考えられる。これら4本の横木は、第3杭列と第4杭列にそれぞれ並行して並んでいる。全体的に第3杭列にやや寄って位置し、両側の横木1と横木3の間隔は約60cmである。樹木の切り株は遺存状態が悪いが、全長約46cm、最大径約23cmを測る。横木の北端部を斜めにまたぐような状態で出土している。切り株の下の横木1の西側からは杭№71が検出されている。調査に際して3層下面の認定を誤ったため、横木と3層下面との関係を捉えることが出来なかった。しかし、隣接調査区壁面観察では(C-1グリッド西壁、第46図7、写真35)3層下面で樹木片が認められており、横木も同様に3層下面に位置していたことが考えられる。

横木・切り株が1号河川跡底面の内、溝状に下がる部分の上に位置すること、杭列と密接な配置関係を持つこと、さらに、第3杭列・第4杭列の想定される性格より、これら横木・切り株はおそらく駐畔の地盤沈下防止の施設と考えられる。

〈出土遺物〉

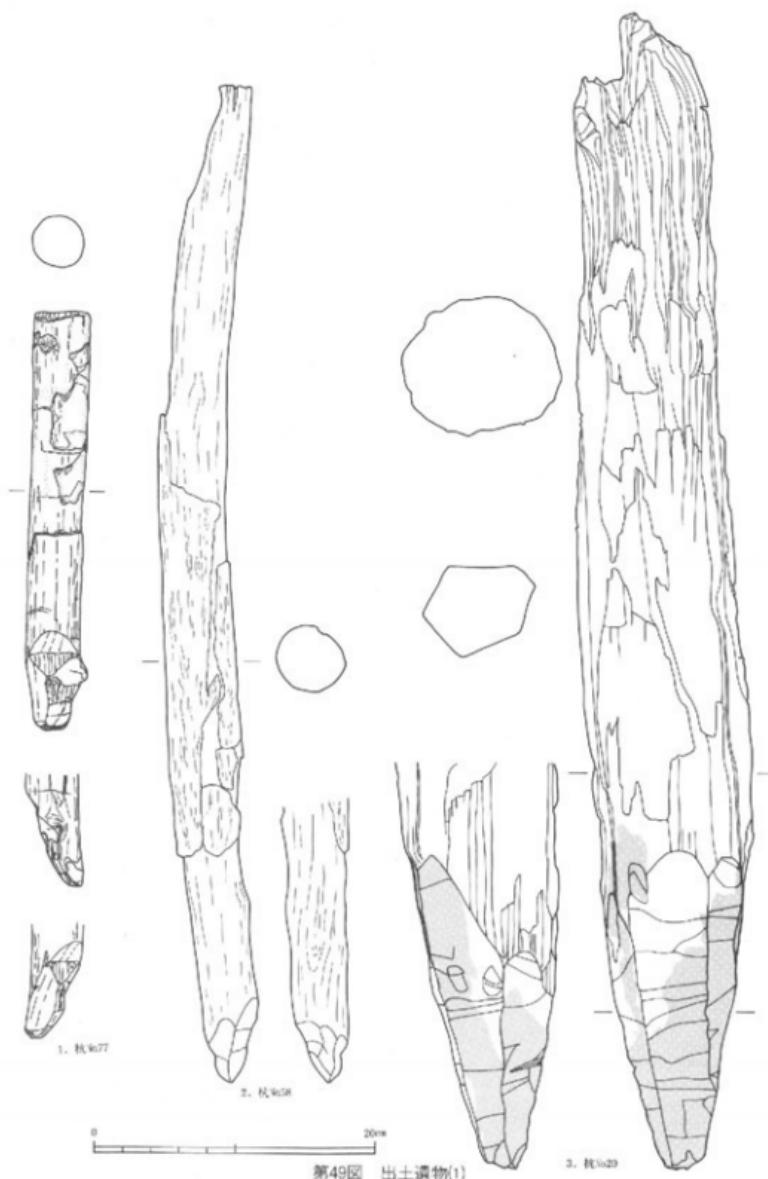
須恵器片が1点(第56図1)出土したのみである。甕の体部資料で、外面平行叩き目、内面平行押さえ目が加えられている。外面及び下方断面全面に強い磨滅痕が認められ、何らかに転用されたものと考えられる。

## (2) 5層上面

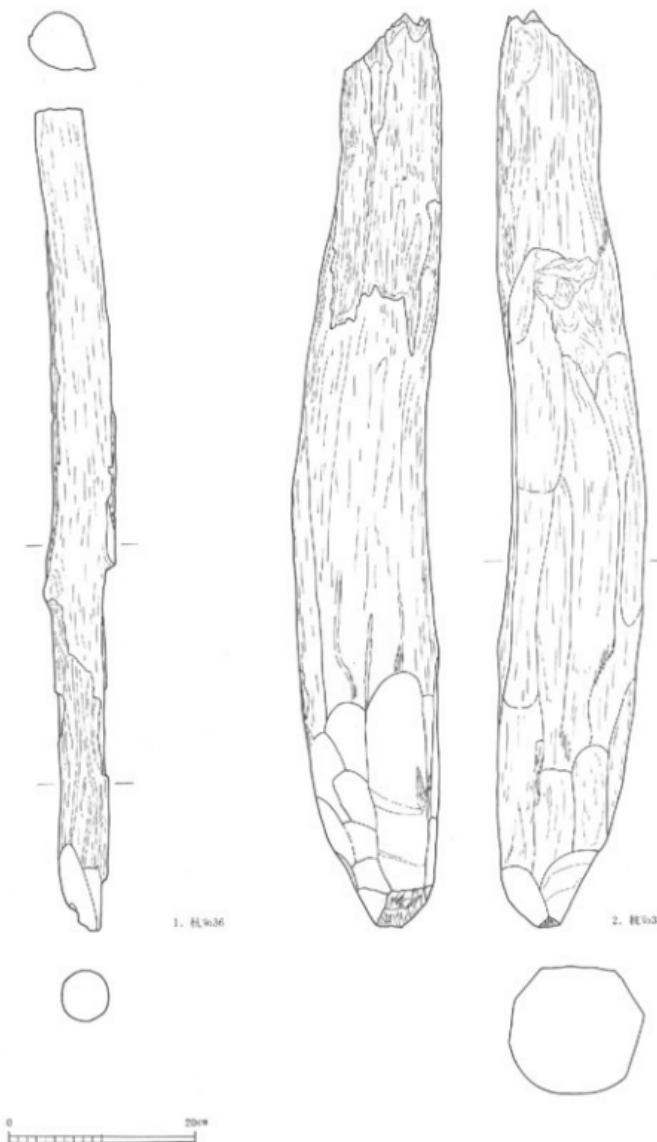
### 1号河川跡-SR1-

〈遺構状況〉(第45図、第46図5~7、写真28~30)

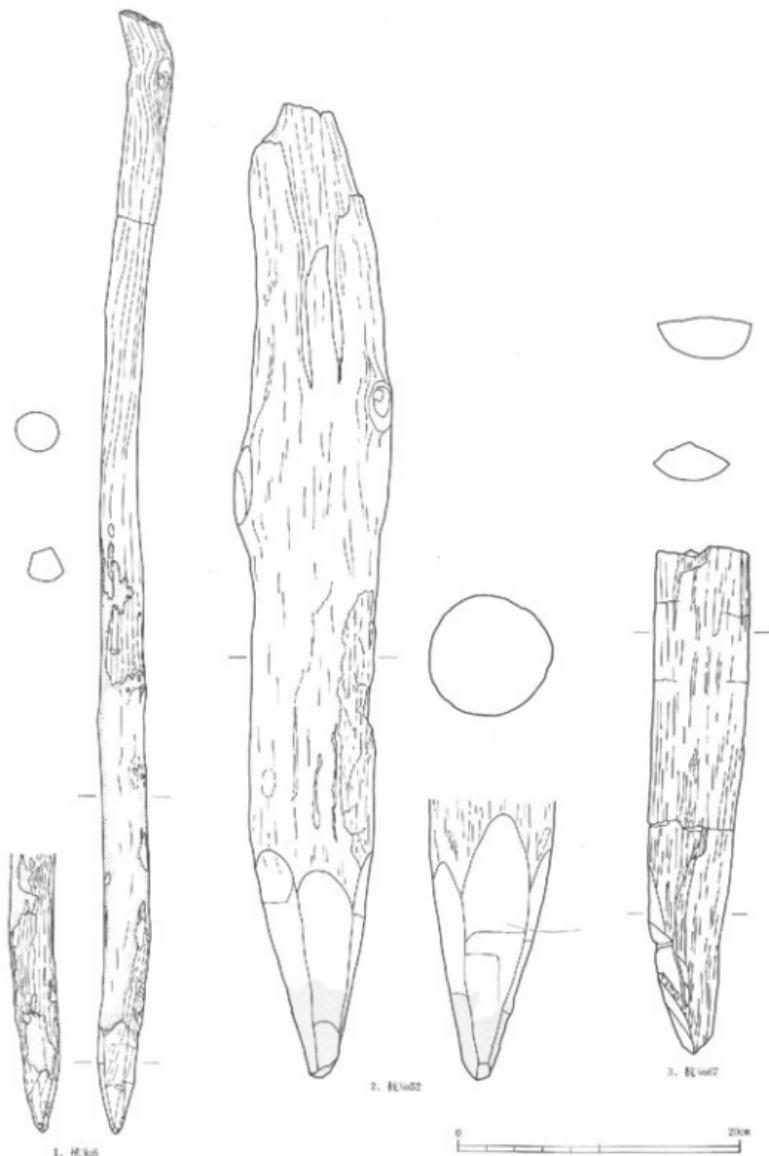
北東~南西方向に延びる自然流路跡である。南岸部分は検出されたが、北岸部分は調査区外に位置し検出不能であった。上端幅8m以上にも達する規模の大きな河川跡である。上端、下端とも出入りが激しく、直線的ではない。河川幅に比べ深さは浅く、調査区内で最も深い部分(B・C-1グリット付近)でも約90cmと1mを越えない。底面には溝状あるいは窪地状の落ち込みがあり、凹凸が顕著である。当河川は最初に基本層4層によって埋まるが、完全に平坦に埋まりきることはなく、その後も窪地状の地形が残り、基本層がこの部分において厚く堆積するといった状況を生み出している。基本層4層はa~cの3層に細別できる。a層は粘土、c層は砂で、b層はその中間の混在層である。これらは、それぞれ中心とする分布域は異なる



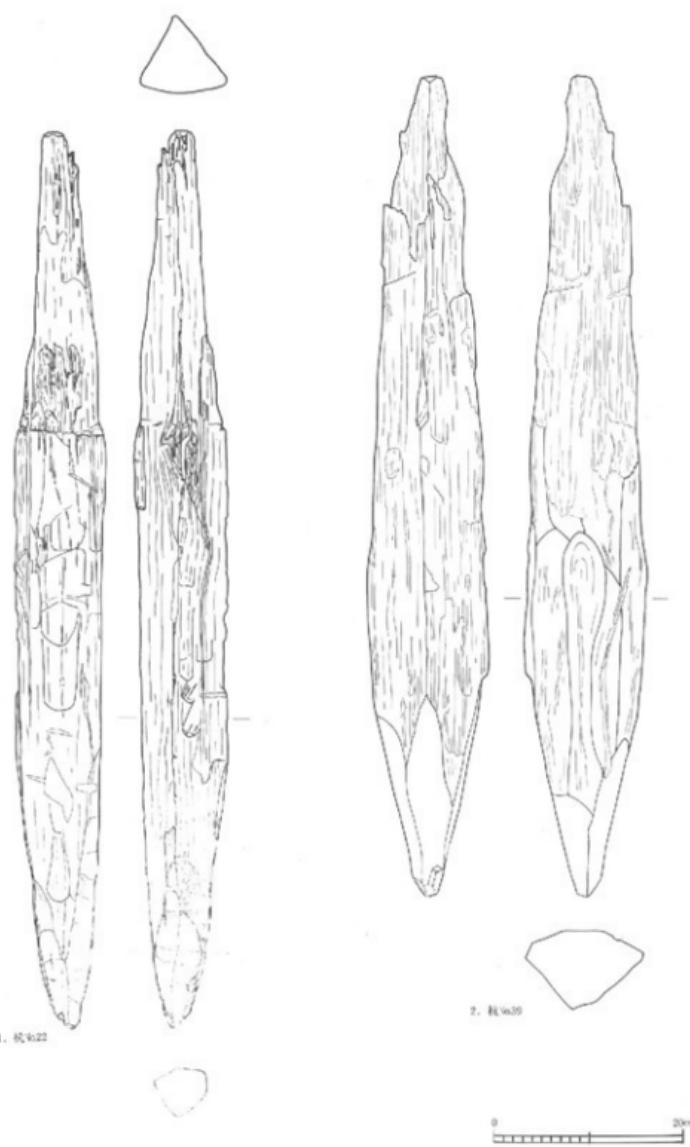
第49図 出土遺物(1)



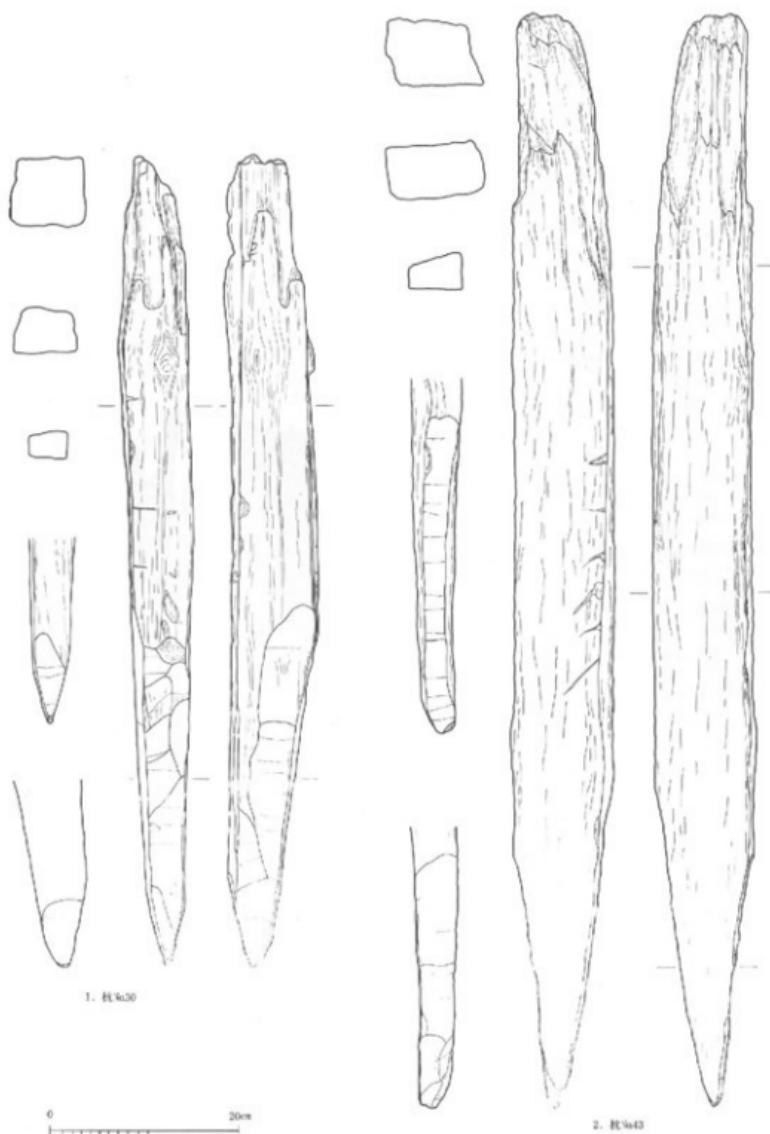
第50図 出土遺物(2)



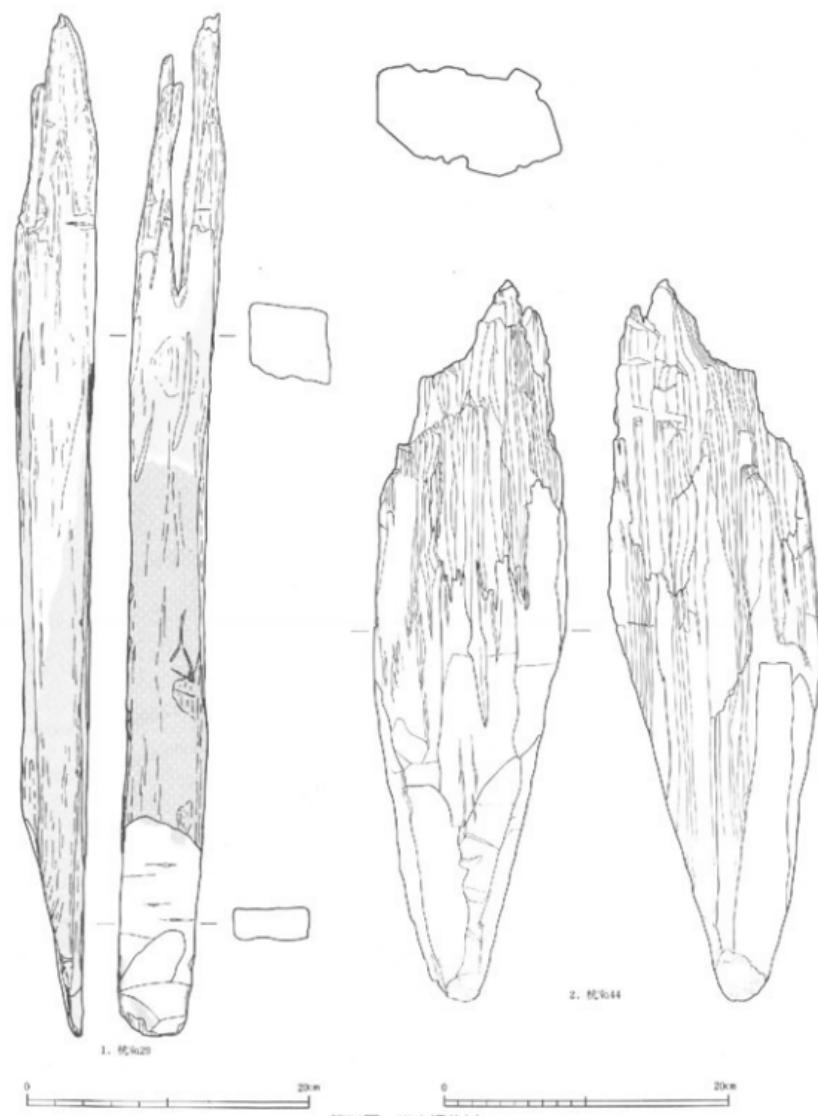
第51図 出土遺物(3)



第52図 出土遺物(4)



第53図 出土遺物(5)



第54図 出土遺物(6)



第12表 3層六庄跡出土坑・櫛木鉗察表①

No.	総固番号	頂板番号	種別	机別	掏出層	方向	打ち抜き度 (%)	素材	塊各長 (mm)	塊各幅 (mm)	先端加工	焦頭	極度	備考	分類
1	—	—	柱	第5	4層中	北	7	丸木	65.8	90	3.3	4方向	なし	有り	A1b2
2	—	—	柱	第5	4層中	南西	10	丸木	65.9	97	2.5	4方向以上	なし	有り	A1b2
3	—	—	柱	第5	4層中	北西	7	丸木	77.4	95	3.8	5方向	なし	有り	A1b2
4	—	—	柱	—	4層中	南西	25	丸木	65.5	96	2.8	1方向	なし	有り	A1a2
5	—	—	柱	第5	4層上部	東面	0	丸木	75.5	95	4.3	5方向	なし	有り	西曲
6	第51回5	第45-1	柱	第5	4層上部	南	7	丸木	80.1	114	3.0	5方向	なし	有り	A1b2
7	—	—	柱	第5	4層上部	北東	10	丸木	87.0	115	3.3	4方向	なし	—	A1b2
8	—	—	柱	第5	5層下部	北東	10	丸木	55.8	105	3.4	5方向	なし	有り	A1b2
9	—	—	柱	第5	5層中	西	6	丸木	57.3	106	4.7	5方向	なし	有り	西曲
10	—	—	柱	第5	5層下部	南	31	丸木	35.0	90	2.7	1方向	なし	有り	やや西曲、尖端部一部欠損 A1a2
11	—	—	柱	—	4層中	南	36	丸木	42.3	110	2.3	1方向	なし	有り	先端部一部欠損 A1a2
12	—	—	柱	—	4層中	南	55	丸木	16.0	108	2.8	1方向	なし	有り	先端部一部欠損 A1a2
13	—	—	柱	—	4層上面	北東	9	丸木	61.8	90	3.1	5方向	なし	有り	先端部直角、やや西曲 A1b2
14	—	—	柱	—	4層上面	南	2	丸木	70.1	90	3.5	5方向	なし	有り	先端部一部欠損 A1b2
15	—	—	柱	—	4層上面	南	2	丸木	68.0	102	4.0	5方向	なし	—	A1b2
16	—	—	柱	—	4層中	南西	23	丸木	36.8	75	3.8	5方向	なし	有り	A1b2

## 第12章 3層水田跡出土材・樹木觀察表(2)

No.	標記番号	固有番号	種別	形別	輪山粉	方圓	打ち出野型	株序	葉材	(cm)	後元長	最大幅	径(cm)	先端山T	先端	側皮	瘤	参考	分類
17			杭	—	4層下部	垂直	2	丸木	47.5	82	4.3	5万円	なし	有り	—	—	A I b (2)		
18			杭	—	4層中	垂直	14	丸木	21.0	58	2.5	不明	なし	有り	先端部欠損	—	A I a (2)		
19	第49回3	写真45-2	杭	第1 4層1品	杭	南西	19	丸木	28.9	58	6.2	不明	なし	—	先端部欠損	—	A II		
20	第49回1	—	杭	第1 3層下部	北東	12	丸木	82.0	109	11.4	6万円	先端部	有り	—	—	A III b (1)			
21	—	—	杭	第1 3層下部	北東	11	4分割材	80.5	97	8.0	5万円	先端部	有り	—	—	A II b (1)			
22	第49回1	—	杭	第1 3層下部	北東	14	丸木	96.0	118	9.5	6万円	先端部	有り	—	—	C II b (1)			
23	—	—	杭	第1 3層下部	北東	11	4分割材	83.0	104	8.5	6万円	先端部	有り	—	—	A II b (1)			
24	—	—	杭	第1 3層下部	北東	11	4分割材	122.5	137	10.5	6万円	先端部	有り	—	—	C III b (1)			
25	—	—	杭	第1 3層下部	北東	9	丸木	106.0	141	10.6	5万円	先端部	有り	先端部—側欠損	—	A III b (1)			
26	—	—	杭	第1 3層下部	東	23	丸木	125.5	143	7.5	5万円	先端部	有り	先端部—側欠損	—	A II b (1)			
27	—	—	杭	第1 3層下部	東	5	丸木	59.5	83	7.3	5万円	先端部	有り	先端部—側欠損	—	A II b (1)			
28	—	—	杭	第6 3層下部	垂直	5	4分割材	73.5	83	13.0	5万円	先端部	有り	—	—	C III b (1)			
29	第49回1	写真47-1	杭	第1 3層上部	東	8	角材	73.0	87	5.7	1万円	全体	なし	—	—	D II a (1)			
30	第49回1	写真47-3	杭	第1 4層上部	南西	9	角材	87.0	101	8.5	4万円	先端部	なし	—	—	D II b (1)			
31	第49回2	写真46-1	杭	第1 3層下部	北	6	4分割材	78.3	81	6.0	2万円	全体	なし	—	—	C II b (1)			
32	第49回2	写真46-2	杭	第1 3層下部	北	21	丸木	99.4	100	14.4	6万円	なし	有り	先端部—側欠損	—	A II b (1)			
33	—	—	杭	第6 3層下部	北西	9	4分割材	82.0	96	8.3	6万円	全体	なし	—	—	C II b (1)			
34	—	—	杭	第4 3層下部	東	15	丸木	41.2	119	4.1	2万円	なし	有り	—	—	A II b (1)			
35	—	—	杭	第4 6層1品	南西	36	丸木	83.5	146	3.1	7万円	なし	有り	先端部欠損	—	A I a (2)			
36	第49回1	写真47-4	杭	第4 6層中	南東	18	丸木	89.4	138	6.8	1万円	なし	有り	先端部—側欠損	—	A II a (2)			
37	—	—	杭	第4 6層上部	北西	6	丸木	151.3	200	4.1	1万円	なし	有り	先端部—側欠損	—	A I a (2)			
38	—	—	杭	第4 5層1品	北西	11	丸木	99.0	150	4.2	1万円	なし	有り	弯曲	—	A I a (2)			
39	第49回2	写真45-4	杭	第6 3層下部	垂直	5	4分割材	87.8	102	12.6	5万円	全体	なし	—	—	C II b (1)			
40	—	—	杭	第6 4層1品	正直	4	4分割材	56.0	92	8.3	5万円	先端部	なし	先端部—側欠損	—	C III b (1)			
41	—	—	杭	第2 3層下部	北	8	角材	65.0	79	8.0	1万円	有り	なし	—	—	D II a (1)			
42	—	—	杭	第2 3層下部	南西	7	4分割材	87.3	96	7.8	3万円	全体	なし	—	—	C II b (1)			
43	第49回2	写真46-2	杭	第2 3層下部	垂直	0	角材	117.0	130	10.8	2万円	全体	なし	—	—	D II b (1)			
44	第49回2	写真47-2	杭	第2 3層下部	垂直	4	角材	51.5	81	13.5	6万円	先端部	なし	—	—	C III b (1)			
45	—	—	杭	第2 5層下部	南西	8	4分割材	70.0	83	12.0	5万円	全体	有り	—	—	—			
46	—	—	杭	第2 3層下部	南西	23	丸木	37.0	61	7.3	6万円	なし	有り	先端部—側欠損	—	A II b (1)			
47	—	—	杭	第3 3層下部	南西	13	丸木	73.0	123	5.0	3万円	なし	有り	—	—	A I b (2)			
48	—	—	杭	第3 3層下部	正直	3	丸木	66.0	93	9.5	5万円	先端部	有り	—	—	A II b (1)			
49	—	—	杭	第3 4層中	南	8	丸木	41.0	76	7.2	4万円	有り	—	先端部—側欠損	—	A II b (1)			
50	—	—	杭	第3 6層上面	北東	8	丸木	71.0	119	4.0	1万円	なし	有り	先端部—側欠損	—	A I a (2)			

第2表 3層水田跡出土材・樹木観察表③

No.	採取番号	採取番号	種別	特別	樹木	打孔部位	方向	木材	残存長	板元長	板元幅	板元厚	先端加工	焼灰	備考	分類
51	—	—	桃	第3 6層上面	北西	6	丸木	86.0	135	3.6	2方向	なし	有り	—	A I b ②	
52	第51回2	第46-3	桃	第3 6層下部	通路	2	丸木	63.6	91	8.6	6方向	なし	有り	—	A II b ①	
53	—	—	桃	第3 6層上面	北西	7	丸木	83.0	135	3.1	4方向	なし	有り	やや渦曲	A I b ②	
54	—	—	桜	第3 3層下部	垂直	3	4分割材	41.5	54	9.0	3方向	有り	なし	—	C II b ①	
55	—	—	桃	—	4層下部	垂直	4	丸木	12.0	49	3.8	3方向	なし	不明	先端部のくぼむ	A I b ②
56	—	—	桃	第4 6層上面	東	14	丸木	63.0	111	2.7	1方向	なし	有り	先端部一部欠損	A I a ②	
57	—	—	桃	第4 6層上面	東	14	木本	121.0	181	4.3	2方向	なし	有り	やや渦曲・先端部一部欠損	A I b ②	
58	第49回2	写真46-4	桃	第3 4層下部	垂直	3	丸木	71.1	117	5.0	5方向	なし	有り	—	A I b ②	
59	—	—	桃	第3 4層中	北	8	丸木	85.5	122	5.4	3方向	なし	有り	先端部渦曲	A I b ②	
60	—	—	桃	第4 6層上面	北東	7	丸木	95.0	146	2.7	不規則	なし	有り	先端部欠損	A I a ②	
61	—	—	桃	第4 6層上面	北東	38	丸木	124.7	162	3.5	1方向	なし	有り	先端部一部欠損	A I a ②	
62	—	—	桃	第4 5層下部	北	17	丸木	92.5	139	6.7	3方向以上	なし	有り	やや渦曲・先端部一部欠損	A II b ②	
63	—	—	桃	第4 6層上面	東	24	丸木	10.0	68	5.4	不規則	なし	有り	先端部欠損	A I b ②	
64	—	—	桃	第4 5層下部	北東	36	丸木	63.9	116	2.8	2方向	なし	有り	やや渦曲	A I b ②	
65	—	—	桃	第4 5層下部	東	10	丸木	71.4	103	2.9	1方向	なし	有り	—	A I a ②	
66	—	—	桃	—	5層下部	北	12	丸木	10.0	56	3.6	1方向	なし	有り	先端部のくぼむ	A I a ②
67	第51回3	写真47-5	桃	—	5層下部	垂直	3	千切材	36.2	81	6.6	1方向	なし	不明	—	B II a ②
68	—	—	桃	—	5層下部	北西	14	丸木	30.5	71	2.8	1方向	なし	有り	先端部一部欠損	A I a ②
69	—	—	桃	—	7層中	北西	28	丸木	43.8	113	2.5	1方向	なし	有り	先端部一部欠損	A I a ②
70	—	—	桃	第3 6層上面	南西	24	丸木	58.4	108	4.0	1方向	なし	有り	—	A I a ②	
71	—	—	桃	—	7層中	垂直	0	不明	13.0	79	3.3以上	不規則	なし	不明	先端部渦曲	—
72	—	—	桃	—	7層下部	南西	49	丸木	63.0	181	2.5	1方向	なし	有り	先端部渦曲	A I a ②
73	—	—	桃	—	7層下部	南西	32	丸木	55.5	158	3.1	1方向	なし	有り	先端部一部欠損	A I a ②
74	—	—	桃	—	7層下部	南	9	丸木	27.8	94	4.4	5方向	有り	なし	—	A I b ①
75	—	—	桃	第2 4層中	南東	13	4分割材	30.8	80	7.5	3方向	有り	なし	先端部渦曲	C II b ①	
76	—	—	桃	—	6層中	南東	0	丸木	14.0	77	2.2	4方向	なし	不明	先端部渦曲	A I a ②
77	第49回1	写真47-6	桃	第3 8層中	東	14	丸木	29.7	126	3.7	1方向	なし	有り	—	A I a ②	
78	—	—	桃	第3 8層中	北西	19	丸木	30.0	127	3.9	1方向	なし	有り	—	A I a ②	
79	—	—	楓木	第3 3層下部	通路	3	丸木	45.9	129	4.5	2方向	なし	有り	—	A I b ②	
—	第55回1	—	楓木	—	3層下部	—	—	丸木	196.5	—	7.6	—	なし	楓木1、楓木に切断痕	—	
—	—	—	楓木	—	3層下部	—	—	丸木	97.3	—	6.5	—	なし	楓木2、楓木に切断痕	—	
—	—	—	楓木	—	3層下部	—	—	丸木	58.9	—	11.8	—	なし	楓木3、楓木に切断痕	—	
—	—	—	楓木	—	3層下部	—	—	丸木	190.7	—	10.6	—	なし	楓木4	—	
—	—	—	楓木	—	3層下部	—	—	丸木	46.2	—	23.2	—	なし	楓木上で検出、生存状態悪	—	

ものの、明確な層離面を持たないのが特徴で、同一層内の土質変化として捉えることも可能である。基本層4層は南岸上にも10cm前後の厚さで堆積しており、南岸とした部分も河川内的一部である可能性もある。

#### 〈出土遺物〉(第56図)

土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品等が70点出土した。鉄製品1点を除けばすべて土器類で、しかもすべて破片資料である。土器類で図化可能な資料は7点で、すべて須恵器の壺であった。これらの底部切離し技法は、回転ヘラ切り(6・7)か回転糸切(2~5)で、その後の底部の調整は、回転ヘラケズリ(8)か無調整(2~7)である。土師器には図化可能な資料がなかったが、須恵器同様に壺と甕があり、壺が多数を占める。壺の底部の切離し技法は不明であるが、その後の底部の調整は、回転ヘラケズリのものと手持ちヘラケズリのものがある。内面は黒色処理が施されている。9は断面形長方形の棒状の鉄製品である。鍛造品で全長は約30cmである。中央部付近では幅は1.5cm、厚さは1.0cmである。頭部はいちょうの葉状に開き、厚さも0.6cmと薄くなり、中央部に内径6mmの孔が1個穿たれている。先端部は逆に丸みをもって尖っている。用途は不明である。

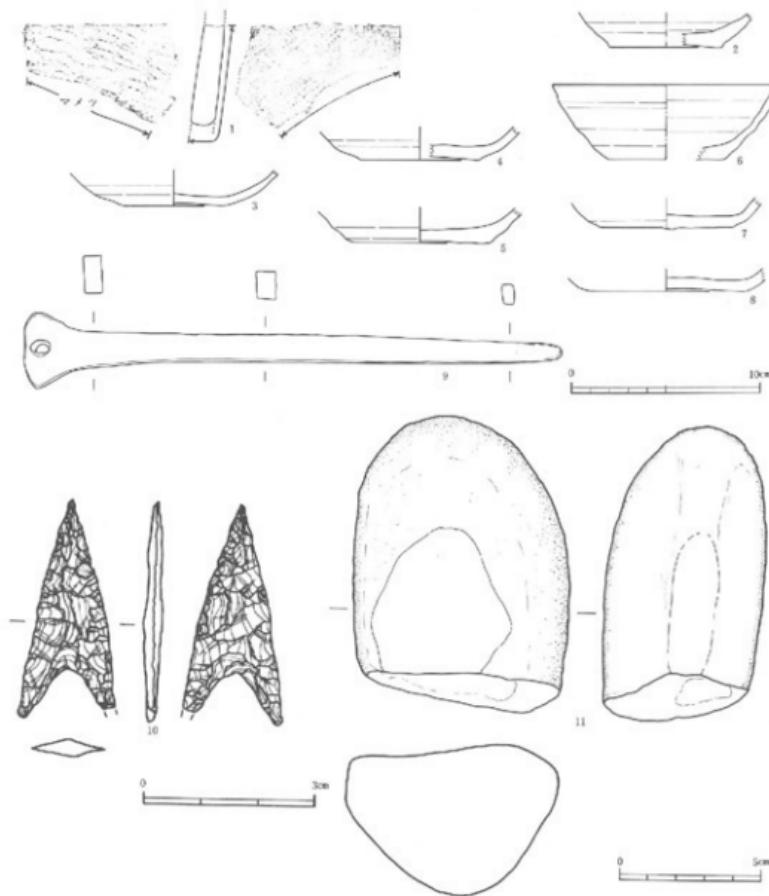
以上、須恵器・土師器の特徴よりこれら出土遺物の所属年代は、奈良時代から平安時代前半に位置付けられるものと考えられる。

#### (3) その他の出土遺物(第56図)

1層より陶器が2点、2b層より土師器・須恵器が各1点、7層より石鎌が1点、8c層より磨石が1点出土している。陶器・土師器・須恵器はいずれも細片で、図化不能なものである。陶器の製作年代はともに近世で、その内一方は唐津系のものである。土師器・須恵器の器種はともに甕である。石鎌(10)は無茎のもので、基部に大きなえぐりがはいっている。基部先端を一部欠損する。磨石(11)は小型の碌で、表面の風化が著しいが、2面に擦り面らしき部分が認められる。

## 4.まとめ

1. 検出遺構としては、3層水田跡、1号河川跡が検出された。また、2a層・2b層はその層相より水田土壤の可能性がある。
2. 3層水田跡は上面で畦畔は検出されなかつたが、畦畔の両側に取り付いたと考えられる土留め用の杭列と水田区画を想定させる段差が検出された。この杭列は、段差下面に位置し南北方向をとるもので、段差上面の区画の西側を画するものと考えられる。また、段差部分の



No.	出典番号	遺物・部位	種別	特徴	遺存度	口 径	底 径	厚	高	色調	符 号
1	写真44-2	3 a 種	直刀形	焼	破片					灰白色	凸面打削形、直刃平行且非刃上側部に凹弧
2	写真44-1	4 種	直刀形?	环	約 1/4					黒色	エクリ彫鑿、刃部半切無調整、胎土も黒色
3	——	4 種	直刀形	环	下半 2/3	5.0				灰白色	エクリ彫鑿、刃部半切無調整
4	——	4 種	直刀形	环	底部 2/5	(6.4)				灰白色	エクリ彫鑿、刃部半切無調整
5	——	4 種	直刀形	环	底部 1/4	(7.0)				灰白色	エクリ彫鑿、刃部半切無調整
6	——	4 種	直刀形	环	約 1/8	(12.0)	(6.2)	4.0		灰白色	エクリ彫鑿、刃部ヘラ切無調整
7	——	4 種	直刀形	环	底部 3/5	7.9				灰白色	エクリ彫鑿、刃部ヘラ切無調整
8	——	4 種	直刀形	环	底部 4/5	8.2				灰白色	エクリ彫鑿、刃部不明、刃部ヘラ切無
No.	出典番号	遺物・部位	種別	名称	遺存度	長さ	幅	厚	質量(g)	測 定	考
9	写真44-5	4 種	鉄製品	不明	完形	28.4	0.9~4.0	0.6~1.1	217.5	鐵造品、頭部を扁平に加工	
No.	出典番号	遺物・部位	種別	名称	長さ	さ	幅	厚	重 量(g)	測 定	考
10	写真44-3	7 種	石器	石器	3.9	1.7	0.3	1.5	チャート		
11	写真44-4	8 c 種	磨石	磨石	16.5	7.6	5.4	555.5	硬灰岩		

第56図 出土遺物(2)

北側にこの杭列と直交する東西方向の畦畔が取り付き、段差上面の区画の北側を画した可能性もある。なお、杭列を伴った畦畔は、その杭の特徴や地盤沈下防止策がとられていること、そして幅が広いことより基幹的な大畦畔であった可能性がある。

3. 1号河川跡は5層上面で検出された比較的大きな自然流路である。3層水田跡にみられた段差及び下面の種々の施設は、この河川跡の地形的影響の結果と考えられる。

4. 検出遺構及び各層の所属年代であるが、1号河川跡を除けば出土遺物に乏しく、また、周辺調査区との層位の対応関係が明確でなかったため多くは言及できないが、以下のような所属年代が想定される。

3層水田跡－平安時代以降

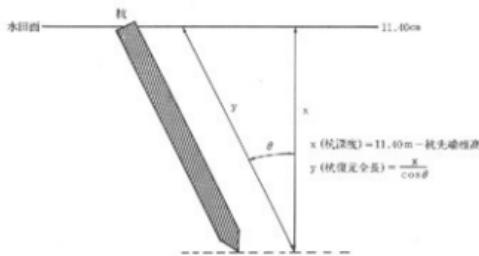
1号河川跡－平安時代

7層－縄文時代

#### 註

1. 杭の打ち込み角度 $\theta$ とは、第57図に示した角度で、値が小さくなれば杭がより垂直に、反対に大きくなれば杭がより斜位に打ち込まれたことを表す。杭の打ち込み方向は、角度 $\theta$ が5°以下の場合は、垂直と同等と見なして直立一方向性なしとし、6°以上のものは方位45°分割による8方向に分けた。

2. 杭の残存長には、10.0～151.3cmのものまでが認められ、60cm以上90cm未満のものが約半数弱を占め最も多い。ただし、これら数値は遺存状態を反映しているのに過ぎず、実際の全長とは異なる。杭全長の復元値は、水田上面推定標高を11.40mに設定し、杭先端標高との差を $\cos \theta$ に乘じたものである（第57図）。ただし、水田面上面推定標高は最も低い値に据え、加えて杭頭部がほぼ水田面上面標高と同位置であることを前提とし復元しているため、杭の全長は、実際にはもっと長かったことも予測される。



第57図 杭打ち込み角度 $\theta$

# 第3章 プラント・オパール分析

古環境研究所

## 1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、山口遺跡（第11次調査）および富沢遺跡（第50・51・52・53次調査）における種作跡の検証および探査を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

## 2. 試料

試料は遺跡調査の担当者によって容量50cm<sup>3</sup>の採土管を用いて採取され、当研究所に送られてきたものである。試料数は計33点である。

## 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40μm、約0.02g）  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（150W・26kHz・15分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレベラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数はガラスピース個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレベラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10<sup>-5</sup>g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの稻穀生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は1.03である（杉山・藤原、1987）

第13表 プラント・オパール分析結果

## 仙台市、山口1次

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
3	19	9	1.22	4,700	5.28	2,800	20,800	3,700	0
4	28	4	1.12	6,300	2.88	1,800	25,200	3,600	900
5	32	3	0.97	5,200	1.55	1,700	7,000	1,700	0
6	35	13	1.14	4,800	7.23	800	8,000	0	0
SR 1-2	48	5	0.85	800	6.31	5,100	8,600	0	0
8	53	4	0.74	0	6.00	10,100	12,000	0	0
9	57	-	0.90	0	-	10,000	7,500	0	0

## 仙台市、富沢50次

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	20	4	1.01	7,800	3.21	4,900	12,700	0	0
3	24	6	0.82	3,900	1.98	3,900	10,700	900	0
4	30	-	0.51	0	-	6,500	1,600	800	0

## 仙台市、富沢51次

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2a	22	9	1.25	10,500	12.05	1,900	23,100	900	0
3a	32	4	1.21	6,200	3.05	3,500	18,700	800	0
3b	36	4	1.09	6,300	2.80	8,100	23,400	900	0
4	40	5	1.24	9,500	6.03	6,600	13,300	4,700	0
5	45	9	1.04	1,500	1.39	3,900	26,300	0	0
6	54	8	1.17	0	0.00	2,900	16,100	700	0
8	65	-	1.29	0	-	3,800	9,900	0	0

## 仙台市、富沢52次漬跡

## No.1地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
3	0	4	1.15	6,000	3.09	800	4,100	800	0
4a	4	7	1.01	6,000	4.33	3,400	1,700	0	0
4c	11	6	1.01	2,800	1.73	2,100	1,200	700	0
5	17	4	0.96	5,700	2.22	900	6,600	900	0
6a	21	16	0.96	7,000	11.04	3,800	2,300	700	0
6b	37	20	0.96	4,300	8.45	1,700	6,800	800	0
11	57	5	0.74	0	0.00	0	7,500	0	0

## No.2地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
7	38	3	0.99	400	0.09	2,600	10,900	400	0
8	41	9	0.88	600	0.46	9,700	5,100	300	0
9	50	6	1.00	0	0.00	900	14,000	0	0
10'	56	3	0.70	0	0.00	0	4,400	0	0
10	59	5	0.65	0	0.00	5,800	2,500	0	0

## 仙台市、富沢53次道路

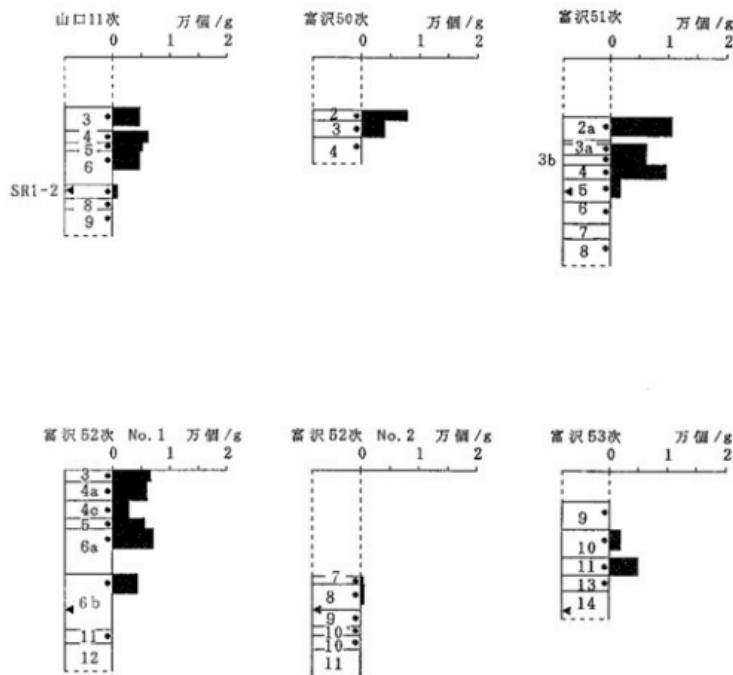
試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケモ科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
9	11	10	0.36	0	0.00	1,800	8,400	0	0
10	21	10	0.60	1,900	1.13	0	11,500	0	0
11	31	6	0.40	4,900	1.17	4,900	2,100	0	0
13	37	6	0.59	0	0.00	0	19,100	0	0

第14表 富沢遺跡および山口遺跡の各位置における稻作の可能性

## 〈記号説明〉

- ……イネのプラント・オバール密度が3,000個／g以上（稻作の可能性が高い）
- △……イネのプラント・オバール密度が3,000個／g未満（稻作の可能性がある）
- ×……イネのプラント・オバールが検出されない

遺跡名	層位	判定	備考（考古学的所見）
山口 11 次	3	○	水田耕作上
	4	○	
	5	○	
	6	○	
	S R I - 2	△	
	8	×	
富沢 50 次	9	×	水田耕作上？、近世 水田耕作土？、平安 平安以前
	2	○	
	3	○	
	4	×	
富沢 51 次	2a	○	水田耕作土 平安
	3a	○	
	3b	○	
	4	○	
	5	△	
	6	×	
	7	×	
富沢 52 次	3	○	水田耕作土？、中世 水田耕作土？、平安 水田耕作土？、平安 水田耕作土？、平安以前 水田耕作土、平安以前 水田耕作土？、平安以前 平安以前
	4a	○	
	4c	△	
	5	○	
	6a	○	
	6c	○	
	7	△	
	8	△	
	9	×	
	10'	×	
	10	×	
	11	×	
	9	×	水田区画検出、弥生
富沢 53 次	10	△	
	11	○	
	13	×	



第58図 イネのプラント・オバールの検出状況  
(△印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所)

#### 4. 分析結果

プラント・オバール分析の結果を、第13・14表および第58図に示す。なお、稲作跡の検証及び探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウンクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

#### 5. 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、富沢遺跡などの場合は、これまでの調査の結果、プラント・オバール密度が3,000個/g程度の場合でも水田遺構が検出されていることから、判断の基準となる数値をとした。この基準に基づいて検討を行い、稲作の可能性を○、△、×印の3段階に区分して第14表に示した。以下に各遺跡（調査区）ごとに検討結果を述べる。

##### (1) 山口遺跡第11次調査

稲作が行われていた可能性が高いと判断されたのは、3層、4層、5層および6層である。このうち、3層および6層は水田耕作土とされていた土層である。また、SR1-2堆積土でも稲作の可能性があると判断された。

##### (2) 富沢遺跡第50次調査

稲作が行われていた可能性が高いと判断されたのは、2層および3層である。このうち、2層は近世の水田耕作土？、3層は平安時代の水田耕作土？とされていた土層である。

##### (3) 富沢遺跡第51次調査

稲作が行われていた可能性が高いと判断されたのは、2a層、3a層、3b層および4層である。このうち2a層は水田耕作土、4層は平安時代以前の畑耕作土？とされていた土層である。また、5層でも稲作の可能性があると判断された。

##### (4) 富沢遺跡第52次調査

稲作が行われていた可能性が高いと判断されたのは、3層、4a層、5層、6a層および6b層である。このうち、3層は中世の水田耕作土？、4a層は平安時代の水田耕作土？、5層および6b層は平安時代以前の水田耕作土？、6a層は平安時代以前の水田耕作土とされていた土層である。また、平安時代の水田耕作土？とされていた4c層、および平安時代以前とされる7・8層でも、稲作の可能性があると判断された。

##### (5) 富沢遺跡第53次調査

稲作が行われていた可能性が高いと判断されたのは、弥生時代の水田耕作土とされていた11

層である。また、弥生時代の水田跡が検出された10層でも、稲作の可能性があると判断された。

〈参考文献〉

- 杉山真二・藤原宏志, 1987. 川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山一古  
環境編一, 川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298
- 藤原宏志, 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の硅酸  
体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学、9：15-29
- 藤原宏志, 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜円式）  
水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa*L.）生産総量の推定  
－. 考古学と自然科学、12：29-41
- 藤原宏志・杉山真二, 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）プラント・オパー  
ル分析による水田址の探し－. 考古学と自然科学、17：73-85.

## 第4章 富沢遺跡南東部検出遺構の検討

第55次調査区の灰白色火山灰ブロックを含む4層から泥炭分を多量に含む7層までの層位を隣接2調査区と対応させたのが第15表である。隣接調査区はいずれも東南東方向に位置し、第55次調査区から第1次調査区（泉崎東工区試掘No.3）（吉岡：1989）までが約45m、第8次調査区（工藤：1984）までが約100mの距離にある。これら3調査区はほぼ直線上に並んでおり、東方に開く谷地形の谷心線上付近に位置する（第59図）。

第55次調査区では7層上面、6b層上面でSR1（1号河川跡）、SD1（1号溝跡）が検出された。SD1はSR1の未埋没部分を利用して造られたもので、そのためにSR1の位置



第59図 富沢遺跡第1次・8次・55次調査区位置図



第60図 第55次調査区(SR1)・第1次調査区(SD2)・第8次調査区(SD6)配置図

・方向を踏襲する。両流路とも部分的検出で、幅に関しては1.5m以上と不明であるが、SD 1の方が規模は小さい。方向性は北西→南東方向で谷心線上に乗っており、第1・8次調査区に延びていく可能性が考えられた。

重複関係・規模・堆積土・方向性からSD 1・SR 1は、第1次調査区では1号溝跡（SD 1）・2号溝跡（SD 2）、第8次調査区では6号溝跡（SD 6）・7号溝跡（SD 7）がこれら両流路に相当するものと考えられるが（第60図）、検出層位は第1次調査区では7層・9a層、第8次調査区では8B層・9層と第1次調査区の2号溝跡を除いて検出層位が合わない（第15表）。

ここで第55次調査区の6b層、第8次調査区の8B層・9層の関係について検討を加えてみたい。両調査区の直上層・直下層の対応関係より、第55次調査区6b層は、第8次調査区の8B・9層のいずれかに対応する。事実、6b層と8B・9層は非常に類似した色調・土性の層である。この内、第55次調査区の6b層は、上部に白づんだ帶が認められること、そして下面が平坦であることより自然堆積層としたものである。一方、8B・9層は畦畔・水路の存在より報文中では共に水田土壤としたものである（工藤：1984）。しかし、その後の検討により、9層検出の畦畔・水路は上層水田跡の擬似畦畔B・自然河川である可能性が指摘され、現状では水田跡の存在については否定的な見解がとられている（斎野：1987）。このような各層の所見・成因に基づけば、第8次調査区の8B・9層は、第55次調査区の6b層が2つに分離したもの、すなわち、6b層の上部が耕作され水田土壤となったものが8B層、下半の水田土壤化されなかった6b層が9層であることが推察される。9層の下面が平坦なこと、さらに、層厚が薄かったと推定される箇所では8B層の存在はあっても9層が分布しないということはこれを傍証するものと考える。

以上のような見地からすると、3調査区は同一時期における水田耕作域（第1・8次調査区）と非耕作域（第55次調査区）の関係であり、第55次調査区6b層上面は、第1・8次調査区の7層上面・8B層上面に相当する。従って、第55次調査区両流路跡の検出層位は、中間地点である第1次調査区では矛盾は認められない。さらに、第8次調査区においても、上層のものについては問題は生じない。しかし、下層の7号溝跡については一枚上の層で検出されている。

この7号溝跡について検討を加えた結果、堆積土としたもののうち、上部の堆積土は9層に酷似している。これは第55次調査区で1号河川跡の上部に、直上層の6b層及びその類似層が堆積していた状況と全く同一で、これは7号溝跡が9層上面のものではなく、本来、10層上面の遺構であることを示唆するものと考えられる。

以上に基づけば、2流路跡は3つの調査区において検出層位の矛盾は認められず、第55次調査区で検出されたSR 1は2号溝跡（1次）・7号溝跡（8次）と、SD 1は1号溝跡（1次）・

第15表 富沢遺跡第1次・8次・55次調査区層位対応表

富沢第55次			富沢第1次			富沢第8次			特 微	土たる色調	土たる土質
層位	水田	流路	層位	水田	流路	層位	水田	流路			
4	?	-	-	-	-	5A	畦	S D4	褐色	灰黄褐色	粘土
5	?	4	?	-	-	5B	?	-	褐色	黑褐色	-
-	-	-	-	-	-	P	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	5C	-	-	-	に赤い黄褐色	粘土質シルト
-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	砂
-	-	-	-	-	-	7B	?	S D5	-	暗褐色	粘土
6 a	-	6a+b	-	-	-	7C~8A	-	-	互層	黒褐色・褐色	泥炭質粘土
-	-	-	7	耕	S D1	8B	畦	S D6	-	黒褐色	~粘土
6 b	-	S D1	8	-	-	9	-	S D7	-	-	-
7上	-	S R1	9a	-	-	S D2	10	-	植物遺体多量含	黑色	-

\*畦…畦畔検出 耕…水田耕作土のみ検出 ?…水田耕作土の可能性

6号溝跡（8次）と明らかに同一遺構であることが推測される。

なお、2流路跡の性格であるが、下層のS R 1は流水の集まりやすい谷地形の谷心線上付近に沿って流下した小河川で、S D 1はこの小河川の埋没過程で生じた窪みを改修した水路である。また、この水路を伴う水田は、第55次調査区では耕作が行われておらず、非耕作域となっている。

以上のことまとめると以下のようになる。

1. 第55次調査によって、第8次調査区検出の8B層水田跡は自然堆積層である9層を堤辺し水田耕作土とした可能性が濃い。
2. 従って、富沢遺跡南東部でこの水田跡より古段階の水田跡の存在は、現段階では明確ではない。
3. 第55次調査区検出のS R 1・S D 1は、第1次調査区の2号溝跡・1号溝跡、第8次調査区の7号溝跡・6号溝跡と同一のものと考えられる。
4. S R 1・2号溝跡・7号溝跡は、8B層水田跡の母材となる層の直下層上面に形成されたと考えられる自然流路一小河川である。
5. S D 1・1号溝跡・6号溝跡は、8B層水田跡に伴う水路である。この水路は上記小河川の埋没過程で生じた窪みを改修して造られている。

第16表 富沢遺跡第52次～第56次、山口遺跡第11次・第12次調査出土遺物集計表

## 富沢遺跡第52次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
2a 層上面	1		2			1									
2a 層			4			1									
3a 層			1												
3b 層		(1)													
計	1	1	7		2										

## 富沢遺跡第52次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
1層	1			1	1	38	12	2	1		3				古銭1
2層	3					1									
4a 層	4		1								1				
6a 層	6		3												
6b 層	3														
6c 層															
計	17		4	1	1	59	12	2	1	2	3				1

## 富沢遺跡第53次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
1層	7					2	2								
2層						3		1	1						
3層															
4層上面	1	8													
4層		2													
5層		1													
計	1	11	2	1	2	2	3	1							

## 富沢遺跡第54次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
2層						1									
3層	2					4									
4層	4														
10層											1				
計	6					5					1				

## 富沢遺跡第55次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
1層	1	1													
3層	1														
4層	9														
6層	7														
6a層	2														
計	19	1	1												

## 富沢遺跡第56次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
1b層	1	1													
4層	2				1										
計	3	1			1										

## 山口遺跡第11次調査

遺構・層位	土師器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	判別不能の 素燒土器	陶器	磁器	瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	杭	種子	その他
3層		1													
計		1													

### 山口遺跡第12次調査

遺構・部位	土器	赤陶土器	須恵器	瓦質土器	特別な形の 素燒土器	陶器	鉄器	丸	土製品	石器	石製品	金屬製品	杭	機子	その他	
1号						2										
2 b層	3		1											79		
3層			1												横木等5	
4層	24	24	17		4							1			2	木材10
7層										1						
8 c層										1						
21	25	24	19		4	2				2		1	79	2	15	

### 引用・参考文献

- 丁藤哲司他 1984『富沢水田遺跡－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書』仙台市文化財調査報告書第67集 仙台市教育委員会
- 斎野裕彦他 1987『富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1988『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1989「第2章第11節 富沢遺跡第46次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡－富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・山口遺跡第5～8次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第128集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1990「富沢遺跡第49次」『富沢遺跡第49次・東光寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財調査報告書第142集 仙台市教育委員会
- 庄子貞雄・山田一郎 1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡研究所
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 田中則和他 1984『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集 仙台市教育委員会
- 豊島正幸 1987「富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 平間亮輔他 1989『富沢・泉崎浦・山口遺跡－富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・山口遺跡第5～8次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第128集 仙台市教育委員会
- 平間亮輔 1989「富沢遺跡とその周辺における条里型土地割について」『条里制研究』第5号 条里制研究会
- 藤原宏志・佐々木章・保野敏子 1989「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』第21号 日本文化財科学会
- 吉岡恭平 1989「第3章1 泉崎工区」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書I』仙台市文化財調査報告書第126集 仙台市教育委員会
- 渡部弘美 1987「富沢遺跡発掘調査」『年報8』仙台市文化財調査報告書第107集 仙台市教育委員会

調査参加者

相澤 史子	青山 博樹	青山 諒子	浅野ヤン子	浅見 シゲ	浅見 禮子	阿部 高子
阿部みのる	阿部 幸夫	阿部八重子	阿部 洋子	阿部よね子	井口 彰文	石垣 翠子
板橋喜恵子	板橋 静江	板橋スエノ	板橋 孝子	伊藤 貞子	伊藤 征子	伊藤 律子
人間川きみ	植野 幸子	植野美登子	遠藤タイ子	遠藤 照子	太田 兼也	大友 節子
大友フミ子	大沼みさほ	大庭チニ子	大森 緑	小田島智恵子	鬼沢 悅子	小野つや子
加賀美要子	加島みえ子	柏倉セツ子	菊地つね子	菊地 道代	小池 房子	鴻巣つや子
越田知左子	小林 斎美	小林 三佳	斎藤 彰裕	斎藤とき子	斎藤由美子	斎藤 玲子
佐久間長子	佐々木志津	佐竹さく子	佐藤 祥子	佐藤ちよし	佐藤とみ子	佐藤 紀子
佐藤 みよ	佐藤よし江	庄子 一浩	庄司けき子	庄子 孝子	須賀 栄子	菅井キノエ
菅井 君子	菅井きみ子	菅井 清子	菅井ちよの	菅井美枝子	菅田みき子	菅田わくり
菅谷 裕子	鈴木 いし	鈴木かつ子	鈴木 幸子	鈴木よしえ	閑 八重子	閑谷 栄子
高橋 美香	高橋コシ子	高橋 良子	高山 紀子	高山ゑつ子	武田 知之	武田 芳子
竹森 光子	千田あや子	千田タイ子	永野 泰治	西原 聰美	蓮沼 英子	蓮沼 秀子
早川 裕子	原田由美子	針生 昭三	星 愛子	星 レイ子	洞口 秋子	牧 かね子
松川 有美	三浦 市子	三浦 芳子	宮嶋 都	村井二郎松	村上 令子	村田 佳子
守谷 恵子	八嶋 伸明	山田千代子	山田 貞子	山田やす子	吉田八重子	我妻美代子
渡辺イチ子	渡辺 幸子	渡辺 久子	渡邊 洋子	渡部 麗子		

# 写 真 図 版

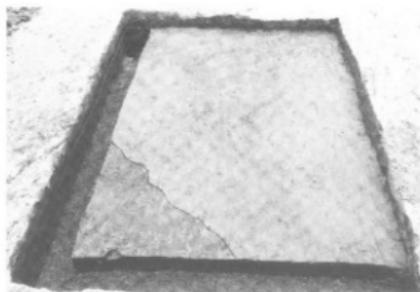


写真1 富沢遺跡第50次調査 3層上面段差部分

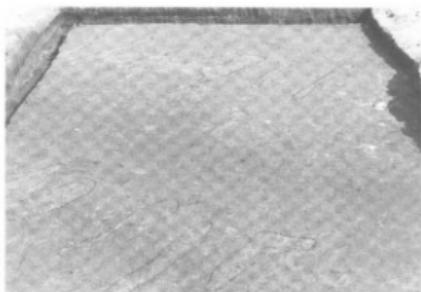


写真2 富沢遺跡第51次調査 4層上面小溝跡群確認状況



写真3 富沢遺跡第51次調査 4層上面小溝跡群発掘状況

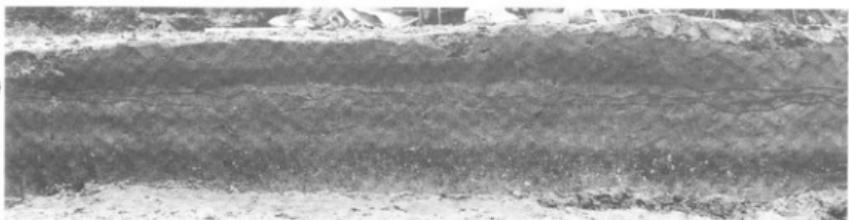


写真4 富沢遺跡第51次調査 調査区東壁断面



写真5 富沢遺跡第52次調査 6a 層水田跡(南より)

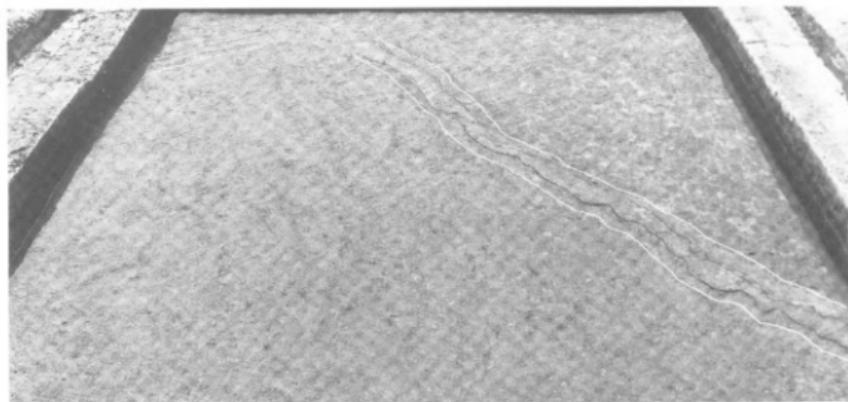


写真6 富沢遺跡第54次調査 11層水田跡(南より)

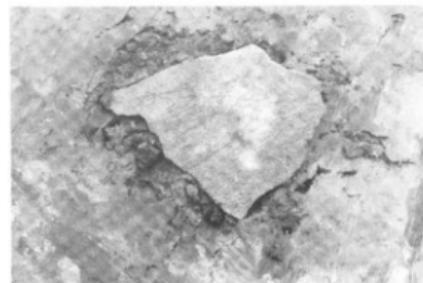


写真7 富沢遺跡第52次調査 6c 層中石器出土状況

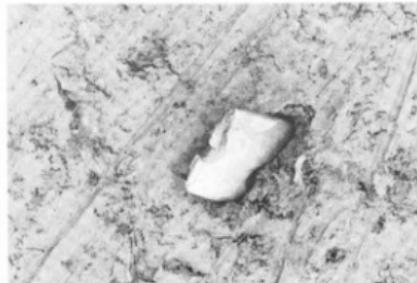


写真8 富沢遺跡第54次調査 11層水田跡石器出土状況

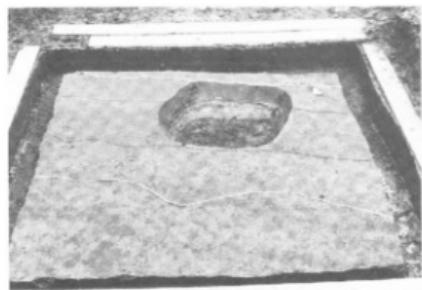


写真9 富沢遺跡第53次調査 4層水田跡(北より)

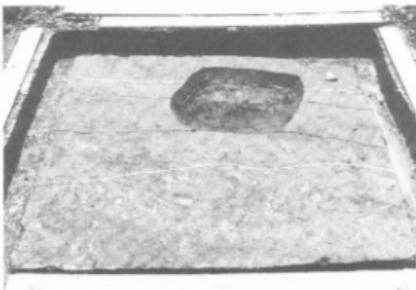


写真10 富沢遺跡第53次調査 5層水田跡(北より)

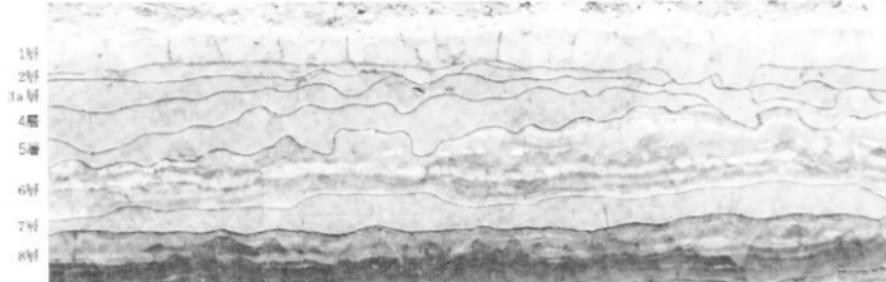


写真11 富沢遺跡第53次調査 4・5層水田跡大畦畔断面(調査区西壁)

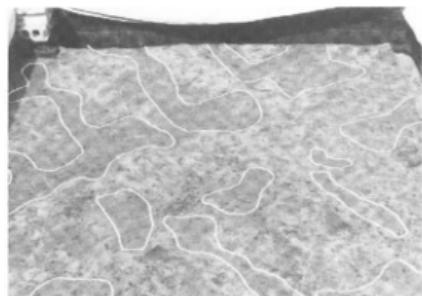


写真12 富沢遺跡第53次調査 10層水田跡確認状況(東より)

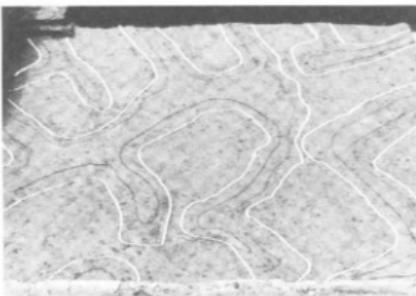


写真13 富沢遺跡第53次調査 10層水田跡(東より)

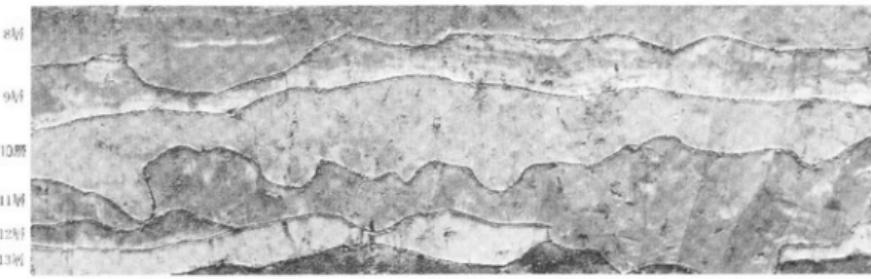


写真14 富沢遺跡第53次調査 10層水田跡大畦畔断面(調査区北壁)



写真15 富沢遺跡第53次調査 10層水田跡(北より)



写真16 富沢遺跡第53次調査 11層水田跡(北より)

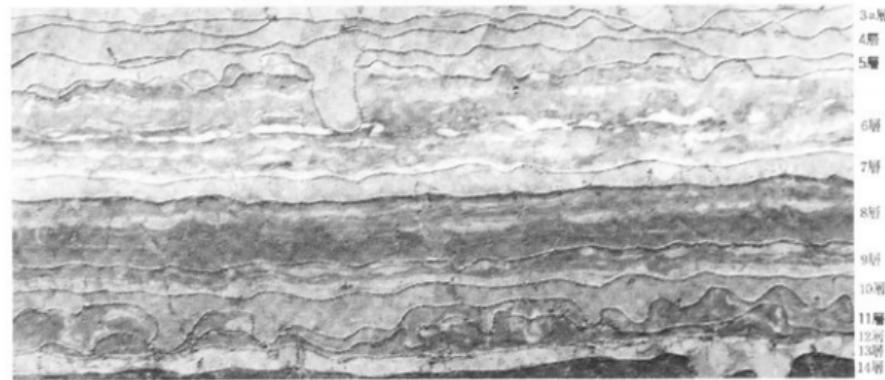


写真17 富沢遺跡第53次調査 4・5層水田跡大畦畔、11層水田跡畦畔断面(調査区東壁)

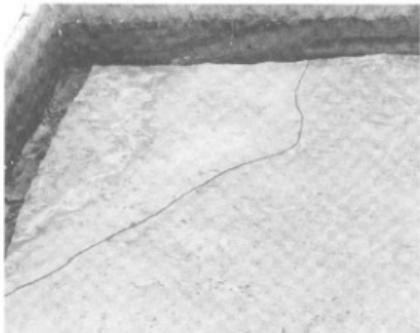


写真18 富沢遺跡第55次調査 SR 1 確認状況(東より)

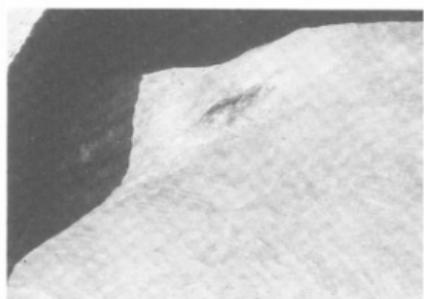


写真19 富沢遺跡第55次調査 SR 1 完整状況(東より)

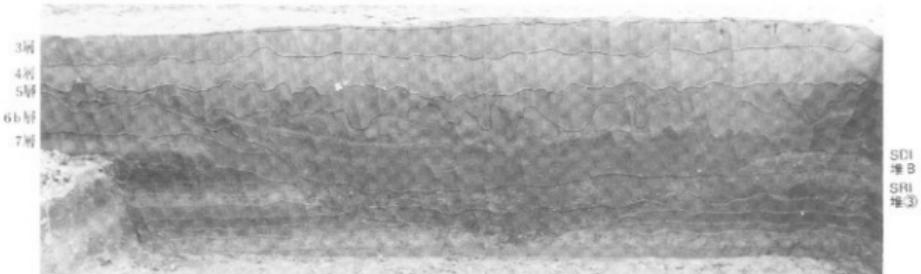


写真20 富沢遺跡第55次調査 SD 1・SR 1 断面(調査区南壁)

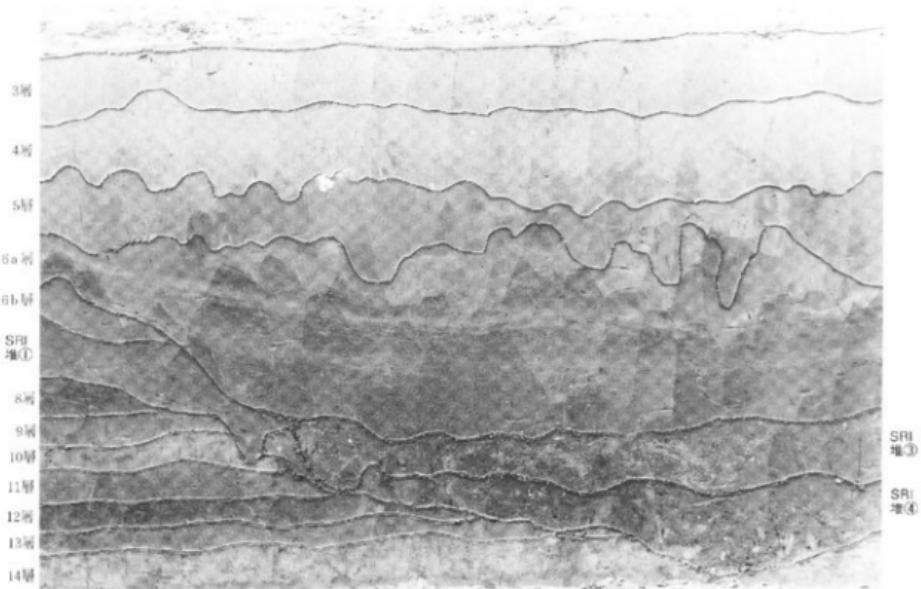


写真21 富沢遺跡第55次調査 SD 1・SR 1 断面拡大(調査区南壁)

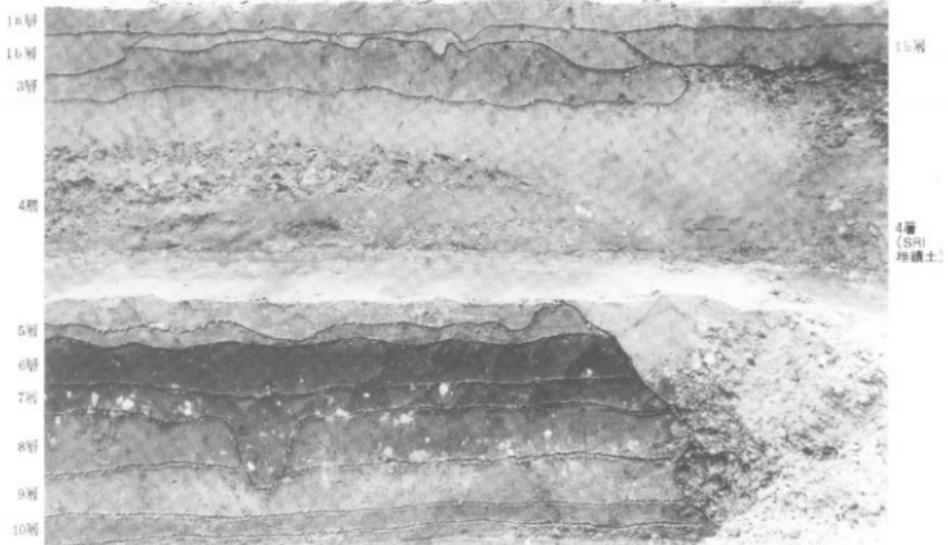


写真22 富沢遺跡第56次調査 S R 1 断面(調査区南壁)



写真23 山口遺跡第11次調査 S R 1 確認状況(東より)

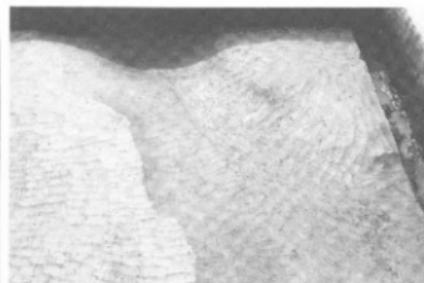


写真24 山口遺跡第11次調査 S R 1 実掘状況(東より)

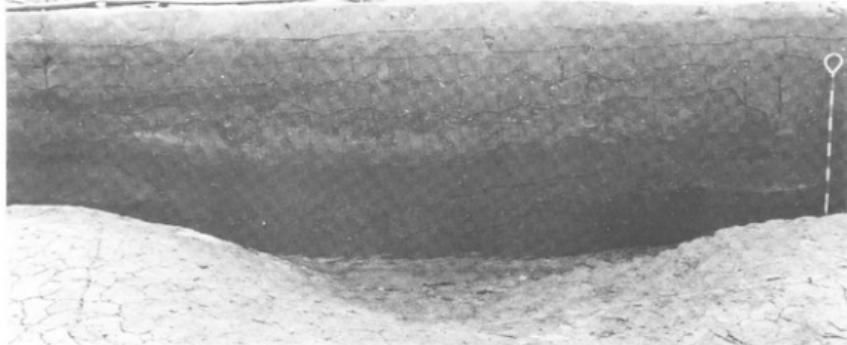


写真25 山口遺跡第11次調査 S R 1 断面(調査区西壁)

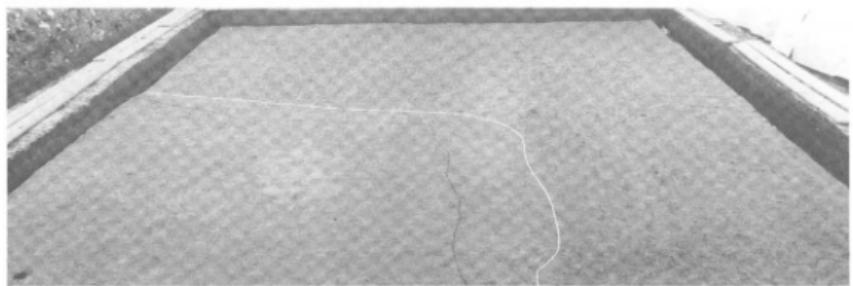


写真26 山口遺跡第12次調査 3層水田跡上面状況(東より)



写真27 山口遺跡第12次調査 4層上面状況(北西より)

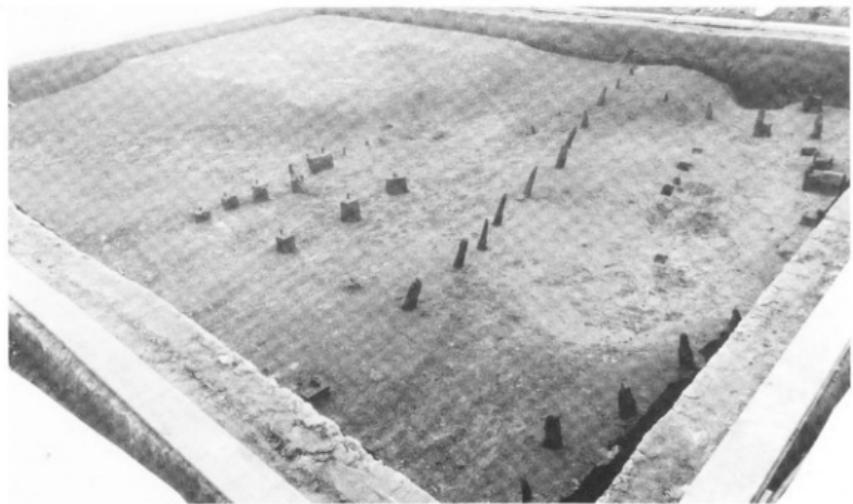


写真28 山口遺跡第12次調査 3層水田跡枕配置及びSR1(北西より)

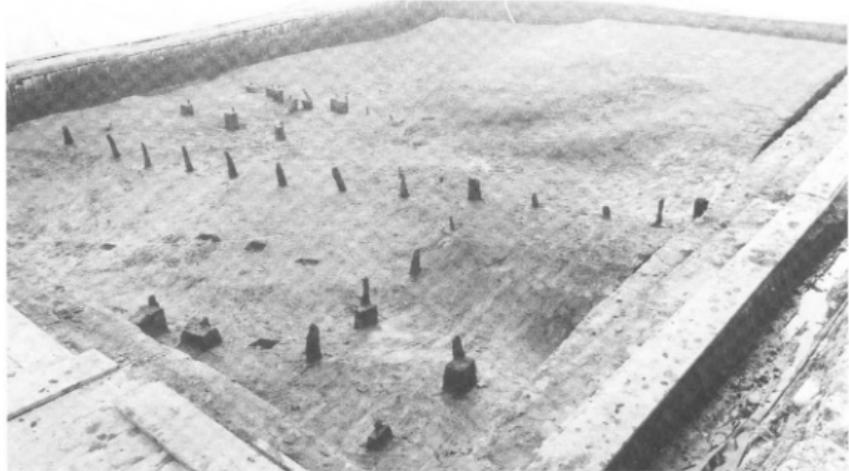


写真29 山口遺跡第12次調査 3層水田跡杭配置及びSR 1(南西より)



写真30 山口遺跡第12次調査 3層水田跡杭配置及びSR 1(南東より)



写真31 山口遺跡第12次調査 3層水田跡第6杭列断面(南より)



写真32 山口遺跡第12次調査  
3層水田跡第1杭列断面(北西より)



写真33 山口遺跡第12次調査 3層水田跡横木(南西より)



写真34 山口遺跡第12次調査 3層水田跡横木(北東より)

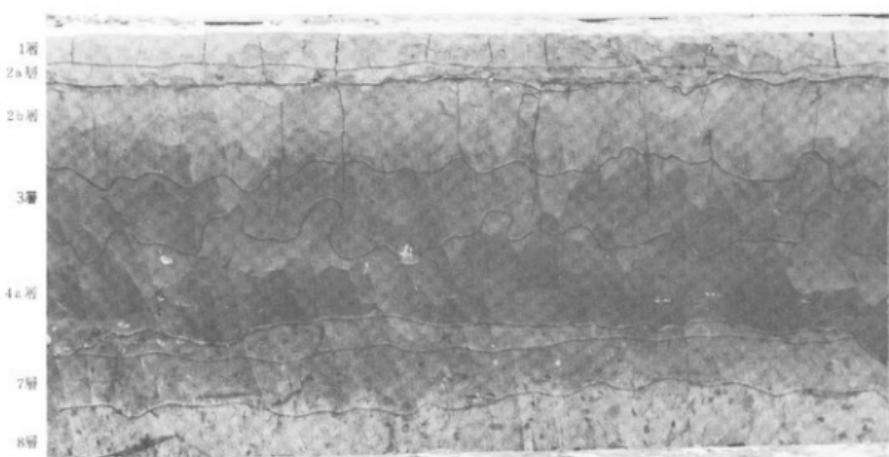


写真35 山口遺跡第12次調査 3層水田跡耕作土断面(調査区西壁)

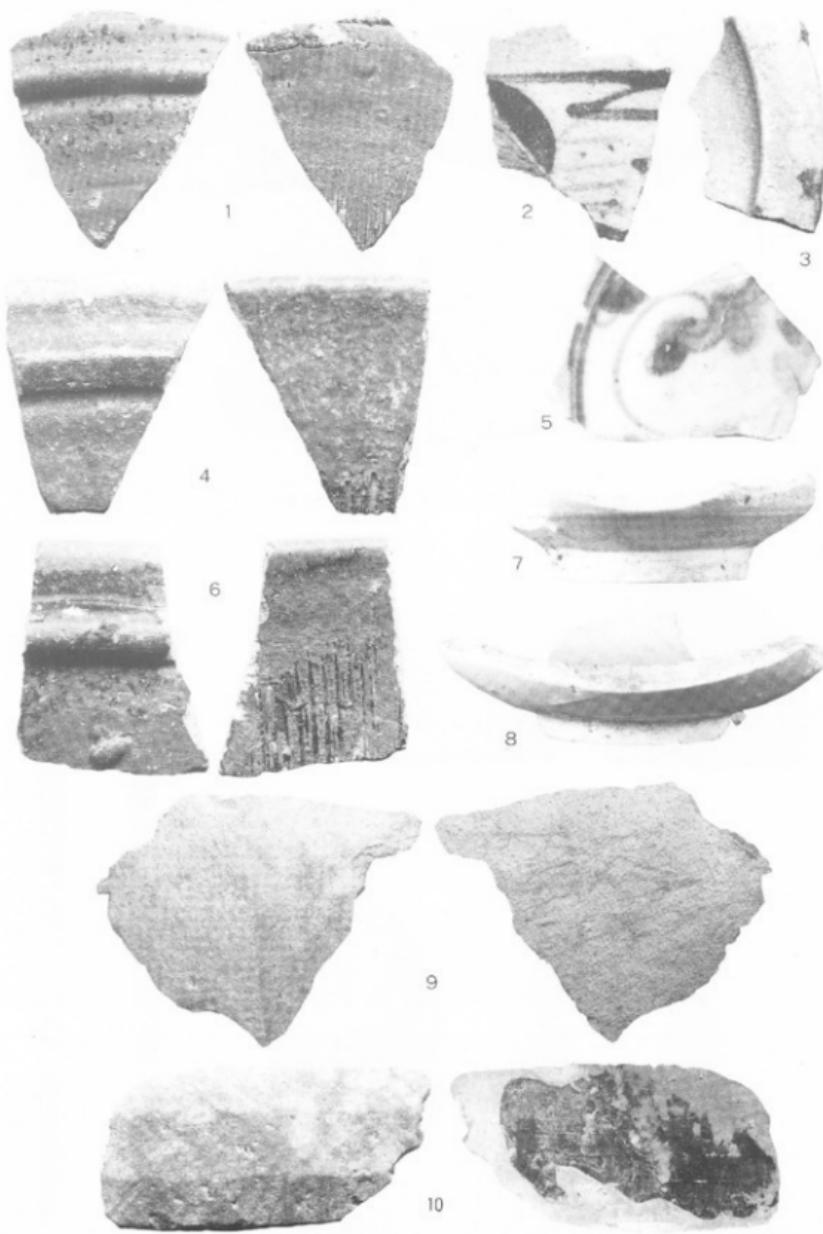


写真42 富沢遺跡第52次調査 出土遺物

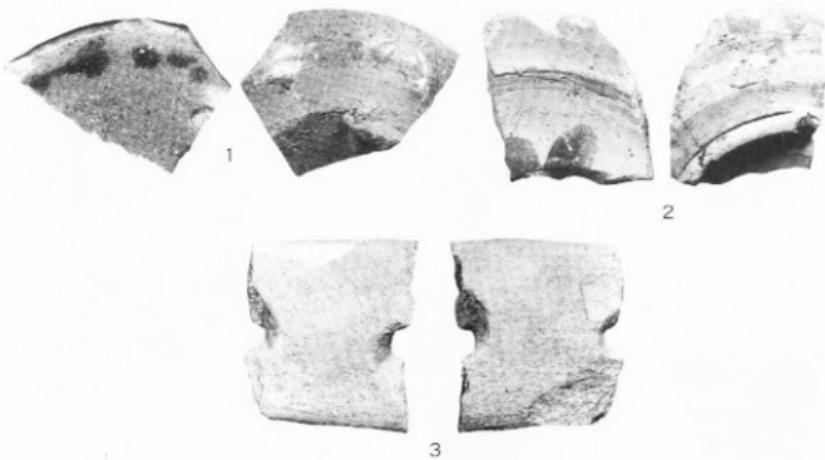


写真43 宮沢遺跡第54次調査 出土遺物

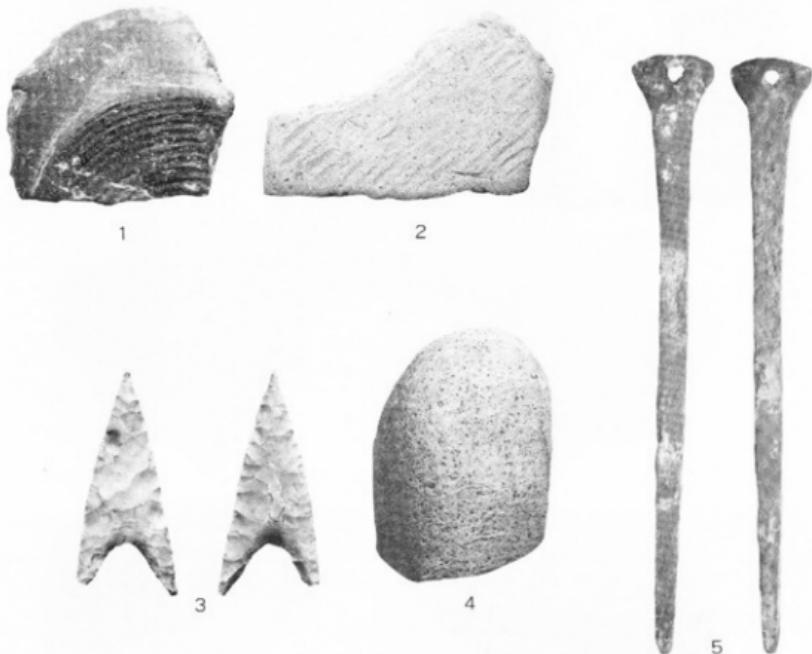
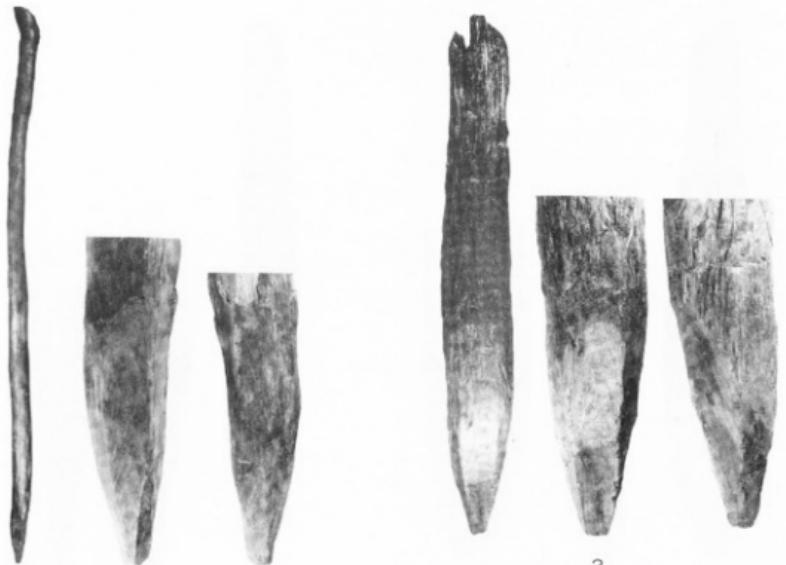


写真44 山口遺跡第12次調査 出土遺物(1)



1

2



3

4

写真45 山口遺跡第12次調査 出土遺物(2)



1



2



3



4

写真46 山口遺跡第12次調査 出土遺物(3)

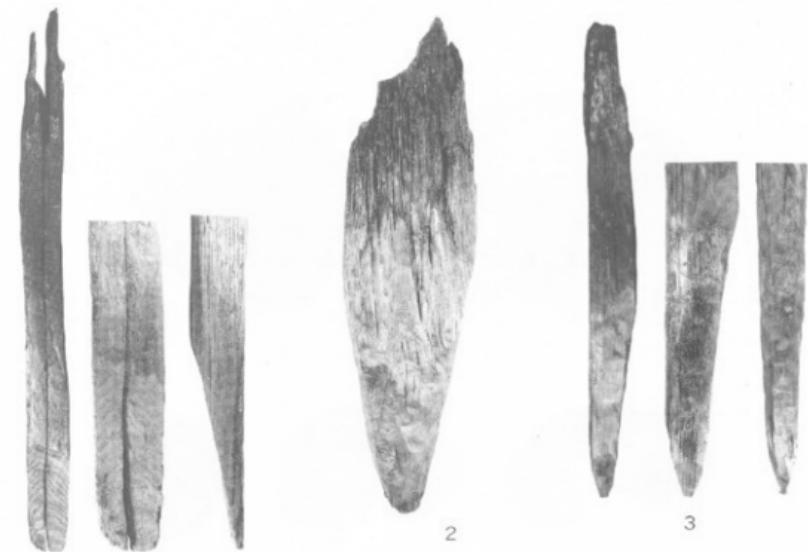
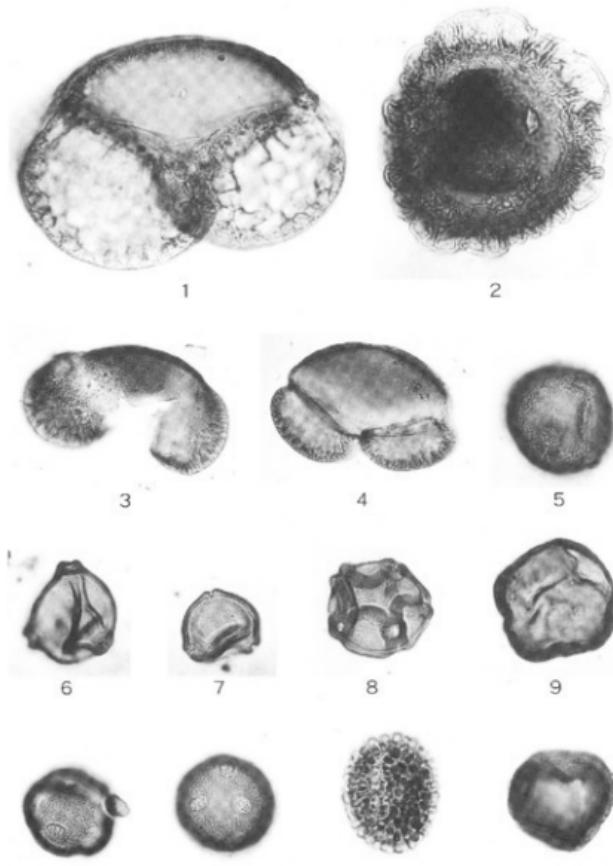
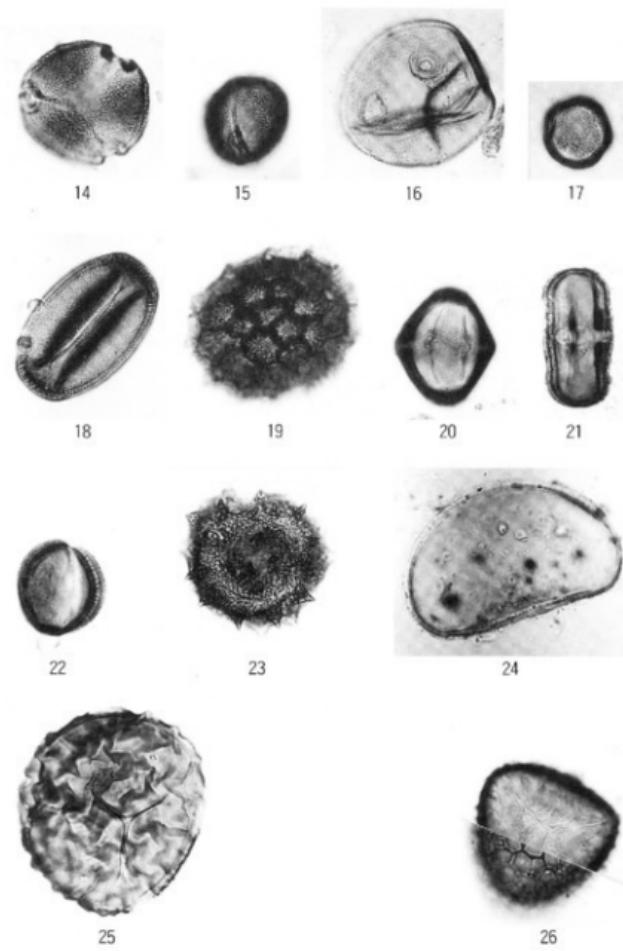


写真47 山口遺跡第12次調査 出土遺物(4)



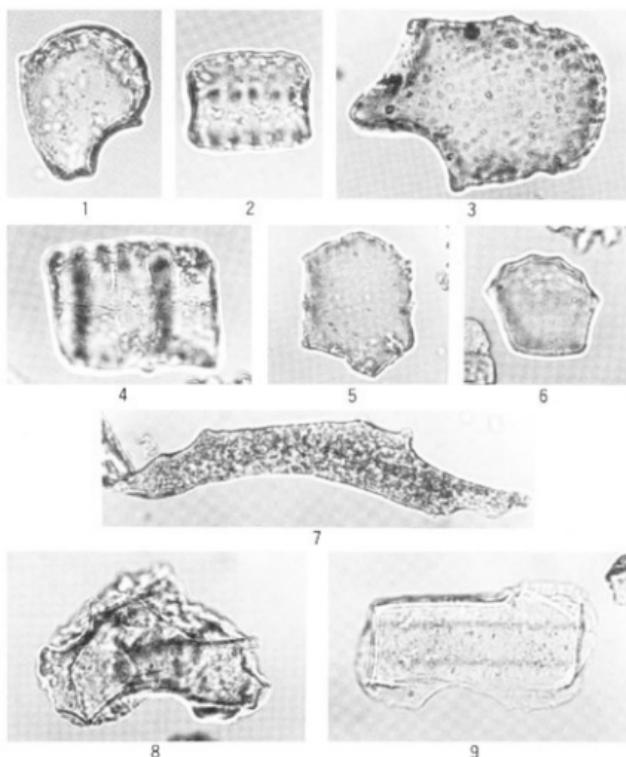
1 . <i>Pinus</i>	30層 × 800	8 . <i>Alnus</i>	30層 × 800
2 . <i>Tsuga</i>	30層 × 800	9 . <i>Ulmus</i>	30層 × 800
3 . <i>Picea</i>	30層 × 400	10. <i>Liquidamber</i>	30層 × 800
4 . <i>Abies</i>	30層 × 400	11. <i>Liquidamber</i>	30層 × 800
5 . <i>Fagus</i>	30層 × 800	12. <i>Ilex</i>	30層 × 800
6 . <i>Betula</i>	30層 × 800	13. <i>Lagerstroemia</i>	30層 × 800
7 . <i>Corylus</i>	30層 × 800		

写真48 富沢遺跡第52次調査花粉顕微鏡写真(1)



- |                        |     |       |                                      |     |       |
|------------------------|-----|-------|--------------------------------------|-----|-------|
| 14. <i>Nyssa</i>       | 30層 | × 800 | 21. Umbelliferae                     | 30層 | × 800 |
| 15. <i>Nyssa</i>       | 30層 | × 800 | 22. <i>Artemisia</i>                 | 30層 | × 800 |
| 16. Gramineae          | 31層 | × 800 | 23. Carduoideae                      | 30層 | × 800 |
| 17. <i>Thalictrum</i>  | 30層 | × 800 | 24. I lete type FS                   | 32層 | × 800 |
| 18. <i>Bistorta</i>    | 32層 | × 800 | 25. <i>Lycopodium inundatum</i> type | 29層 | × 800 |
| 19. <i>Persicaria</i>  | 30層 | × 800 | 26. <i>Lycopodium</i>                | 32層 | × 800 |
| 20. <i>Sanguisorba</i> | 32層 | × 800 |                                      |     |       |

写真49 富沢遺跡第52次調査花粉類微鏡写真(2)



No.	分類群	地 点	試料名	倍 率
1	イネ	52次	6 a 層	400
2	イネ（側面）	52次	6 a 層	400
3	ヨシ属	53次	11 層	400
4	タケ亜科（ネザサ節）	52次	7 層	400
5	タケ亜科（クマザサ属）	53次	11 層	400
6	ジュズダマ属	52次	8 層	400
7	樹木起源	53次	9 層	400
8	樹木起源？	53次	11 層	400
9	不明（茎部？）	52次	6 a 層	400

写真50 富沢遺跡第52・53次調査プラント・オパール顕微鏡写真

## 文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係		調査第一係	
係長	鶴田義幸	係長	佐藤 隆
主事	白幡靖子	主任	田中則和
〃	山口 宏	教諭	太田昭夫
〃	佐藤良文	主任	條原信彦
〃	高橋三也	〃	木村浩二
		主事	吉岡恭平
		教諭	橋本光一
		主事	斎野裕彦
		教諭	高倉祐一
		主事	大江美智代
調査第二係		〃	
係長	加藤正範	教諭	渡辺雄二
主任	熊谷幹男	主事	佐藤 淳
教諭	佐藤好一	〃	渡辺 紀

---

仙台市文化財調査報告書第135集

### 富沢・泉崎浦・山口遺跡(2)

—富沢遺跡第50～56次、山口遺跡第11・12次  
発掘調査報告書—

平成2年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区団町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2  
TEL 236-7181

---

